

メンドザ 聞いたつて構ひません。奴等は皆自分を泡だと思つて、他の者の滓だと云はれるのを聞くと喜びますから

タナア やあ、君は中々旨い事を云ふね（メンドザは得意になつて頭を風める）君に無遠慮な

事を聞いてもいゝかい

メンドザ どんな無遠慮な事でも構ひません

タナア 君程の才幹の人が兎の焙肉や霸王樹を食つて、こんな連中を引廻してゐて其で合ふものかね。君丈の才幹もなく又大丈夫君丈の正直さもない奴が、よくサヴ

オイ、ホテルで鴛鳥の肝臓のバイを食つて、シャンペインを飲んでゐるぢやないか

メンドザ なに、奴等だつて始は兎の焙肉で我慢して來たんですよ。私も其内にやサ

ヴオイへ行ける様になります。否、實は今迄にも行つてゐた事があるんです——但

し給仕としてですがね

タナア 給仕！ 此は驚いた

メンドザ（回想する様に）え、此シエラのメンドザも元は給仕だつたんです。私が何

處の事でも知つてゐるのも多分其故でせう（突然強い勢で）私の身上話をしませうか

ストレイカー（恐れる様に）餘り長くねえようだつたら……

タナア（言葉を遮つて）シシィ、君は俗物だな。浪漫なんかありやしない。（メンドザに）主

領、中々面白くなつて來た。ヘンリイなんか構やしない。嫌だつたら眠つて終ふ

から

メンドザ 私の愛してゐました女が……

ストレイカー やあ、此は艶物語と來たね。よし、まあ遣りねえ。私は又君が自分の

話をするんぢやないかと其を氣遣つて居たんだ

メンドザ 自分の話！ なに私や彼女のために自分を棄て、終つたんだ。此處へ來て

ゐるのも全く其故です。なに、構はない。私や彼女のお蔭で此世はもうない物と

諦めてゐるんだから——ほんとですよ、其女は實に見事な髪をした、中々面白い

女で、頭腦も伶俐なりや、料理なども實に旨いものでした。其に其女は非常に高い氣質で、其がために何とも分らない不確な、變りつばい、移り氣な、残酷な、一言で云ふと人を恍惚かす様な女になつて終つたんです

ストレイカア 料理の上手な處を除けると、流行の小説本にある女其儘だ。名はレディ、グラッデイス、ブランテジネットとでも云ひさうぢやねえか

メンドザ 否、其女は伯爵の令嬢ぢやありません。私は雑誌などに出てゐる複製寫真で、英國貴族の娘の顔はよく見慣れてゐますが、正直な處私はあの女の微笑のためなら、運命も、顔も、持參金も、衣類も、肩書も何も彼も賣つて終ひます。其でも其女は平民の娘、つまり労働者でした。でなかつたら——君の様に構はず云ひますが——私や相手にやしません

メンドザ 成程ね。で、其女は君の愛に酬ひたなかね

メンドザ 酬ひて呉れたら私や今此處にやゐません。其女は猶太人と結婚するのは嫌

だと云ふんです

メナア 宗教上の理由でか

メンドザ 否、其女は宗派などは構はない自由信者でした。云ふには猶太人は皆心の内で、英國人を不潔と思つてゐるから嫌だと云ふんです

メナア(驚いて) 不潔だつて

メンドザ 此で見ても其女がどの位世間に明いかわりませう。今のは實際ですからねえ。私共種族では衛生上の規則は中々やかましい物ですから、不都合な事ながら其點では他國民を馬鹿にしてゐますよ

メナア ヘンリー、君はこんな話をきいた事があるかい

ストレイカア 私の妹がよくそんな事を云つてゐましたつけ。彼女は一度猶太人の家に料理女を勤めてゐた事がありましたから

メンドザ 私にや其は打消せませんでしたし、又其女の受けた印象も奇麗に消す事は

出来ませんでした。他の故障なら取除く事も出来ますが、どんな女でも身體に就ての不潔など云ふ疑は辛棒しちや呉れません。で、いくら頼んで見ても無駄で、女は何日も妾は貴方に釣合ひませんと云つて、私の大嫌なりベッカ、レザラスと云ふ嫌な酒場女と結婚せいと云ふんです。其で私は自殺すると云ふと、此でなさいと云つて甲蟲の毒を入れた袋をよこすし、聞かなきや殺すと云へば、ヒステリイになるんです。で、私や死ぬ譯にも行かんし、又女が二階へ殺しに忍び登つて来る處などを夢に見て、眠らずにゐる様でも可哀相と思つて亞米利加へ行きました。亞米利加では最初西の方へ行き、不圖汽車を止めてお尋ね者になつてゐる男と出逢し、其男から南歐羅巴で自働車を止める考を教はつたんです。失望して自暴になつてゐる者には屹度いゝ考で、やがて其男が私を其方の資本家に、色々紹介して呉れました、其處で企業組合を作り、其結果此が出来上つた譯です。猶太人は何日も頭腦と想像力とで物の首領になります、私も矢張り其の首領と

なつたんです。併し私は種族の誇りはあるにしても、持つてゐる物を皆出して英國人になり度いと思ひます。私はまるで小供の様です。始終其女の名を立木に彫つたり、頭文字を芝生に書いたりして、一人の時には横に臥て頭の毛を搔掻りながら、ルイザと叫んでゐるんです……

ストレイカア(吃驚して) なに、ルイザ

メンドザ 其が女の名です。——ルイザ……ルイザ、ストレイカアと云つて……

タナア ストレイカアとは驚いた

ストレイカア(憤然として膝で起上りながら) これ、ルイザ、ストレイカアは私の妹だぜ、よし

か。彼女の事をこんなにべら〜饒舌りやがつて、一體どうする積りだ。彼女がお前に何の関係があるい

メンドザ 此奴はまるで芝居の様な符合だ。ぢや君が彼女の好きな兄貴のエンリイさんだね

ストレイカー なに、生意氣なエンリイさんだと。何の因縁があつて私や妹の名をそんなに呼びやがるんだ。愚圖々々吐かすと鈍頭を打碎くぞ

メンドザ(嫌に沈着拂つて) さうさして上たら、後で妹に其自慢話をして呉ますか。自慢話をしたら彼方でも此メンドザの事を思出して呉るだらう。其なら私は本望だ

メナア ヘンリイ此は眞の眞情だ。君はあれを尊重しなくつちやいけないよ  
ストレイカー(猛烈に) なに、臆病なんぞさ

メンドザ(飛起きて) 臆病だど。これ若いの、俺の家は代々名代の拳闘師なんだよ。

妹にきいて御覧、俺に向つちや乳母車が自働車に向つた程の勝目もないんだぞ  
ストレイカー(心では慄つとしてゐながら、向見ずの喧嘩好らしい態をして立上る) お前なんか怖かねえ

んだ。ルイザ、ルイザと生意氣な。ストレイカー嬢でもお前にや過ぎてらい

メンドザ 彼女がさう云ふかどうか、聞いて見たまへ

ストレイカー(益々怒つて) やい……

メナア(急ぎ立上つて仲裁する) これ止せ。君が首領の相手になれるにしても、此處の者皆

と鬨ふ譯にや行くまい。まあ坐つて仲好くしたらどうだ。猫でも王様を見られると云ふ喻もある通り、山賊の主領だつて君の妹に惚れるに不思議はないぢやないか。總じてこんな家の誇りなんてものは舊弊な詰らない事なんだ

ストレイカー (鎮つてはゐるが其てもまだ沸々云ひながら) 惚れたつて構はねえが、妹が惚れたと云はれちや癩に觸らあ(不承無性に芝の上に座つて) 黙つて聞いてゐりや、知らねえ者は彼女の方から追かけて歩いてた様に思ひまさあね (二人の方に背を向け氣を沈着けて眠らうする。今は他の者は皆熟睡して終つてゐる)

メンドザ (山中の静な星の光の下に同情ある聽人と、事實上二人切てゐるのに氣がつくと、前よりは一層狂れしくなつて、メナアに) 彼女も恰度此通りでしたよ。頭は二十世紀迄も進んでゐたが、社會上の偏見とか同族の愛情とか云ふ物は、中世紀迄も後れてゐました。ああ、沙翁の言葉は實によく吾々の感情を歌つたものですねえ

我は戀しのルイザを。四萬の同胞の

其愛を合すとも我が心には及ばじ——

まだ先があつたが忘れて終ひました。何なら迷とでも、向見ずとでも仰つて下さい。私は相當手腕のある強い人間で、十年も辛棒すれば一流の旅館の主人にもなれるのでしたが、不圖彼女に逢つて……此通り、今は山賊です。お尋者です。沙翁でさへ私の思の半も云つちや呉れません。私に彼女の事を書いた詩を少し讀まして下さい。文學としては定めし價値は乏しいでせうが、他人の言葉を借りるよりははずつとよく私の心持を現はしてゐます（旅館の勘定書の用紙に一杯何か書いたものを一束取出して、火を棒で掻き立て、燃上らせながら、其傍に蹲んで讀む）

タナア（相手の肩を荒つぽく叩いて）そんな物は燃して終ひたまへ

メンドザ（吃驚して）え、

タナア 君は一事狂に自分の一生を過たうとしてゐるんだ

メンドザ 其は私も知つてゐます

タナア 否、知らないんだ。實際自分でどんな事を爲てゐるか知つてゐたら、誰も自分になんな怖ろしい罪惡は犯しやしない。君は此莊嚴な山を眺め、此崇高な空を見上げ、此心地よい空気を吸つてゐながら、ブルムズベリイの二階に住んでゐる三文武士のような事をよく云へたものだね

メンドザ（頭を振つて）始めの珍し味がなくなると、シエラもブルムズベリイも變りはありません。其に此山は妙に女を——立派な頭髪の女を思はせる山です

タナア 詰りルイザをと云ふんだね。併し僕にや女は思はせないよ。僕は女は嫌だ

メンドザ まあ、明日の朝迄そんな高慢は言はずにお置きなさい。此處は妙に夢を見させる處ですよ

タナア ふむ、ちや何方か見て見やう。お休み(横になり氣を落付けて眠やうとする。メンドザも吐息をして同じ様にする。少時の間シィエラは静閑としてゐる。やがてメンドザは突然起上つてタナアに頼む様に云ふ)

メンドザ 眠つてお終ひなさる迄に、どうぞ二三行讀まして下さい。私は眞實に貴方の御批評が聞き度いんです

タナア (眠さうに) 讀みたまへ。聞いてゐるから

メンドザ I saw thee first in Whitsun week

Louisa, Louisa——

(私はお前に始めてホイットサン、ウィクに逢つた。ルイザ、ルイザ……)

タナア (目を醒して) 首領、ルイザは大變い、名だが、ホイットサン、ウィクとは韻が合はないよ

メンドザ 無論合ひません。ルイザは韻ぢやなくつて折返です

タナア (うつとりして) あゝ、折返か。此は失敬、遣りたまへ

メンドザ 事に依つたら、あれはお氣に入らんかも知れませんが、此方の方なら少しはいってせう(豊かな柔い調子、緩い拍子で讀上げる)

Louisa, I love thee.

I love thee, Louisa.

Louisa, Louisa, Louisa, I love thee.

One name and one phrase make my music, Louisa.

Louisa, Louisa, Louisa, I love thee.

Mendoza thy lover,

Thy lover, Mendoza,

Mendoza adoringly lives for Louisa.

There's nothing but that in the world for Mendoza.  
Louisa, Louisa, Mendoza adores thee.

(ルイザ、私はお前を愛する。)

私はお前を愛するよ、ルイザ。

ルイザ、ルイザ、ルイザ、私はお前を愛する。

一つの名と一つの句で私の音楽が出来る、ルイザ。

ルイザ、ルイザ、ルイザ、私はお前を愛する。

メンドザ、お前の戀人

お前の戀人のメンドザ

メンドザは戀焦れてルイザのために生きてゐる。

メンドザに取つては、世の中に其より外に何も無い

ルイザ、ルイザ、メンドザはお前を慕ふてゐる。)

(我ながら感心して) こんな好い名には美しい詩を編出して、何の手柄にもなりやしない。ルイザは實に好い名でせう。え、？

タナア (殆んで眠りかけて只幽な呻聲をする)

メンドザ O wert thou, Louisa,

The wife of Mendoza,

Mendoza's Louisa, Louisa Mendoza,

How blest were the life of Louisa's Mendoza!

How painless his longing of love for Louisa!

(あゝ、若しお前が、これ、ルイザ

メンドザの妻であつたなら——

メンドザのルイザ、ルイザ、メンドザ——

ルイザのメンドザが一生は、如何に幸福となるだらう

ルイザを慕ふ憧憬は、如何に苦痛なきものとなるだらう)

此は眞實の詩だ。眞情から出た、眞情中の眞情から出た誠の詩だ。どうぞせう、此で彼女の心は動かないでせうか(答がない。諦めて)何日も同じだ、眠て終つてゐる。世間中の者には駄句かも知れんが、自分には天來の音楽だ。他人に情を打明けた

のは我ながら愚だつた。(眩きながら氣を落付けて寐やうとする) Louisa, I love thee; I

love thee, Louisa; Louisa, Louisa, Louisa, I —

(ルイザ、私はお前を愛してゐる。私はお前を愛してゐる、ルイザ。ルイザ、ルイザ、私は……)

ストレイカアは身をつき轉りと寢返を打つて眠て終ふ、静寂はシイエラを領し、暗さはだん／＼深くなる。火は再び白い灰に埋もつて今は燃えなくなり、星多き空に聳えた峰は、計り知れぬ程暗い。併し今は星も朧になり、やがて其も消えて終ひ、空は次第に宇宙から失せ去る様に見え、残るものはシイエラに非ずして無である。目の及ぶ限り悉く無である。空もなく、峰もなく、光もなく、音もなく、時も空間もなく、全くの空虚だ。其時何處かに蒼靄めた光が射し始め、其と同時に何日迄ともなく同じ音を弾いてゐる、影のヴァイオロンチェロの様な、幽な、鈍い鼓動が聞えて来る。間もなく二挺の同じ影の様なヴァイオリンが此低音に加はり



而して其と同時に燃の光が、虚空の内に一人の男子を現はす。彼は眼には見えて而も形骸なき男である。而して不思議にも物なき處に座つてゐる。彼は音樂の己が傍を掠め去る時、不圖頭を擡げ、やがて重々しい吐息をして、深い喪心に陥ち、ヴァイオリンは此に氣を失ひ、絶望の内に旋律を収め、やがて全く消えて終ふ。代つて怪しい管樂から號泣の如き聲が起つて来る。次の様に……



此等は極めて不思議である。此音樂にはモツァルトの調子がある。而して此事實と、靄の蒼靄めた光の中のある紫色の光によつて、男の衣装は十五、六世紀の、西班牙貴族の風であることが分る。云ふ迄もなくドン、ホアアンだ。併し一體此處は何處なのだらう。如何して、何故、此處へ来たのだらう。其上今は帽子の縁で隠れてはゐるが、先刻一寸顔を上げた時の様子では、妙にタナアに似てゐる。尤も彼よりは更に鋭く、更に氣難しく、更に好男子で、色も一層蒼靄め、所作が冷淡なる上に、彼の如き輕卒な態度、強き情熱、近代式富豪萬能の卑俗な點はないが、其ても似てゐる事は確だ。否殆ん



ど同人と思へる位である。其上名もドン、ホオアン、テノリオ、所謂英語のジョオン、タナアである。元來吾々は二十世紀と西班牙のシエラから何處へ来たのだらうか

又虚空に蒼靄めた光が現はれる。此度は紫ではなく、不愉快極まる濁つた黄である。其と同時に影の堅 笛の如き囁が、次の曲を限なき悲哀の調子で奏て出てる



黄色い光が動き始める。而して不圖見れば、腰の彎曲つた、齒のない老媪が虚空に徘徊うてゐる。判然とは見分け難いが、女は何處かの宗派の定服なる粗な褐色の上衣を着けてゐる。而して一方は早く忙はしく、他は遅く傾りなげに、其二つの違はあるにしても、絶えずさまよひさまよふ態は、恰も胡蜂の様である。而して終にやうやく求むる處の者に逢着する。云ふ迄もなく連つてある、慰藉の吐息を洩して老媪は男の傍を離れまいとする。而して光澤のない不愉快な聲で話しかける。其聲は尙誇、決心、並ひに苦悶を現はし得る力を持つてゐる

媪 御免なさいよ。だけど妾は淋しくつて致方がないんです。其に此處はこんなに

氣味が悪いんですもの

ドン ホオアン、今來しつたんですか

媪 え、多分今朝死んだんでせう。妾は懺悔もし終油式も済まして、家族の者に取巻かれながら、床の中で靜つと十字架を凝視てゐますと四方が暗くなつて、此度明るくなると其が此處なんです。此光では歩いてゐても何も見えません。妾は此氣味の悪い淋しい中を幾時間も前から徘徊うてゐたんです

ドン ホオアン (吐息して) あ、貴女にはまだ時の感じがなくならないと見える。永久の世界へ來ると、人はすぐ其も失して終ひますよ

媪 此處は何處なんでせう  
ドン ホオアン、此處は地獄です

媪 (殺し) 地獄ですつて。妾が地獄に墜ちるなんて、どうしてそんな失禮な事を...  
ドン ホオアン (一向平氣で) 墜ちないとは限らないでせう

媼 貴方は妾を誰だと思つて居らつしやるんです。妾は貴婦人で忠實な法の弟子ですよ

ドン ホオアン、其はさうかも知れません

媼 だけど其ならどうして地獄へ墜ちるんでせう。淨罪獄位なら分りませんが。其は妾にも落度はありません。落度のない人間なんて居ないぢやありませんか。だけど地獄へ墜ちるなんて、否、其は虚言です

ドン ホオアン、否、奥さん、ほんとに地獄ですよ。地獄での一番好い處、詰り一番淋しい處に墜ちなすつたんだ。尤も貴女は人の居る處の方がお好きかも知れないけど

媼 併し妾は心から悔改めて、懺悔したんです……

ドン ホオアン、どの位懺悔おしてした

媼 實際覺えのない事迄も懺悔しました。妾は懺悔が好きだつたものですから

ドン ホオアン、おや、それぢや爲ないのと同じだ。併しまあ何方にしてもね奥さんどう間違つたのか知れませんが、貴女も私の様に確かに墜されて居ますよ。而して、もうかうなつたら、出来る丈此處で工合よくして行くより他に致方はありませんよ

媼 (憤然として) あ、其なら妾はもつと〜悪い事をして遣ればよかつた。折角よしい行爲をしたのが皆無駄になつて終ふなんて。此はあんまりだ

ドン ホオアン、否、貴女は幾度も判然注意されて居たんだ。悪い行爲は代人の賠償で事済み、公正のない慈悲が受けられるが、善い行爲は却つて慈悲のない公正を受けなければならぬ。善い人も澤山此處に来て居ますよ

媼 ぢや、貴方も善人でおありなすつたんですか

ドン ホオアン、なに僕は人殺しでした

媼 人殺ですつて。まあ、どうして妾を人殺などの居る處へ寄越したんでせう。妾

は決して其程悪くはなく、善い人間だったんです。必つと何かの間違に相違ない。

何處へ行つたら訂して貰へるでせう

ドン ホオアン、 さあ、此處ちや間違が訂せるかどうかですかね。多分間違つて居るにしても、間違とは云はないでせう

媼 だけど誰に云つたらいゝんでせう

ドン ホオアン、 僕なら悪魔に尋きますね。僕には混雑つて居て分りませんが、彼はよく此處の習慣を知つて居ますから

媼 悪魔に尋くんですつて。此妾が悪魔と口を利くんですか

ドン ホオアン、 奥さん、地獄ちや悪魔が交際場裡の王ですよ

媼 妾は地獄なんか居やしませんよ

ドン ホオアン、 どうしてそんな事が分ります

媼 少しも苦痛がありませんからさ

ドン ホオアン、 おや、其ちやもう間違ない。貴女は初から墜すつもりで墜されなす

つたんだ

媼 何故でせう

ドン ホオアン、 何故つて地獄は悪い者の來る處で、悪い者なら此處に居ても少しも苦痛はない筈です。つまり此處はさう云ふ人達の爲めに作られて居るんです。貴

女は今少しも苦痛はないと云つたでせう。だから貴女は當然此處へ來るべき筈の人なんです

媼 ちや、貴方にも苦痛はありませんか

ドン ホオアン、 奥さん、僕は悪い人間ちやありませんよ。だから退屈です。何とも云へない位、不思議に思はれる位退屈です

媼 悪い人間ちやないんですつて。先刻人殺だと云つたちやありませんか

ドン ホオアン、 なにほんの決闘丈ですよ。つまり僕はある老人を劍で突刺したんで

す。彼方でも僕を刺さうとしたんだから致方がない

婦 貴方が紳士でゐらしたのなら、其は人殺にやなりません

ドン ホオアン、其老人では向が娘の名譽を護らうとして居たのを殺したから、其で人殺だと云ふんです。と云ふ譯はかうなんです。止せばよいのに僕は其娘に懸想して、其事を女に話したでせう。すると其女が聲を立てたもんだから老人が出て来て、僕を色々侮辱した上刺殺さうとしたんです

婦 貴方も矢張り他の男と同じ様に悪かつたんですね。男は皆女蕩しや人殺許りです、え、誰も彼も皆

ドン ホオアン、其でも貴女と同じに此處へ来るから可笑しいぢやありませんか

婦 まあお聞きなさいよ。妾の父も恰度そのやうな事で、貴方の様な悪者にその様な決闘で殺されてお了ひなすつたんです。妾は無論聲を立てました。立てるのが妾の義務ですものねえ。父は名譽の上から黙つては居られず、妾に手出しをした

男に斬付けて、却つて反對に殺されなすつた。其が名譽を重んじた報酬です。妾は貴方のお話では今地獄へ来て居るでせう。其が義務を守つた報酬です。此でも天に公正と云ふものがあるんでせうか

ドン ホオアン、無論ありませんとも。併し地獄にはありますよ。天はそんな詰らない人間の事などに掛合つて居る處ぢやない。奥さん、貴女は地獄には歓迎されますよ。此處は名譽とか、義務とか、正義とか云ふ七つの怖ろしい徳目の故郷ですからね。地上に於てあらゆる悪事は、皆此徳目の假面の下に犯される。だから其應報を地獄で受けるのは當然ぢやありませんか。私は先刻も眞實に墜された者は地獄で幸福に暮されると云つたでせう

婦 ぢや、貴方も此處で幸福なんですか

ドン ホオアン (不意に跳起て) 否、而して其が僕がいくら考へても分らない謎なんです。何故僕が此處へ来て居るんだらう、あらゆる義務を拒み、名譽を蹂躪り、正義を

嘲つて来たのに

媼 なに、貴方がなぜ此處へ来たのか、そんな事なんかどうでもいゝ。其より妾が何故此處へ来たんだらう。いろ／＼自分の嗜好を女の徳や慎みに捧げて来たのに

ドン オオアン、まあ辛棒なさい。少し狎れたら此處でも充分幸福に居心地よくなりますよ。詩人の言草ぢやないが「地獄もセヴィリヤ見たいな處」です

媼 此處で幸福になれるんですつて。妾は此處ぢや名もない人間ぢやありませんか。誰も認めて呉れないぢやありませんか

ドン ホオアン、そんな事はありませんよ。貴女は貴婦人でせう。貴婦人の居る處は何處でも地獄です。吃驚したり怖がつたりするにや及びません。貴婦人に要る物は何でも皆此處にあります。召使にや悪魔も居ますよ。悪魔と云ふ奴は一體人に使はれるのが好で、貴女に仕へても自分の仕へて居る事に勿體のつく様に、うんと貴女を偉い人のやうに吹聴して呉れますよ。召使には悪魔程役に立つ者はあり

ません

媼 妾の召使には悪魔がなるんですつて

ドン ホオアン、ぢや貴女は是迄悪魔でない召使に出逢した事がありますか

媼 其はありません。召使其は皆悪魔です、皆々酷い悪魔許りです。併し此を悪魔と云ふのは、云はゞ言葉の綾なんて、貴方の仰つたのは現實の悪魔でせう

ドン ホオアン、なに、此處にや現實の悪魔なんか居ませんよ。貴女だつて現實の貴婦人ぢやないでせう。此處にや現實の物なんか一つもないんです。地獄の怖ろしいのは其處なんですすよ

媼 其ぢやまるで滅茶々々ですのね。其なら火に炙かれ、墓で腐る方がどれ丈い、か分りやしない

ドン ホオアン、其代り貴女には又慰藉もあります。假へば貴女があゝの世からこの世にお移りなすつた時お幾歳でした

媼 妾がもう存在ない人間ぢやあるまいし、幾歳でしたなんて尋かないで下さいよ。  
今が七十七です

ドン ホオアン、 い、年齢ですわね。併し地獄ぢや老人でも容赦はしよせん。其には餘りに現實ですから。此處で崇拜されるのは愛と美です。我々の魂は全然墜されて居るんですから、其代りに情の方を養ふんです。併し七十七歳のお婆さんぢや地獄では一人の友人も出来ませんな

媼 だつて年齢丈は致方がないぢやありませんかよ

ドン ホオアン、 さう云ふのは「時の國」を出た時年齢を放棄つて來た事を忘れて居な  
さるからだ。貴女は七歳でもなけりや十七歳でもない。二十七歳でもなけりや、  
勿論七十七歳でもない

媼 詰らない事を

ドン ホオアン、 まあ考へて御覽なさい。彼の世に居た時だつてさうでせう。貴女が

七十七歳になつた時でも、皺や白毛は別として眞實の心持は三十歳の時とあまり  
相違はなかつたでせう

媼 え、もつと若かつた位で、三十歳ぢやまだほんの小兒でした。併しいくら氣  
が若くつても、顔が老けて終つちや何にもなりません

ドン ホオアン、 なに、奥さん、容貌は唯迷ですよ。恰度元氣のない老の老耄れた馬  
鹿娘でも年齢が十七位で皮膚が肥つて艶々して居れば、心の年齢が容易く分らな  
い様に、貴女の皺も心の年齢を見損なはせるんです。元來地獄ぢや身體と云ふも  
のがありません。お互に身體のある様に思つて居るのは、生きて居た時さう云ふ  
風に思ひ慣れて居て、今でも他に方法を知らないからです。併し此處ぢや幾歳で  
も好きな年齢に見える様に出來ます。貴女は昔のどんな顔でも一寸欲しいときへ思  
へば、すぐ其顔が返つて來ます

媼 そんな事があるもんですか

ドン ホオアン、 まあ、遣つて御覽

媼 ぢや、十七!

ドン ホオアン、 一寸お待ち。お決めなさる前に一寸云つて置かなきゃならんと思ふが、かう云ふ事は其時の流行のもので、時には十七を大騒ぎをする事もあるが、其は永くは續きません。恰度今では流行の年齢は四十か先づ三十七位でせう。併し其にも變る模様が見えて居ますから、若し貴女が二十七位の時に少しでも美貌であつたのなら、僕は一つ其を遣つて見て、新しい流行を起したらどうかと思ふね

媼 貴方の云つていらつしやる事なんか一言も信じませんが、まあそれぢや二十七にして置きませう (果然、老婆は若い女に變る。而して今迄の鈍い黄色い後光が此時撥つと光つたのに照されるのを見ると、殆んどアン、ホワイトフィールドと間違られる程美しい)

ドン ジュアン、 オリオアのアナさんぢやないか

アナ え、貴方が妾を知つておいてなさるの

ドン ホオアン、 貴女は僕を忘れましたか

アナ 貴方の顔が見えませんが (ホオアンは帽子を上へあげる) まあ、ホオアン、テノリオさんでせう。畜生! お父さんを殺した癖に。此處へ迄妾を追跡してゐるんだよ

ドン ホオアン、 否、僕は決して追跡してゐやしない。それぢや失敬します (行きかける)

アナ (腕を捉へて) こんな怖ろしい處に妾を一人で放つて置きなさんですか

ドン ホオアン、 さうさ。此處にゐて又追跡してゐる様に思はれるといけないからさ  
アナ (放して) 妾がかうして貴方に黙つて逢つてゐられるのが、不思議な位ぢやありませんか。まあ、お可哀相にお父さんは殺されてお終ひなすつて

ドン ホオアン、 お父さんに逢つて見たいかね

アナ お父さんも此處にいらつしやるんですか!

ドン ホオアン、 否、天にゐられるんだ

アナ さうだらうと思つてゐた。氣高いお父さん。今必つと天から妾共を見下していらつしやるでせう。現在娘の妾が地獄に墜ち、此處で殺した相手と話してゐるのを御覽なすつたら、まあどんなお心持でせう

ドン ホオアン、序だがひよつと彼人に逢ふ様な事があつても……

アナ 逢へるものですか、天國にいらつしやるんですもの

ドン ホオアン、否、始終僕等と遊びに此處へ降りて來られるんだ。必つと天國が退屈なんだらう。だから貴女に斷つて置くが、若し彼人に逢つても決して僕が殺した様に云つちや不可ない。さうすると非常に機嫌が悪からね。向ちや僕よりずつと劍術が達者で、あの時足さへ滑らなかつたら必つと勝たと思つてゐるんだから。其は又さうなんだらう。僕は決して劍術は上手な方ぢやなかつたから。僕は決して其點は争はない、其て二人は大變仲好になつてゐるんだ

アナ 武士が武藝を誇るのは當然ですよ

ドン ホオアン、貴女は多分逢はない方がいゝかも知れん

アナ どうしてそんな酷い事を仰やるんです

ドン ホオアン、なに、此處の人は皆さう思つてゐるんだ。貴女はもう忘れたかも知れんが、地上では——勿論誰も口に出しちや云はないが——誰でも自分の知人が死ぬと、假んば其が自分の一番好きな人であつても、必つと「到頭厄介拂をした」と云ふ様な、云はゞ一種の満足を感じるものなんだ

アナ まあ、貴方は何と云ふ人でせう。そんな事があるもんですか

ドン ホオアン、（沈著いて）でも、さう云ふ處を見ると、貴女には其心持は解つてゐるんだ。否、葬式は何時も黒い服を着たお祝ひだ。殊に一族の者の葬式が其だ。何れにしても一族の關係は、殆ど此處ぢや守られてゐない。貴女のお父さんは充分其に狎れてゐられるから、貴女に孝行して貰はうなどは思つてゐられやしない  
アン 畜生、そんな酷い事を云つて。一生お父さんのために喪服を着けてゐたのに



ドン ホオアン、 さう、其は殊勝な事だ。併し一生喪服を着けるのと、永久着けるのとは違ふ。其に此處では貴女もお父さんも死んでゐるには差別がない。死んだ者が死んだ者の喪に服するなんて、此程滑稽な事はないぢやないか。そんなに驚いた顔をしなくつてもいいよ、アナさん。そんなに驚かなくつてもいい。地獄にも下らない偽騙は澤山ある——實際殆ど皆下らない偽騙計と云つていゝ位だ——併し此處では誰も死んで、永久の人になつてゐるんだから、死とか、年齢とか、變化とか云ふ様な事に就ての偽騙は止す事になつてゐる。貴女もやがては皆の遣方を見習ふ様になるだらう。

アナ で、男の方は皆妾に「ねえ、アナさん」なんて。優しい事を云つて呉れるんでせうか

ドン ホオアン、 否、あれは思はず口が滑つたんだ、悪かつた

アナ (殆んど優しい様に) ホオアンさん。貴方があんな酷い事をなすつた時、ほんとに妾

を思つていらつしたの

ドン ホオアン (苛々して) あゝ、どうか思ふとか思はないとか云ふ事は、言ひ出さな  
いで置いて呉れ給へ。此處では皆其事許り話してゐる。——愛の美とか、愛の神  
聖とか、愛の靈的性質とか、やれその何とか彼とか、實に馬鹿くしくつて聞い  
てゐられやしない。彼方ぢや譯も分らずに云つてゐるんだが、僕にやよく分つて  
ゐるんだからねえ。奴等は自分くくに肉體がなくなつたから、其で完全な愛に到  
達し得たと思つてゐる。全く放縱な想像なんだ。ほんとに呆れ返つて終ふ

アン 死んで終つても貴方の魂は上品にやなれないんですかね、ホオアンさん。妾  
の父の石像からお受けなすつた、あの怖ろしい神の裁判に逢つても、貴方には崇  
敬の念は起らないんでせうか

ドン ホオアン、 序だがあの實物優りの石像は其後どうなつたね。今でもやはり不行  
跡な者の處へ晚餐に出かけては、此深い地獄の底へ投げ込んでゐるんかね

アン 彼は妾には大變な入費でした。修道學院の生徒が放つちや置かず、悪戯者は處嫌はず打碎いたり、念の入つたのになると、其上に自分の名などを刻むんです。鼻は二年に三度付換へ、指は幾度か分りません。終には致方がないから、妾はなる様にして置きました。今ちや必つと酷く痛められてゐるでせう。可哀相にお父さんが

ドン ホオアン、 シッ！ お聞きよ。(突然二つの大和絃が節分された音波に捲返して起つて来る「ニ」の短音譜と其の第五度で、音楽者には強き喜を表はす音である。) ヤア！ モツァルトのドン、ジイ オヴァニイの音楽だ。お父さんが見えたに違ない。前に貴女の事を一寸話す迄、少時姿を隠してゐた方がいゝだらう(女は消える)

虚空から凜々しい老人に像どつた、白い、生きた大理石の像が遣つて来る。併し其凜々しさは優しい姿勢に隠れ、足付は羽毛の様に軽く、戦に疲れた満面の蹙には、祝日の喜悅が溢れてゐる。容姿の立派に鍛え上られてゐるのは、全く彫刻家のお蔭で、彼は其を眞直に端然として歩いてゐる。口髭の端は時計の線條の様に剛く捲上り、若し其に西班牙式の威嚴がなかつたら「澄し家」とども云はれさうに見える處だ。ドン、ホオアンとは非常な仲好で、聲は一層際立った調子を除いたら、ロオパツク、

ラムズドワン其儘である。だから、此聲の相似から、二人の顔の削方が非常に異つてゐるにも係らず其他の點の萬更似てゐないでもない事迄も、つい氣がつく様になつて来る。

ドン ホオアン、 やあ、おいでしたね。何故貴方はモツァルトが折角あんな立派な音楽をかいて呉れたのに、あれを歌ふ稽古をしないんです

石像 困つた事には彼は其を低音に書いたが、私の聲は上中音なんで、どうも旨く合はないんだ。其はさうと、君はもう悔改めましたかね

ドン ホオアン、 僕は貴方に悪いからまだ悔改めずにゐます。僕が悔改めたら、貴方が僕と議論しに、天から遣つて来る口實がなくなるだらうと思つて

石像 眞實にさうだ。何と云はれても構はずにゐたまへ。私が君を殺せばよかつた。あの時仕損じさへなかつたら、殺せたんだがなあ。さうすれば私が此處へ来て、君が代りに石像を建て、貰ひ、おまけに敬虔の評判を取つて、其を失墜ない様にして行かされる處だつた——何か變つた事でもないかね

ドン ホオアン、 え、あります。貴方のお嬢さんが死にましたよ

石像 (面喰つて) 私の娘? (思出して) さう、君の惚れた彼女か。はて…何と云つた  
つけね

ドン ホオアン、 アナさんと稱ひました

石像 さう、アナ。もう大分忘れてゐるが、多分別嬪の方だつたね。君は…何  
と云つたつけね、彼女の夫さ。あれに其話をして遣つたかね

ドン ホオアン、 オッタヴィオ君ですか。否、アナさんが着いてから、僕はまだ彼の人  
に逢はずにゐます (アナは憤々怒つて現はれて来る)

アナ 此は一體どうした事でせう。オッタヴィオさんも地獄で、貴方のお友達だなんつ  
て。其にまあお父さん、貴方が妾の名を忘れてお終ひなさるなんて、ほんとに石  
になつてお終ひなすつたのね

石像 嬢や、私は自分の身體でゐた時よりも、大理石に刻まれてからの方がずつと他

人の受がいゝんで、今でも彫刻師のして呉れた通りにしてゐる。彼はあの頃の名  
人だよ、お前も其は認めて遣らなければいけない

アナ お父さん、其は虚榮ですよ。貴方から身體に關して詰らない虚榮の言葉を聞く  
なんて

石像 さう、お前はそんな事なくなる齡迄生きてゐたんだね。お前はもう彼是八十  
だらう。私の死んだのは六十四で——足が滑つた許りに——お前よりは餘程若か  
つた。其上茲では其處の不身持の大將が何日も口癖の様に云ふ、「親の賢ぶる下ら  
ない喜劇」と云ふ様な物は、全くなくなつてゐるんだ。だから此からも、どうか  
私を父などと思はずに、唯同胞の一人だと思つて貰ひ度い

アナ 貴方もまるで此人の云ふ通りな事を仰やるのね

石像 ホオアン君は却々頭腦が確りして居るよ。擊劍は下手だが却々頭は確りして居  
る

アナ (怖に身の毛を竦立たして) あ、やつと解つて来た。今のは皆悪魔で、妾を嘲弄つて居るんだ。お祈禱をしませう

石像 (女を慰めて) 不可ない、不可ない、お中止し。そんな事をしたら折角此處の難有味が皆なくなつて来る。此處の門口には「汝儕此處に入らんとする者は、凡ての希望を棄てよ」と書いてあるだらう。さうなれたらどんなに樂だか分りやしない。元來希望と云ふ奴は、一種の責任だ。此處には希望と云ふ物もなければ、従つて義務もなく、仕事もない。祈禱しても何も得られないと同じく、自分の好き好みに従つても何も失はれる物がない。つまり地獄は面白く暮せる様にさへすれば、其ていゝ處なんだ(ドン、ホオアンは深い吐息をする)ホオアン君、君は吐息をするが、君も私の様に天國に住んで見たら、必つと此處の難有味が分つて来るよ

ドン ホオアン、 將軍、今日は素敵に元氣ですね。却々油が乗つて居る、どうかしたんですか

石像 私は重大な決心をしたんだ。併しまあ其より、あの悪魔さんは何處へ行つたらう。私は其事に就て相談しなげやならないんだが、其にアンも知合になつて置き度だらうし

アン そんなにして、妾を苦しめる積りなんでせう

ドン ホオアン、 そんなに思ふのは皆自分の思違だよ。安心しておいで、大丈夫だから。悪魔は決して世間で云ふ程怖ろしいもんぢやありません

石像 一つ呼んで見やうぢやないか

石像の合圖で大和絃が捲き起つて来る。併し此度はモツアルトの樂が、ケッソの樂と混つて、著しく質を賤してゐる。やがて深紅の後光が射し始め、中にメフィストフェレスの様な悪魔が現はれて来る。彼はメンドザ程面白い人物ではないが、容貌は必ずしも似てゐないでもない。只メンドザよりは稍老けて見え、まだ左程の年齢でもないのもう頭が禿げかけてゐる。人柄の好い男で人さへ見れば狙れ／＼しく大騒をするが、相手が此方の出方に應じないと、すぐ其か氣にして不機嫌になる。骨折仕事や、辛棒と云ふ點にはあまり優れてゐる様に見える、一般に克己心の缺けた不愉快な男だが、性

賢は伶俐で、云ふ事は理に合つてゐる。尤も育ちは他の二人よりは遙に下等で、活力はアナに比して殆んど云ふに足らない。

悪魔 (嬉し相に) 何誰かと思へば此はカラトラヅァの名高い指揮官様ぢやありませんか (冷淡に) ドン、ホオアンさん、ようこそ。(丁寧に) 其から御婦人のお方、よういらつしやいました

アナ お前さんが

悪魔 (お辭儀をして) ルシィファでございませう

アナ まあ、妾どうしませう

悪魔 (外さない様に) 否、奥さん、御心配にや及びませんよ。貴女は坊さん達の威張つてゐる世界から、種々偏見や恐怖を注込まれていらしたから、其でさうお思ひなさるんでせう。必つと今迄にも私の悪口をお聞きなすつたに違ないが、其でも彼處には私の鼠眉をして呉れる者も澤山居りますよ

アナ さうねえ、お前さんは皆の情を支配してゐなさるから

悪魔 (頭を振つて) さう仰やつて頂けば有難いんですが、其は間違ですよ。成程私があるなければ世の中は立つて行きませんが、併し其かと云つて世間は決して私を有難がらずに、却つて心の中で危み悪んでゐるんです。世間の同情は何日も不幸とか、貧窮とか、情緒、肉體の飢渴に向つてゐるんで、私はどうかして其を喜悅とか、愛とか、幸福とか、美とか云ふ物に向けさせやうと

ドン ホオアン (吐舌を催して) いや、失敬しやう。僕はそんな話は馬鹿げて聞いてゐられないから

悪魔 (腹立しく) うむ、君が味方でない事は、私は疾うから知つてゐる

石像 ホオアン君、そんなに云はなくてもいゝぢやないか。私は又君が口を挿んだ時、

ルシィファ君中々旨い事を云ふと、感心してきいてゐたんだ

悪魔 (嬉し相に石像の手を握つて) 有難う、ほんとに有難う。貴方は何日も私を了解して下

さるが、ホオアン君は何日も私を貶したり、嫌つたりするんで

ドン ホオアン、 僕は何日も君に充分の禮を以て對してゐるぢやないか

悪魔 禮なつて。禮なんか何になるものか。私は詰らない禮なんかなくつてもいい。

出来るなら温かい情、眞の誠意、愛や喜悅に同情し得る心……

ドン ホオアン、 聞いてゐると氣持が悪くなる

悪魔 あれだ！ (石像に訴へて) お聞きなすつたでせう。まあ、何と云ふ運命の皮肉で、

此冷淡な、自己中心の我儘者が私の領に舞込んで來、貴方の様な方が天の冷たい

館へ送られなすつたんでせう

石像 私には不平は云へないね。私は偽善者だつたから、天へ送られたのは恰度い、

刑罰かも知れないよ

悪魔 何故又あんな處を出て、私共の領へいらつしやらないんです。天國にしちや貴

方の御氣質はあまりに同情が強過、貴方の情はあまりに温か過、貴方の享樂の方

があまりに豊か過ぎるぢやありませんか

石像 實は今日さうしようと思つて來たんだ。此からはねえ大將、君の方の人になる

よ。私はもう天へは歸らない積りだ

悪魔 (又相手の手を捉つて) まあ、此は實に私の名譽です。我黨に取つては此上の勝利は

ありません。有難う、ほんとに有難う。で、ねえ君、——到頭、君と云へる様に

なりました——君が明けて來られた天の空席を、ホオアン君が占める様に説伏せる

譯に行かないでせうか

石像 (頭を振つて) 私はどうも承知してゐながら、自分の親しくしてゐる者に態と退屈

な、不愉快な目に逢はす様に勧める譯には行かないね

悪魔 其はさうでせう。併しホオアン君は必つと不愉快に思ふでせうか。無論其は貴

方に一番よく分つてゐる筈です。最初ホオアン君を此處へ連れて來なすつたのは

貴方だから。其に私共もホオアン君には、始めは非常な希望を持つてゐたんです。

彼の人の心意氣は此處での一番立派な人達の、高い趣味にも適つてゐましたから。貴方はまだあの人の歌の巧かつたのを覺えてゐられるでせう（鼻にかかるとオペラ風の上低音で歌ひ始める。佛蘭西人の様に無暗と始終歌ふものだから、聲は嫌に震えを帯びてゐる）

Vivan le femmine!

Viva il buon vino!

（女めでたし）

よき酒たのし）

石像（一音程高く、中音で先をうける）

Sostegno e gloria

D'umanità

（人の世の柱石  
人の世の光榮）

悪魔 さうです、さう行くんです。處がホオアン君は、もう一寸も歌つて聞かしちや呉れなくなりました

ドン ホオアン、君は其を不平に思つてゐるのか。地獄は素人の音楽家で鼻を突合せてゐるぢやないか。音楽は地獄に墜ちたもの、火酒の様なものだ。其中で一人位止たつて構やしまし

悪魔 君はまあ大膽だ、此尤も崇高な藝術を冒瀆すのかな

ドン ホオアン（胸を悪くして、冷かに）君はまるで提琴弾に惚れた、ヒステリイ症の女の様な事を云ふぢやないか

悪魔 私はもう怒らない、只君を憫れむ丈だ。君には魂がないから自分の失つてゐる物にも氣付かずにゐるんだ。――ですが指揮官、貴方は天稟の音楽家です。實に旨いものだ。若しモツァルトがまだ此處にゐたら、必つと喜んでに違ひないが、彼も到頭此處に飽きて、天へ行つて終ひました。實に妙です、ね、かう云ふ風

に當然此處で人氣のあるべき筈の伶俐な連中が、皆ホオアン君の様に社會的に失敗の人となつて終ふのは

ドン ホオアン、 僕だつて社會的に失敗の人となるのは、心から残念に思つてゐる

悪魔 勿論其は我々が君の知力に敬服してゐないと云ふのぢやないさ。其は無論敬服はしてゐるが、私は此事件を君自身の立場から見えてゐるんだ。君は我々とは合はないし、此場所が氣に入らない。實の處君は……其は必ずしも情がないとは云はん。君の心にもない皮肉の下には、温かい情の隠れてゐる事はよく承知してゐるから……

ドン ホオアン (縮み上つて) 止してくれたまへ。ほんとに止してくれたまへ

悪魔 (怒つて) ぢや、君には享樂の力が缺けてゐると云つて置かう。其なら多分氣に入るだらう

ドン ホオアン、 同じ實のない話だが其方がまだいゝ。併し何なら僕は日常の様に、

一人で誰もゐない處へ行つてゐたい

悪魔 いつそ天へ行つたらいゝぢやないか。君は其方の人なんだ。(アナに) ねえ、奥さん、貴女一つホオアン君に轉地して見る様に勸めて下さいませんか。其方がホオアン君の利益ですから

アナ だけど行き度いと思つたら、ホオアンさんは天國へ行けるんでせうか

悪魔 行き度いと云へば致方がないぢやありませんか

アナ ぢや、誰でも……妾でも行き度いと云へば行けるんでせうか

悪魔 (寧ろ蔑む様に) え、若し貴女の嗜好が其方でしたら

アナ だけど其ぢや何故皆天國へ行かないんでせう

石像 (面白相に笑つて) 其譯を云つて上げやうか。其は天國は世界中で一番上品な面白くない處だからさ。理由つて其だ

悪魔 指揮官閣下は軍隊流の卒直に仰やいましたか、天國の生活は實際窮屈で堪えら



れないものです。世間では皆私が天國から追放された様に思つて居ますが、實を云へば私はいくら居れと云はれても、あんな處に辛棒が出来なかつたんです。て、私はすぐ彼處を出て新に此處を創めたんです

石像 其はさうだらう。誰だつて何時々々までも天になんか居られるもんぢやない。

悪魔 否、其でも稀には應ふ人もありますよ。指揮官、此處は公平に云ひませう。此は全く氣質次第ですが、私は何方かと云ふと天に應ふ様な氣質には感心しませんね。私にはあの心持が解らない。又別に解り度いとも思つて居ない。併し世の中には種々の人が要ります。趣味と云ふ奴は分らないもので、中には天國の好きな人もありますよ。ホオアン君も必つと其方でせう

ドン ホオアン、併し——卒直に云つて悪いかも知れんが——行き度いと思へば實際君には行けるのかね。其とも行き度くも行けないから、其て悪口云ふのかね  
悪魔 行けるかなんて、私は始終往來して居るぢやないか。君は未だヨブ記を讀んだ

事が無いな。經典上には私の領と天國とに、境界でもあると思はせる様な、何も典據はないぢやないか

アナ 併し其間には確かに大きな深淵はあるでせう

悪魔 奥さん、比喩はあまり言葉通りに解つちやいけませんよ。深淵は天人氣質と悪魔氣質との相違です。其程越難い深淵は無いぢやありませんか。例へば地上の話です。哲學者の教室と闘牛場との間には、目に見える深淵はないが、其でも闘牛師は哲學者の教室へは來ないでせう。貴女は是迄私の弟子の一番多い、英吉利と云ふ國に行つて見た事がありますか。彼處には大きな競馬場や、音樂館が澤山あつて、其音樂館では閣下の知己のモツァルトさんの名曲を演奏して居ます。競馬場へ行く連中は無論自分の嗜好で、行けば演奏會へも行けるんです。英國人は決して奴隷とはならない人民で、政府や輿論の許す事は何を遣つても差支ないんだから、無論競馬場へ行く者は演奏會へ出入しぢやならないと云ふ法はありません。

其上演奏會は競馬場よりも高等な、進んだ、詩的な、學者らしい、人の上にす  
 る處と認められて居る。處が、競馬好の者が其方を止して音楽館へ集るかと思ふ  
 に、さうぢやない。奴等は其處へ行つたら。將軍が天にいらしたと同じ様に、  
 必つと退屈がるに違ひない。此二つの場所の間には、比喩の大きな深淵があるん  
 です。單に形の上の深淵なら橋を渡す事も出来るし、でなげや私が渡して遣りま  
 す——地上には惡魔の橋と云ふのが澤山あるでせう——併し「嫌厭」の深淵は永久  
 に越えられない。そして其が此處に居る私の仲間と、越權にも「幸ある者」と呼ば  
 れて居る天衆とを引離す唯一の深淵なんです

アナ 妾は今すぐ天へ行かう

石像 これお聞き、其前に一言言つて置きたい。私はルシィフ君の名曲演奏會の比喩  
 を補つて云はうが、かう云ふ演奏會へ行くと、よく疲れた聴衆がずつと列んで居る  
 のが目につく事があるだらう。一體かう云ふ人達の來て居るのは、名曲が好きな

からではなく、名曲は好かなきやならないものと思つて居るからなんだ。同じ事  
 が天國にもある。大勢の人が彼處に神々しく坐つて居るが、其は幸福からではな  
 く、自身の體面上其處に居なければならぬと思つて居るからなんだ。さう云ふ人  
 は殆ど皆英國人許りと云つて好い。

惡魔 さうです。南歐の人は皆貴方の様に天を止して私の方へ來ますが、英國人は非  
 常に詰らない時でも、其を詰らないとは氣がつかない様です。奴等は不愉快にさ  
 へして居れば、其が道德的だと思つて居るんですからねえ

石像 で結局お前の性質が其に適して居ないのなら、天國へ行つても兎ても面白くは  
 暮せまいと思ふんだ

アナ 妾の性質が其に適しないなんて誰に云へませう。教會の立派な方々からも決し  
 て其丈は疑はれた事はありませんでした。妾は體面からでもすぐ此處を出なけや  
 なりません

悪魔（怒つて）ちや、お氣に向いた様になさい。私は貴女をもつと物の分る方と思つて居ました

二三二

アナ お父さん、貴方も一緒にいらつしやるでせう。貴方は此處にや居られませんよ。人が何と云ふてせう

石像 人が何と云ふだらうつて。なに、立派な人達が皆此處に居るんだよ。——大僧正でも、何でもさ。近頃は天へ行く者が非常に少くなり、反對に此處へ來るものが大變多くなつて來たんだよ。其で一時は天の大衆と呼ばれた天人達も、今では次第に減つて無人となり、昔は聖者と長老とか選民とか云はれた人も、今ちや變り物、幻想家、世の除物と云はれる様になつて終つたんだ

悪魔 其通りですよ。私は此仕事にかゝる當時から誣告、中傷の長い戦が續いても、終には必つと輿論の力丈でも勝てると思つて居ました。結局世界は輿論政治なんて、私の様に多數の黨與を持つて居るものが、何日迄も隅に押付けられて

居る筈はありませんよ

ドン ホオアン、アナさん、僕は矢張り貴女は此處に居た方がいゝと思ふね

アナ（妬しげに）貴方は妾と一緒に行くのが嫌なんでせう

ドン ホオアン、だけど、貴女は無論僕の様な無頼漢と一緒に行き度かないだらう

アナ 魂の貴さに差別はありません。其に貴方はもう悔改めなすつたんでせう

ドン ホオアン、馬鹿だね、貴女は天でも地上の様に、悔改めさへすれば、爲た事も爲ない體になり、云つた事も取消せば云はない體になり、眞實の事も多勢が一致して虚言だと云へば虚言になつて終ふと思つて居るのか。さうぢやない。天は「眞實」の巨人の住家だ。僕の行くと云ふのも其なんだ

アナ はい。妾は反對に幸福を得に行きます。現實なら地上で散々味つて來ましたから

ドン ホオアン、ちや貴女は此處に居なけりやならないよ。地獄は現實を厭ふ人や、幸

二三三

福を求め人の住家なんて、今云ふ「現實」の巨人の住んでゐる天國や、「現實」の奴隸の住家なる地上からの、唯一の隠家になつてゐる。地上は云はゞ子供部屋で其處では人は劇や物語の主人公にもなり、聖者、罪人の眞似もして喜んでゐる。併し人間には肉體と云ふ物があつて、何日かは此「愚者の天國」から引下されて終ふ。饑餓とか、寒さとか、飢渴とか、老齡とか、衰弱とか、病氣とか、死とか云ふもの、殊に此死と云ふものが彼等を現實の奴隸にして終ふんだ。食物は日に三度食べて咀嚼しなければならず、百年に三度は新しい世代の人を生れ代らせなければならぬ。永い年月の信仰や、浪漫や、科學も終には「私を達者な生物にしてくれ」と云ふ、只一つの願に追退られて終ふんだ。併し此地獄には「肉の暴戻」と云ふものがない。何故と云ふに、此處では人は最早生物ではなくして云はゞ亡靈だ。影、幻、規約の如きもので死もなければ年齡もない。つまり肉體なき人なんだ。だから此處には社會問題も起らない。政治問題もなければ宗教問題もない。殊に有

難い事には衛生問題と云ふ奴がない。此處でも人は地上と同じく自分の容貌を美とか、情緒を愛とか感情を勇氣とか、願望を徳など、呼んでゐるが、幸ひ此處には其に矛盾する怖ろしい「事實」と云ふ物がなく、見せかけと實際との皮肉な對照、滑稽極まる人間の喜劇と云ふ様な物もなく、只何日迄も浪漫と感情劇とを繰返してゐればいゝんだ。あの獨逸の詩人の歌つた様に「此處には愚なる事も道理とせられ、永久に艶事のみ人の心を惹」いて、而も一步も前へは進まないんだ。其に貴女は此樂園を去り度いと云つてゐる

アナ ですが、地獄が今仰つた様に美しいのでしたら、天國はまだどんなに莊麗でせう(三人は躍起に口を揃へて反對する。其から互に恥ぢらひて口を噤む)

ドン ホオアン、失敬しました

悪魔 否、否、私こそお邪魔でした

石像 君は何か云はうとしてゐたんだね

ドン ホオアン、 どうか貴方方から

悪魔（ドン、ホオアンに）君は私の領の利益を非常に巧く述べて呉れたから、序に君にお任せして、天國の劣つた處も充分云つてお貰ひしやう

ドン ホオアン、 僕の思ふに天國では、人は遊び或は偽つたりしてゐないで、生きて働かなければならぬのだ。人はありの儘に物事を見、迷ひの他は何事をも避ける事が出来ず、僅に堅實な態度と、其に伴ふ危険とを矜として満足しなければならぬのだ。若し芝居が今でも地上や此處で行はれ、全世界を一つの大なる舞臺とするならば、天は少くとも其樂屋裡だ。併し天は比喩では説明出来ない。僕は今彼處へ行くのも、彼處ならば此迄久しく苦しめられた詐偽とか、詰らない卑しい幸福の追求から免れて、限りない一生を瞑想に送れると思ふからなんだ

石像 やれ〜

ドン ホオアン、 將軍、僕は貴方のさう云はれるのを無理とは思はない。美術館も盲人

には詰らない處だ。併し貴方が美とか快樂とか云ふ、浪漫的な蜃氣樓を考へて見るのに、興味をお持ちなさる如く、僕も又「生」つまり「一層有力に自己を省察せんとする力」に就て静つと考へて見るのが何より好きなんだ。僕の此脳髓は何のために出來たのだらう。無論四肢を動かすため許りぢやない。其なら僕の半分の脳髓もない鼠も、同じ様に働けるぢやないか。否、單に物事を爲るため許りてなく同時に自分の爲てゐる事をも知る必要から出來てゐるんだ。でもないと思ふと生きるとする盲目的努力から、人は或は己を殺すかも知れない

石像 私の足が滑らなかつたら、君は禦がうとする盲目的努力から、自分と自分を殺す處だつたんだよ

ドン ホオアン 大膽な減らず口だ。其笑が朝迄にどんなになるか見るがい、

石像 ハハ、私がセヴィリヤで臺の上から君にそんな事を云つた時、君はずい分驚いたつけね。併し其言葉もあの時の様に喇叭でもなけりや、餘り強くは響かないよ

ドン ホオアン、 喇叭があつちや却つて強くは響かない相ですよ

アナ お父さんそんな、詰らない事を云つて邪魔しないでお置きなさいよ。ホオアンさん、天國には瞑想の他には何も無いんでせうか

ドン ホオアン、 僕の求める天國には其他の樂はないね。併し其處には向上しやうとする「生」の奮闘を助けて行く仕事はあります。まあ、考へて御覽、どの位「生」なるものが無益に費されてゐるか、どの位自ら障害を作つて、無智と盲目のために自分の力を破壊してゐるか。だから、此「生」と云ふ不可抗力が自己の無智より自己の發達を妨げない様にするには、是非腦髓がなくてはならぬ。「何と云ふ人は靈妙なものだらう」と詩人は云つてゐる。其はさうに違ない。併し其と同時に「何と云ふ謬ち多い者だらう」とも云ひ度なる。人は今迄「生」の作出した組織中尤も驚くべき傑作であり、生物中尤も強烈に躍動してゐるものであり、凡ての體制中尤も意識的なものだが、其頭腦の衰さはどうか。愚かなる人間は、貧と力勞によつ

て教込まれた、實相の知識のために、ますます卑しく残忍となり、「想像力」は假令其身が餓えても此等の實在と奮闘するのを厭うて其を掩ふに幾多の幻想を重ね、自ら其を惘發、天才と呼んでゐる。而も此二つは自己の缺陷を他に嫁して、「愚さ」は想像を愚と詰り、想像は愚さを無智と笑ひ、而して自分々々では——「愚さ」はあらゆる知識を有ち、想像はあらゆる知解を有つてゐるが如くに心得てゐる。惡覽 而して其から兩方を下らない騒ぎを始める。何日かも云つた様に、私がファウストと例の取極めをした時、人間の理性のした事は彼をますます「獸に近からしめたに過ぎなかつた。一つの立派な身體は、百の胃弱の口賢しい哲學者の頭腦よりも、どの位尊いか分らない。

ドン ホオアン さう云ふけれども、頭腦のない身體丈立派な物も、是迄いろ／＼試されてゐるではないか。頭腦を除いてはあらゆる點に於て、人間とは比較にならぬ程優れた物も、是迄は生き且滅びてゐる。例へば大懶獸、龍魚は七里に渡る大

跨て地上を歩き、雲の様な廣い翼で天日を覆ふたてはないか。併し今其が何處にある。博物館の化石か、其も今日では一本の關節、齒一枚が、千人の兵士の命よりも貴いとせられる程其数が少く、完全な物に到つては極めて稀だ。かう云ふ動物は、一時は此世に生き、又生き度いと思つてゐたに違ないが、頭腦のないために其目的を果すべき方法も知らず、従つて自ら亡びる様になつて終つたんだ。

惡魔 併し、人間も腦を自慢にしてゐるに係はらず、自ら滅す事には今の懶獸と大した變りはないぢやないか。君は近頃地上を歩いて見た事はないだらうが、私は方々歩いて人間の異常な發明を調べて見た。で、「生存」の術に就いては人は何物をも發明しないが、「死」の術に於ては自然其物をも凌駕し、化學、機械の力で、悪疫、災禍、饑饉のあらゆる殺戮を行つてゐる。今日私の誘惑した百姓は、一萬年前の百姓が飲食したと同じものを飲食し、彼等の住んでゐる家は千世紀の間に、四五箇月間に女の帽子の變る程も變つてゐない。處が、何か殺しに出かける段に

なれば、一寸指先が觸れた許りで、あらゆる隠れた分子の力を放つて、彼等の祖先の投槍、矢、吹管などは比較にならぬ精巧な機械を持つてゐる。併し平和の術には人は極めて不器用だ。私は奴等の綿工場や、其に類した物をも見たが、其機械は餓ゑた野犬が、食の代りに金を欲しがつたら、發明しさうに思はれるやうな物許りだつた。私は又奴等の寫字機や、見苦しい機關車や、面倒な自轉車をも見たが此等はマキシム銃、潜航水雷艇など、比べては殆んど玩具である。人間の工業機械に表はれてゐるものは、貪欲と懶惰で奴等の心は全く武器に奪はれてゐるのだ。君の誇りとする異常な「生」の力は、要するに死の力だ。其證據には、人は破壊に依つて各自の力を量つてゐるではないか。宗教とは何か。私を誹る口實。法律とは何か、他を絞首る口實。道德とは何か。門地とは何か、作らずして他のものを消費する口實ではないか。美術とは何か、殺戮の繪を貪り視る口實ではないか。政治とは何か、殺す力を持つてゐるが故に、專制君主を崇拜するか、乃至は

愚にもつかぬ議會の争ひを指すんだらう。私は近頃晩に、ある有名な立法團の會議に行つて見たら、鳥が鶉に白い黒いの講釋し、大臣が種々他の質問に答へてゐた。出る時私は戸の上に「何も尋かずに置くが、さうしたら虚言は吐かれない」と云ふ、古い育兒の諺を、白墨で書つけて來て遣つた。次に私は二十五錢の家庭雜誌を買つて見た。すると其中には若い者が互に射撃合ひ刺し合つてゐる繪が一杯に入つてゐた。又私はある男の死ぬのを見た。其男は倫敦のある石屋の下働で、家には七人の子供がある。死ぬ時組合から百七十圓の金が下つた。然るに其妻は其金を悉く葬式に費つて、次の日子供を引連れて養育院へ行つた。死のためには所持金を悉く費つても子供の教育のためには一錢も費やさうとはしない。國法は國家の手で、其子供を教育する様に母に強なければならぬ。かう云ふ人達は死と云ふ事實を考へれば、想像は熱し、精力が増して來る。つまり死が好きなんだ。而して其が怖ろしければ怖ろしい程面白い様に思つてゐる。地獄な

どの態は到底彼等の考へには及ばない。元來彼等は此地獄の考へを、世界の二人の大馬鹿者、つまり伊國人と英國人から受けてゐる。伊國人の方は其を泥、汚穢、霜、火、毒蛇の領とし、到る處苛責のみの様に描いてゐる。而して此馬鹿者は私に關する虚言を云つてゐない時には、何日も不圖街頭で見た女の事を、囁言交りに喋つてゐる。英國人の方は私を天國から大砲、彈藥を以て追はれた様に描き、貌列顛人は今日に到る迄、此愚な話は皆聖書にあると思つてゐる。其他にまだ何を云つてゐるか私は知らない。何故と云ふに、其話は皆ある一つの長詩にあるんで、私によらず何人でも悉皆其を涉獵し得た者がないからだ。詩に依らず何の道でも同じ事だ。文學の尤も優れた形は悲劇だと云はれてゐる。此悲劇とは最後に人が悉く殺されて終ふ芝居なんだ。昔の記録には地震や疫病の事が記されて、此等は神の威力と人の弱小を表はすものだとしてあるが、今日の記録にかゝれてゐるのは戦争の記事許りだ。元來戦争と云ふのは二團に分れた人々が、彈丸、爆彈



の類で互に射ち合ひ、やがて一方が逃出すと、他方が馬に跨つて其を追詰め、逃ぐる處を片々に裂く事なので、而して例の記録は此は戦勝國の強大、威力、戦敗國の弱小を表はすものだと言葉を結んでゐる。こんな戦争が始まると、人々は歡呼して街々を走り廻り、政府に迫つて殺戮のために幾千億萬の金を使はせる。然るに一方平和の術には、如何に勢力ある大臣でも、日々自身の目に觸れる窮乏、悪疫を救ふためにも、一錢の剩餘をも餘分に費すことを敢てし得ない。實例は無數にあるが、其等は一事に歸する。つまり地上を支配してゐる力は、「生」の力ではなくして「死」の力だ。而して「生の力」を促して「生の力」其物を、人間なる組織に組立てしめた内部的必要と云ふのは、「一層高き生」を得んがためではなくして、「一層有力なる破壊の機械」を作出さんためなのだ。悪疫、地震、暴風などは其働きが餘りに強學的だ。虎や鰐魚は餘りに食に飽き易く、且残酷さに於て充分でない。何物かもつと恆定な、もつと殘忍な、もつと巧妙な破壊の機械がなくてはならぬ。

其機械が即ち人間なのだ。で、此人間は伸肢架、火刑柱、絞首臺、電殺機、劍銃、とりわけ正義、義務、愛國、其他あらゆる主義の發明者であつて、此主義あるがために、人らしき心を持つてゐる敏い人迄も、何日かは破壊者中の尤も怖ろしき破壊者となつて終ふんだ。

ドン ホオアン、ケツ！ そんな事はもう古いよ。君の弱點は君の欺され易い處にある。君は人間を人間の評價で取つてゐるが、今の様に云つて遣れば、却つて彼方を得意がらす計だ。奴等は自身では大膽な悪い人間と思つて喜んでゐるが、實は大膽でも悪いのでもなく、只もう卑怯なんだ。奴等を壓制者、人殺、海賊、弱い者虐など、云へば、却つて得意になり、自身の血管には昔の海賊の血が流れてゐると思つて威張り出すに違ない。虚言吐の泥棒と云つても名譽恢復の訴訟を起す位ですむ。併し奴等を憶病者と云つて見たまへ、其こそ奴等は狂氣の様に怒つて、死を犯しても其痛い事實を打消さうとするだらう。奴等は自分の行爲に就ては如何

なる理由でも説明するが、只一つ丈は云はない。自分の犯罪に就ては如何なる言譯でもするが、只一つ丈はしない。而して其一つとは無論卑怯と云ふ事なんだ。而もあらゆる彼等の文明は、此卑怯や、賤しき無氣力の上に築かれてゐるので、彼等自身では其を節度、體面と名けて喜んでゐる。驟馬や驢馬にも堪へ得る事には夫々限があるが、人間の墮落には限がない。だから終にはその鄙陋さは壓迫者自身にすら堪へ得られなくなつて、壓迫者自身が自から其を改革しなければならぬと思ふ様になつて來るんだ

悪魔 其通りだ。然るに君はさう云ふ輩の中に、君の所謂「生の力」があると云ふから驚かすにはゐられないのだ

ドン ホオアン、 否、實際ある。其は次に起る異常な事實があるからだ

石像 其異常な事實とは何だね

ドン ホオアン、 なに、こんな憶病者でも頭に何か理想を打込めば、皆強くなると云

ふことなんです

石像 何だ詰らない。私は軍人としての經驗から、人間の憶病な事は認める。憶病と

云ふ奴は船量と同じに誰にでもあつて、又あつても少しも構はないものなんだ。

併し人の頭に理想を打込む云々と云ふのは、全く愚にもつかないこつた。戦争で部下を戦はせるに必要なのは、少しの熱した血と、勝つより負ける方は一倍危険だと云ふ事をよく知らせて置くにあるのだ

ドン ホオアン、 戦争の詰らないのも多分其故なんだらう。併し人間は自分が今、或普通の目的を遂げるために戦つてゐると思ひ得る迄は、決して真に恐怖に打勝てるものぢやない——つまり彼等の所謂理想のためにです。何故十字軍は海賊より強かつたか。其は云ふ迄もなく十字架のために戦つたので、自分のためではないからだ。あの時十字軍にも劣らない勇氣で回戦した軍勢は何であつたか。其は自分等のためではなく、回々教のために戦つた軍勢だ。此回々教徒は吾々の祖先が

自分々々の寵や家のために戦つてゐたにも係らず、西班牙を奪つたではないか。其代り吾々の祖先が又あの偉大な理想、即ち加特力教會のために戦つた時には、彼等を亞非利加に追拂つて終つた

悪魔 (冷やかし様に) なに、君が加特力教徒だつて。やあ、信心家さん、其はお目出度う石像 (眞面目に) これ、私は軍人として教會の悪口を黙つて聞いてゐる譯には行かない

ドン ホオアン、大丈夫ですよ、將軍。此加特力教會の理想は回々教や、十字架や貴方方の軍隊と呼んでゐる、役に立たない、學校小供の様な格闘師の、下品な觀覽物が亡びても、必つと亡びずに残りますよ

石像 ホオアン君、君がそんなに軍隊の事を悪く云ふと、私は黙つてゐられなくなるよ

ドン ホオアン、駄目ですよ、僕は劍術が出来ないから。——人が其がために死をも

辭せない理想は、皆加特力の理想です。やがて西班牙が、自分達はサラセン人と異なる。自分等の豫言者もマホメットも餘り優秀はないと知る様になつたら、彼等は前よりは更に加特力的となつて立上り、一般人類の自由と平等のために自分自分の餓えてゐる、汚ない貧民窟の前の砦に立籠つて討死するに違ひない

石像 馬鹿な!

ドン ホオアン、貴方の馬鹿など云ふものが、人の死をも辭せない唯一の理想なんです。やがては「自由」丈では加特力の理想としては不十分になつて來、人は「人間の完成」のために死ぬ様になり、其がために各自の自由をも喜んで捧げる様になりますよ

悪魔 さうさ、何日になつても殺合ふ口實の絶える事はないからね

ドン ホオアン、殺合つても構はないさ。困るのは「死」ぢやなくして「死の恐怖」なんだ。人を墮落さすのは殺害や死ではなくして鄙陋の生活や、卑屈な勞銀、利得に

依つて生きる事なんだ。一人の生きた奴隷や、奴隷の主を生むよりは、十人の死者を出した方がまだいい。人は何日か立上つて——父は子に向ひ、兄は弟に向つて——奴隷を癩棄せんとする、偉大な加特力の理想のために、互に殺合ふ時が来るに違ない

悪魔 さうさ、君の先刻からのお談義の、自由や平等の力で、自由な基督教徒の白人を、競賣臺で賣られる異教徒の黒奴より、労働市場で安價く出来る様な時が来たらね  
ドン ホオアン、なに、白人の労働者にもやがて番が廻つて来るよ。併し今僕は偉大な理想の幻影を辯護してゐるのではない。此人間と云ふ自分銘々の事には飽迄臆病な奴も、理想のためには勇士の様に闘ふと云ふ實例を示してゐるに過ぎないのだ。奴等は市民としては下劣であるかも知れないが、熱狂の人としては中々に怖ろしい。奴等は道理に耳を傾ける様に精神的に弱い時丈しか他人の意志には従はない。若し吾々が人間に彼等の所謂神の仕事——やがては何と新しい名を附ける

か知らんが——を示す事が出来たら、彼等は自分の身の上などには頓着せずに、其仕事のために盡すに違ひない。  
アナ さうねえ、男は皆自分の責任を避けて、後を妻に始末させる氣でせうよ  
石像 いや、嬢やよく云つた。ホオアン君にうつつかり感心して、常識迄もなくして終つちやいけない

悪魔 おや、將軍。かうして女の問題になつて来ると、ホオアン君は今迄よりももつと喋りますよ。併し正直を云へば、私には此が一番興味のある題目です  
ドン ホオアン、アナさん、男の女に對する義務と責任は、小供の糧を得る役目で終始するんです。女には男は只小供を設けて、其を養育て上げる手段としか思はれちやらない

アナ 其は貴方の女心に就てのお考へなんでしょうか。妾は其を皮肉な、厭はしい物質的なお考へだと思ひます

ドン ホオアン、アナさん、怒つちや不可ない。僕は決して女の心全體に就て云つた  
 んぢやない。只異性として女の男に對する考へを述べた丈で、自分を何よりも先  
 に母として考へる、女の女自身に對する考へと同じく少しも皮肉ぢやない。性の  
 上から云へば、女は自然の至高の傑作とも云ふべき人間を、永久に保存するため  
 の機械であり、男は又自然の命令を尤も經濟的に遂行する、女の機械に過ないん  
 だ。女は進化の過程の遠い昔に於て、單性の過程よりは、遙に好い物を造出し得  
 る様に、男子を發明し、男子を分化、創造した事を本能的に知つてゐる。で、男  
 は、女が特に自分を作つて呉れた當の目的を遂行してゐる間は、夢想に耽り、愚  
 なる事をもし、理想に憬がれ、勇ましい行爲をしても、其は元より差支ない。但  
 し其主調は、女、母の役目、家族、家庭の崇拜でなくてはならぬ。併し女の方から  
 云へば、彼女に妊娠せしむる事丈を唯一の官能としてゐる、別種の人間を作つた  
 のは、實は無考へな、而も危険な事であつたのだ。何故と云ふに其後の様子を見

るに、第一男は女の手で益々繁殖して、終には殆んど同數となり、従つて女は精  
 をも洩らす妊娠の役目を男に省いて、彼のなすが儘に任せて置いた莫大な精力を  
 ば、只其一小部分しか自分の目的に使へなくなり、其餘つた精力は腦や筋肉に廻  
 つて、肉體上にも女は男を支配し得ない様になり、其上男の想像力は發達し、精  
 神作用は強烈になつて、やがては單に自己複製の働丈では満足し得ない様にな  
 り、女に謀らずして文明を創り、其根柢をなす家事向きの仕事は、女子當然の務  
 として見る様になつたからだ

アナ 何方にしても其丈は眞實ですね

悪魔 だけどもあ、此文明と云つたら一體此は何だらう

ドン ホオアン、なに、君の平凡な皮肉の的にや恰度いゝものさ。併し此は男の側か  
 ら云へば、何よりも先に、自分を詰らない女の目的の道具に使はせず、もつと  
 何か意義あるものにしやうとする企圖であつたのだ。今迄の處では此「生」が「生」

其物の保存許りでなく、同時に一層高い組織と、一層完全な自己意識に到達せんと絶えず努力してゐるのは、云はゞ「生」其物の力と、死や墮落の力との戦ひなので、其戦ひの結果は尤もよく見積つても、部分的の勝利としか云へない。のみならず此戦では稀に勝つ事があつても、其は指揮官の力ではなく、實際の戦闘と同じく、多くはまぐれ當りの勝利なんだ

石像 あれは私に當てたんだな。まあい。云ひたまへ、云ひたまへ

ドン ホオアン、あれは貴方に當てたんぢやない。もつと高い力に當てたんだ。併し其でも貴方は戦争で、敵の將軍が愚物なら味方の將軍が少しは愚でも、勝てる事をお氣付なすつたでせう

石像 (大真面目に) ほんとにさうだよ。君、ほんとにさうだ。魯鈍者でも時にや非常な手柄をする事があるよ

ドン ホオアン、で、此「生」の力も愚物なんだが幸ひ死や墮落の力程愚ぢやない。

其に此二つは何日も「生の力」に依存してゐるので、此意味からは「生の力」が勝つた様にも云へる。で、單に豊かな生産力とか、詰らない貪婪心から生産た物は、人間はいくらでも所持してゐる。どんな種類の文明でも其が残存してゐる限りは、立派な銃や、營養のいゝ兵士の缺ける事はない

悪魔 ほんとにさうだ。跡に残るのは有效な「生」の手段ではなくつて、何日も有效な死の手段だ。君は何か云ひ出せば何日もいやに議論を捏ね廻したり、捉處のない事を云つたり、詭辯を弄したりして、堪らない程長い饒舌はするけれども、何日も終には私の議論に歸つて來るからうれしい

ドン ホオアン、冗談ぢやない。長いお饒舌を始め出したのは君ぢやないか。併し僕の云ふ事が解らなかつたら、勝手に何處へでも行つて、愛とか美とか其他君の好きな話らない話の相手を見付けたらいいだらう

悪魔 (非常に氣を悪くして) ホオアン君、其は酷いよ。失敬だ。私も頭の方の人間で、こ

んな話は誰よりも解る方なんだ。私は先刻から可成に君の相手もし、自分では全然君を言負したと思つてゐる。何ならもう一時間も遣らうぢやないか

ドン ホオアン、よし、では遣らう

石像 私は特に君の議論に如何云ふ主張があると思ふ譯ぢやないが、其ても此處では一寸の時間潰しと云ふのではなしに、永久の時間潰しをしなければならぬのだから、是非遣つてくれたまへ

ドン ホオアン (多少苛々して) 解らないかよ、大理石のお父爺さん。僕の主張は君より一步進んでゐるんだよ。君達は「生」とは一種の力で、是迄自らを組織立てるために、あらゆる實驗をなし來つたと云ふ事や、太古の巨象も、人間も、鼠も大懶獸も、蠅も蚤も、昔の基督教界の學者達も、皆此生硬の力を、一歩一歩高い個性——此場合理想的の個性は、全能、全智、無錯誤にして而も徹底的に、誤りなき自己意識の人、一言にして言へば神のだが——に築き上げんとする試験の産物だ

と云ふ、僕の議論に賛成しないのかい

悪魔 私は議論のために賛成して置かう

石像 私は議論を避けるために賛成して置かう

アン 妾は昔の基督教界の學者達に就ての議論には飽迄不賛成です。どうぞお願ひですから、あんな方々は議論の中に混へない様にして下さい

○ドン ホオアン、いや僕は頭韻の都合で引入れた丈なんで、是からはもうあの人達の事は云はずに置かうよ。で、其丈は例外として、皆今の話には賛成なんだから、更に一步進んで、「生」は神性に達しやうとする企の成功如何を、結果として生れた「美」とか「肉體の完成」などに依つて計りはしないと云ふ事を認めたら如何だ。何故と云ふに此二つの點では、ずつと前に御存じのアリストファネスが云つた様に、鳥の方が飛翔力や、羽色の美や、序に僕の考へも加へて云へば、愛や巢籠の麗しい歌で、殆んど他の物とは比較にならぬ程優れてゐるのだから、愛

や美が「生」の目的であるならば、一旦彼等を作つて置きながら、更に異つた途に出發して、不恰な象や、吾々の祖先の醜い猿などから新規に始めると云ふ事は、到底考へ得られないからだ

アナ アリストフアネスは異教徒ですよ。其に聞いてゐればホオアンさん、貴方もあまり其には變らない様ですね

悪魔 ぢや君の結論では、「生」の求めるのは不恰な者や、醜い者だと云ふんだね

ドン ホオアン、否、意地悪の悪魔さん、決してさうぢやないんですよ。「生」の狙つてゐるのは頭脳だ。大切の大切の頭脳なんだ。つまり其に依つて自己意識のみならず、自己理解にも達せられる大切の器官を求めてゐるんだ

石像 ホオアン君、其は形而上の議論だよ。何故又馬鹿な畜生悪魔……(悪魔に)此は失敬

悪魔 どうしまして。私は皆様が物事を強く云ふ時、私の名をお使ひなさるのを、何

日も非常に光榮と思つてゐます。どうぞ自由にお使ひなすつて

石像 否。其は誠に有難い。私は天國ですら時々昔の軍隊の言葉癖が出て困つた。實は私は今ホオアン君に、何故又「生」がそんなに頭脳をほしがるのか。何故そんなに自己を理解したがるのか。何故自らを享樂する丈で満足出来ないのか、其を聞かうと思つてゐたんだ

ドン ホオアン、將軍、頭脳がなかつたら、享樂しても享樂してゐる事を知らないでせう。さうしたら折角の面白味がなくなるぢやありませんか

石像 成程、其はさうだ。併し私にすれば享樂してゐると云ふ事を知ると云ふ事を知る丈の頭脳があれば其で澤山で、何故楽しいかなど、云ふ事を知り度いとは思はない。否、却つて知らずにゐる方が好ましい。私の経験では快樂は考へれば消えて終ふものなんだ

ドン ホオアン、知力が世間に請の悪いのも全く其爲です。併し「生」、即ち人の背後



にある力に取つては、知力は必須です。何故と云ふに若し其がなかつたら、人は  
 躓き死んで終ふからです。恰度「生」が幾時代の葛藤を経て、生た組織が、自分  
 の行かうとする處を見、自分を助け、乃至は脅かしに来る處の物を知り、以前に  
 は其がために、命をも損じた種々の危険を避けるために、彼の眼と云ふ驚くべき  
 器官を發達せしめた様に、今日では物質界を見る眼ではなくして「生」の目的を  
 見、其に依つて今日の如く近視的なる各自の目的を立て、「生」の目的を妨げ破  
 る様な事はせずして、各個人一様に此大目的のために働き得せしめんがために、  
 心の目を發達進化させてゐるんだ。現今の如き有様ですら、流石に或種の人丈は  
 幸福でもあり、又利害、妄想のあらゆる葛藤の内にあつて、一般の尊敬を受けて  
 來てゐる

石像

其は軍人の事だらうね

ドン

ホオアン、

否、將軍、軍人の事ぢやない。

軍人の近づく時には世界の人は、匙

に鏡を下し、女を他へ送つて終ひます。否、僕は戦争や勇士を讚美するのではな  
 くして、哲學者を讚美するのです。瞑想に於ては世界の内的意思を發見せんと勉  
 め、發明に於ては其意思を遂行すべき手段を發見せんとし、行爲に於てはかくし  
 て發見せられたる手段によつて、其意思を遂げんことを求める哲人を讚美するん  
 です。他の種類の人には僕はもう飽々した。奴等は皆詰らない出來損許りだ。  
 僕は地上にゐた時、あらゆる種類の學者が僕の周圍に忍び寄つて、乗じ得べき弱  
 點を探り求めました。醫師は身體を癒やすには斯々しなければならぬと云つて、  
 ありもせぬ病氣に庸醫の療法を教へて呉れた。僕は虚病患者ぢやないと答へて遣  
 つた。すると彼は僕を無識者と云つて彼方へ行つて終つた。神學の先生達は、魂  
 を救ふには斯々しなければならぬと命じたが、僕は肉體上の虚病患者でない如く、  
 精神上の虚病患者でもない。従つてそんな事に己を煩はさうとは思はなかつた。  
 すると彼等は僕を無神論者だと云つて、又彼方へ行つて終つた。續いて政治家が

来た。其男は自然の目的は只一つしかない、而して其は彼を議會へ入れる事だと云つた。僕は彼の議會に入る入らぬは、何等自分に係はらないと云つて遣つた、すると彼は僕を黨派外と云つて此も又彼方へ行つて終つた。終に藝術家と云ふ浪漫的な男が、戀歌や、繪や、詩を持つて来て、其男とは數年間樂しく遊び、多少の利益も得た。何故と云ふに僕は其のために知らず知らず感覺を養ひ、其男の歌、其男の繪、其男の詩が、僕の耳や目や情を發達させてくれたからだ。然るに其男は到頭僕を女の崇拜に引入れて終つた

アナ まあ！

ドン ホオアン、 え、僕は女の聲にはあらゆる音楽があり、女の顔には繪畫のあらゆる美があり、女の心には詩のあらゆる情緒があると信ずる様になつたんです

アナ 其で必つと失望なすつたでせう。そんな立派な物を皆女にくつけてお終ひなすつたのは、其は貴方が悪いんぢやありませんか

ドン ホオアン、 否、一部分は女の方の罪です。何故と云ふに怖ろしい本能的の狡猾い根性で、女は何日も黙つて僕に讚美させ、僕が自分の幻想や、思想感情を女のそれと思誤つてゐたのを、強ひて訂さうとはしなかつたからだ。一體浪漫的な男と云ふものは、大抵は非常に貧しいか乃至は非常に憶病であるので、自分の理想その物を實現したやうな美しい女や、上品な女には近けない。従つてかう云ふ種類の男は死に至る迄自分の夢を信じてゐる。併し僕はより多く性情、境遇の恩寵を受けてゐた。第一僕は貴族の生れて、金もあつた。而して容貌で彼方の氣に入れない時には、話で旨く丸めて遣つた。尤も大概は兩方共旨く行きは行つたけれども

石像 女蕩しだなあ！

ドン ホオアン、 え、併し僕の蕩し様さへ氣に入るんだから致方がない。——で、女と云ふ奴は彼方で此方を好いと思ふと、自分が惚れてゐると思はせる様に仕向け

て来る。其辯二人の間の旨く運んだ時には決して「嬉しい、妾の愛が満足されま  
した」とは云はずに、何日も極まつて「到頭阻碍が除れましたのね」と云つて、  
其から「何日又來らつしやるの」と來る

アナ 其は男の方が仰やるんぢやありませんか

ドン ホオアン、否、僕は決してそんな事を云つた覚えはない。併し女は皆さう云ふ  
で、僕は此二つの言葉を聞いて何日も驚いたのだ。何故と云ふに初めの方は女は  
専ら男の防禦を破つて、心の本城に乗込んだとの衝動に驅られてゐる事實を現は  
し、終の方は其後は男を自身の所有物と見、男の「時」は全く自身の左右し得ら  
れるものと思つてゐる事を、公々然言ひ表した事になるからだ  
悪魔 さう思ふのがつまり君に情がないからだよ

石像(頭を振つて) ホオアン君、そんなに女の云つた事を、人前へ持出すものぢやないよ  
アナ(きびしく) 貴方は其を神聖と思つてい、答へず

石像 其でも云ふ事は確に云ふね。私も阻碍の方はあまり氣にかけなかつたが、も一  
つの方は此方でよほど酷く參つてゐるなれば、必つと多少氣持の悪いものだ

ドン ホオアン、其から女は其迄は幸福に暢氣にしてゐたのが、急に心配相になり、  
男の事を氣にかけ、始終巧らみ、陥れやうと謀り、追跡け、看守り、待伏して、  
餌食を遁がさない事許り考へてゐる。——勿論餌食は男なんだ。此は男の豫期と  
は異ふ。勿論此は當然の事であつたかも知れんが始に考へてゐた様に、音楽、繪  
畫、詩歌、歡興が美しい女に合體されたのは大變な違である。其で僕は遁げた  
んだ。ずい分度々遁げた。實際僕は其で終には有名になつた位だ

アナ 有名つて悪い方で有名なんでせう

ドン ホオアン、僕は貴方からは遁げやしなかつたぜ。貴女は他の女から遁げたから  
つて、其を責めるんぢやあるまい

アナ 馬鹿な事を云ふもんぢやないわ。妾はもう七十七のお婆さんぢやありませんか。

併し折があつたら妾からもお遁げなすつたに違ない——妾が遁がして上げたらさ。併し妾は他の人の様に、そんなに容易くは行きませんよ。男の方で銘々に自分の家庭や、義務に忠實になさなかつたら、側から掛つても、さうさせなければなりません。其は勿論貴方は誰方でも音楽や、繪畫や、詩の化身の様な美しい方と結婚したいでせうが、相憎そんな女は地上にはゐないんだから、手に入れ度くも入れる譯には行きません。だから若し肉と血丈で不足でしたら只止す丈の事です。其他に致方はありません。女は血や肉の夫で辛棒しなげやならないので、其すら時には充分ない位ですから、貴方方だつて血と肉の妻で辛棒なさらなげやなりませんよ（悪魔は如何かと云つた様な顔をする。石像は顔を歪める）貴方達にはお氣に入らない様ですが、眞實は眞實ですよ。だからお嫌でしたら、聞流してお終ひなすつたらいゝでせう

ドン ホオアン、アナさん、貴方は浪漫に對する僕の非難を、只二三語で云ひ現はし

て呉れた。僕が藝術家氣質の浪漫的の男に——浪漫的と云つても、實は自分の溺愛を勝手にさう云つてゐるんだが——背を向けたのも全く其理由なんだ。僕は無論彼等が耳や目の用法を教へて呉れたのを感謝はしたが、其と同時に彼等の好んでする美の崇拜や、幸福の追求や、女子の理想化は、生の哲學としては全く無價値なものだと云つて聞かして遣つたのだ。其て彼等も僕を俗物と云つて此も彼方へ行つて終つた

アナ 女には種々の缺點もありますが、其でも貴方に何か教へた様です

ドン ホオアン、それ處ぢやない、女は他のさまの事迄も僕に解釋してくれた。

否、諸君、始めて阻碍の取除かれた時には、何と云ふ驚くべき目の醒方だらう。僕は始めから溺愛もし、陶醉もし、其他あらゆる愛の若い迷夢に耽るつもりでゐた。然るに此はどうした事だらう、其場になると僕の知覺は益々明瞭になり、僕の批判はますます鋭利になつて、如何に嫉妬深い女の競争者よりも、あらゆる女

の缺點が鋭利に目に映じ出した。つまり僕は騙され得なかつたのだ。嘔囉仿謾なしに女を取つたんだ

アナ 併し其でも手にはお入れなすつたんでせう

ドン ホオアン、あれは實に啓示だつた。あの時迄は僕は堅く自分を獨立の人間と信じてゐた。而して自分の理性が其を驗め、是認する迄は、決して一步も意識的に進む様な事はなく、自分は純粹に合理的な人間、云ひ換へれば思想家！と信じて、愚なる哲學者と共に「我は考へる、故に我は存す」とさへ云つてゐた。然るに其後逆に「我は存す、故に我は考へる」、更に又「我は更に多くを考へたい、故に我は更に多くの者にならなければならぬ」と云ふ様に教へて呉れたのは、實に女であつたのだ

石像 ホオアン君、今のは非常に抽象的で、只言葉の議論の様に聞える。出来るなら君の發見を、具體の例を離れずに、女との間の面白い逸話の形式にでも入れたら

ら、もつと解り易くなると思ふが

ドン ホオアン、馬鹿な、何を此上云ひ足す必要があるものか。貴方にはまだ分らないのか。僕が女に向ひ立つた時、僕の明晰な批評的頭腦の凡ての纖維が、女を手放して己を救ふ様に警めたと云ふんだ。僕の道念は止せと云ひ、僕の良心も止せと云ひ、僕の女に對する俠氣や哀憫も止せと云ひ、自分に對する細心なる思慮も止せと云つた。無數の歌や、和階に鍛へられた僕の耳、無數の繪に鍛へられた僕の目は、彼女の音聲、容色を片々に裂いて見せた。僕は又誰にも氣付く兩親との似顔を見て、三十年後にはその女のどうなるかと云ふ事も知り、笑ふ口元から中に光つてゐる、情ない義齒の黄金の光をも見、感情の變化の異なつた特長にも氣をつけ、而して嚮に僕の夢みてゐた、不死不老の、珊瑚や象牙の美しい人と、天の原を歩いてゐる様に思つた浪漫的な幻は、此至高の瞬間に僕を去つて終つた。僕は其等を想ひ起して切に其幻影を再び心に生かさうと勉めたが、其等は今は尤

も空虚なる虚構事の様に見え、判断は昏す事が出来ず、頭腦も又凡ての結果に對して否と云つてゐた。然るに最後に僕が、女に云ふべき斷の言葉を考へてゐた時に「生」は僕を捉へて船人が魚を海鳥の口に投げる様に、女の腕に投込んで終つたと云ふのだ

石像 ホオアン君、君はそんなに難しく考へんでもよかつたんだよ。世間の伶俐な連中と同じく、君は頭腦があり過ぎて却つて禍をなしてゐる  
悪魔 て、君は其ために、必つと前よりは幸福になつたらうね

ドン ホオアン、否、幸福にはならない、併し伶俐にはなつた。其瞬間から始めて僕は自分と云ふ物を知り、自分を通じて世界を解する様になり、其時からして、「生」の不可抗力に種々拘束を加へやうとするのは、全く無益である事、その他細心、思慮ある選擇、徳、名譽、貞操等を説くのは……

アナ ホオアンさん、一言でも貞操を悪く仰しやるのは、妾への侮辱ですよ

ドン ホオアン、アナさん、貴方は夫一人で十二人の子供を生んだのだから、貴方の貞操に就ては一言悪くは云はないよ。如何に自墮落な女でも其上遺様はありやしない

アナ なに、夫を十二人持つて、子供を一人も生まない様にも出来ませう。ホオアンさん妾にはさうも遣れば遣れたんですよ。而して其と此とは、妾の増殖した地上には、大した相違になるんですよ

石像 娘よく云つた。ホオアン君、君は負され、碎がれ、滅茶くんに遣られて終つたな

ドン ホオアン、否、そんな事はない。何故と云ふに成程其相違は眞に大切な相違ではあるが——アナさんが直截に要點に進んで行つた事は僕も認める——其は愛や貞操や、恆心の問題ですらない。何故と云ふに十二人の子供を十二人の夫で持つても地上を満たす上には變りはない。否、却つて其方が有効であるかも知れない。

假へばオッタヴィオ君が貴女の三十の時に死んだとすれば、貴女は決して後家ちや暮すまい。其には貴女は美し過ぎる。次にオッタヴィオ君の代りが又貴女の四十の時に死ぬとする、其でもまだ傍では放つちや置くまい。二度結婚する婦人は、出来る身分にさへなれば、三度でも結婚する。身分ある婦人が三度夫を更へて、法に適つた十二人の子供を生むと云ふ事は、あり得ない事でもなく、又世間から咎められる程の事でもない。さう云ふ女があの一の私生兒を生んだがために、溝の中に蹴落されて再び浮び出づる事の出来ない哀な娘より、表面正しいは云ふまでもないが、己を持するに嚴だと云ふ譯には行かないだらう

アナ 娘の方が女の徳に外れてゐますよ、妾には其で澤山です

ドン ホオアン、其では徳と云ふのは、結婚せる人達の「組合の章」に過ぎないではないか。事實は事實として見やう「生の力」の結婚を尊重するのは、只其が子供を尤も多く拵へて、其に尤も行渡つた注意をさせて行くための工夫だからで、名

譽、純潔其他一切の道德上の虚構事などは、「生の力」にはどうでもいゝんだ。結婚は人間の定めた制度中尤も放縱なもので...

アナ まあー！

石像 (反對して) 冗談ぢやないよ...

ドン ホオアン (容赦なく) 否、人間の定めた制度中の最も放縱なもので、結婚の喜ばれるのも實は其處にあるんだ。其に夫を求める婦人はあらゆる猛獸中の最も殘忍な物とも云ふべく、結婚と道德の混淆程、甚だしく人類の良心を打破したものは、殆んど他に比類がない。これ、アナさん、何もそんなに駭いた顔をしなくつてもいい。貴女はよく知つてゐるぢやないか。結婚とは表面許りの遊藝や、欺き勝の理想化を餌食にして、男を捕へやうとする筈ぢやないか。貴女の死なれたお母さんが、叱つたり懲らしたりして、貴女許りか自分迄も嫌な歌を、五つ六つ許り小琴で弾くことを教へなすつたのは、貴女の求婚者を欺して、將來貴女を妻にする

人は傍に天女の様な女がゐて、家に旋律の波を漂はすとか、少くとも御飯の後で、心地よく樂の音で眠らしてくれる位に信ぜさせるより、他に考へがなかつたに違ない。で、いよゝゝ貴女はオツタヰオ君と結婚した。處が教會で二人が結付られて以來、貴女は小琴を開けた事はないだらう

アナ 貴方はほんとに馬鹿ですね。若い結婚した許りの女は、他にいろゝの用事があつて、中々後に倚掛のない椅子にかけて小琴などを弾いてゐられるものですか。だから自然弾かなくなるんぢやありませんか

ドン ホオアン、實際音楽が好きだつたらそんな事はないさ。なに、鳥が網にかつたから、其て餌を棄て、終ふんだ

アナ (皮肉に) えゝ、男の方は自分等の鳥が網にかつても、決して假面は棄てなさいませんか。男は決して妻を等閑にしたり、我儘云つたり、残酷な扱をしたりなさいませんか。えゝゝ、そんな事はありませんと

ドン ホオアン、雙方でこんな事を言合ふのは抑も何を證明してゐるだらう。つまり男も女も一樣に酷い欺騙者と云ふ事に他ならないではないか

アナ お止しなさいよ、馬鹿な。大抵の結婚は皆立派に愉快に行つてゐますよ

ドン ホオアン、アナさん「立派に」とは強い言葉だ。貴女の云ふのは惻巧な人達は、お互にどうかこうか辛棒し合つて行くと云ふのだらう。假に僕が船牢に送られて偶番號の隣合つた罪人と一所に繋かれるとすれば、止むを得ない事と諦めて二人の間を、出来る丈愉快にして行くより致方がないぢやないか。見た人の話では、かう云ふ仲間には非常に親しい者が澤山あり、少くとも大抵は可成に仲がい、相だ。併し其かと云つて鎖を結構な飾とか、船牢を幸福な住家とは云へなからう。結婚の祝福とか、其の誓言の變らない事などを好んで口にする連中は、やがて一旦鎖が切れて囚人のなすが儘に任せて置いたら、社會の組織が滅茶々々になつて終ふなどゝ、臆面なしに云ふ連中なんだから堪まらない。貴女は兩方に理窟をつ



ける譯には行かない。囚人が樂しがつてゐたら閉込める必要はないし、樂しがつてゐないのなら、ゐると云つて見たとて致方がないぢやないか

アナ どつちにしても、妾は又お婆さんの資格になつて判然云ひますが、結婚では人は殖えますが、放蕩では殖えません

ドン ホオアン、若し其がさうでない時が來たらどうします。貴女は志のある處には途があつて、どんな事でも人が眞に爲やうと思ふなら、終には必つと其手段を見出すものだ云ふ事を知りませんか。いや、貴女達は出來る丈の事を爲て來なすつた。貴女達有徳な淑女や、貴女達の様な物の考方をする人達は、正しき愛と云ふものを此上ないよい物として、其方に男の心を向け、而して其正しき愛と云ふのは、上品で美しく、優しくつて華奢な女を手に入れ、其より得來る浪漫や、美や、幸福と解せしめる様に出來る丈の努力もし、同時に女には自分の若々しさ、健康、身恰好のよさ、上品さを何よりも大切と思ふ様に教込みなすつた様だ。

處で貴女に尋ねるが、此感覺、情緒の樂しい天國で、泣く兒や家事向の仕事は、どんな地位を占めてゐるのだらう。かう云ふ事になれば、やがて必然の結果として人間の意思が腦髓に、私に愛や美や、浪漫、情緒、熱情を、其に附隨する厭はしい償や、費用や、煩累、苦難、疾病、苦痛、死の危険、多勢の下僕、乳母、醫師、教師などを要せず味へる手段を發明して呉れ」と云ふ様になりはしないだらうか

惡魔 ドン、ホオアンさん、そんな事は皆此處私の領では實現されてゐますよ

ドン ホオアン、さう、死の價を拂つてねえ。併し人間はその價ちや買ひませんよ、まだ地上にゐる内に欲しがつてゐるんだから。なに、手段は發見されるに違ない。意思が眞面目であつたならば、腦髓に出來ない筈がない。日はやがて近づいて來る。其時には國家の人口が年一年に衰へて、六室の小さい別荘が、大きな本邸よりも價が貴くなり、性質の悪い向見ずの貧乏人と、愚な信心深い金持とが、人類

の絶滅を防がうとして却つて其を墮落せしめ、他方には大膽にして細心なる人、儉やかにして己を謀り、功名を追ふ人、強烈なる想像力と詩的性情を有する人、金銭と質實なる快樂を愛する人、并に成功、藝術、戀愛の崇拜等は一齊に立上り、一人を枯らす工夫」を以て「生の力」を牽制するだらう

石像 今の議論は大變面白い、其に道理もある。併し君がアナの年齢か、其程でなくとも私の年齢迄生きてゐたら、必つと氣付いたらうが、人間は貧乏とか子供が生れるかも知れぬと云ふ氣遣、其他一切の家庭の心配事から免がれて、是から充分樂まうと思つてゐても、すぐ代つて老齡、醜さ、衰老、死などの恐怖に犯されるものだ。小供のない労働者は二十人の小供よりも、妻の病氣や、絶えず妻より受ける娛樂や氣晴の要求で苦しめられ、一方妻は夫よりも却つて慘な目をしてゐる。私は若い折には女にも好かれ、石像となつてからは美術批評家に讚められなどして、其相應の虛榮心は持つてゐた。併し白狀するが若し私が世の中でこんな樂し

みに耽る以外、他に何も爲る事がなかつたなら、私はすぐ自殺して終つただらう。私がアンの母と結婚した時——或はもつと正確に云へば、私は終に負けてアンの母に結婚さして遣つたと云ふ方が適當かも知れんが——私は自分と自分の枕に刺を植えてゐるので、是迄征服された事のない、威張りたがりの若い士官の私に取つては、結婚は敗北であり、捕虜であると云ふ事はよく自分でも氣がついてゐた

アナ (氣を悪くして) まあ、お父さんでは

石像 お前に氣を悪がらせて濟まないが、ホオアン君が吾々の議論から、あらゆる憤ましさを引剥いて終つたのだから、私は有の儘の事實を話してもいゝかと思つて

アナ え、妾も必つと其刺だつたんでせうよ

石像 そんな事はないよ、お前は刺どころか花だつた。面倒は主にお前のお母さんが見たんだからね

ドン ホオアン、ちや將軍一體何故貴方は、今も仰つた様に一度は貴方が自殺しや

うと迄思つた、所謂感情的な幸福に耽りに、此處へ來なすつたんですか

石像 (念所を指されて) いや、云はれて見れば成程さうだ  
悪魔 (駭いて) おや、貴方は一旦云つた事をお取消しなさるんですか(ドン、ホオアンに) 君

が先刻から理屈を捏ねてゐたのは、人に氣を變へさせやうとの假托だつたんだな。  
(石像に) 貴方はもうあの怖ろしい倦怠さを忘れてお終ひなすつたんですか、私が折角此處に遁場を拵へて上げやうと云ふのに(ドン、ホオアンに) 其に君の人間の減少や絶滅の、やがて近づいて來ると云ふ先刻からの議論をきけば、君自身も其お蔭で上品になり、高尚になり、發達させられたと云つてゐる、愛や藝術の歡樂を今の内に出来る丈け味ははなければならぬと云ふ事になるぢやないか

ドン ホオアン、 僕は決して人類が絶滅するとは云はなかつた筈だ。「生」は盲目的な無秩序な状態にあつた時でも、乃至は其後自らを如何なる形式に組織立て、からでも、決して己より己の絶滅を謀る様な事はない。將軍の言葉を挿まれた時、僕

はまだ充分云ひ切つてはゐなかつたんだ

石像 君が何日迄經つたら云ひ切るか、其からして怪しいよ。君は自分で喋つて自分で聞くのが餘程好きらしいからね

ドン ホオアン、 それはほんとです。併し折角今迄辛棒なすつたんだから、寧ろ終ひ迄辛棒なすつたらいゝでせう。で、話が元へ戻つて、今僕の云つた人間の滅退が、明かにさう認め得る様になる迄には、必つと反動が起つて來ます。人間を生出すと云ふ偉大な目的、否、其を今は超人と思はれてゐる様な高さに迄導き上さうと云ふ偉大なる中心目的、其目的は今はまだ愛とか、浪漫とか、慎みとか、氣難しさとか云ふ毒氣の雲に覆はれてゐるが、やがては最早銘々の好みの満足や、女小供の夢みてゐる不可能な幸福の實現や、又は大人の相手や金欲しさの結婚とは混同され得ない目的として、明かに表面に表はれて來るに違ない。さうなれば故國の教會のあからさまなる結婚の儀式も、不謹慎として省略められたり、半ば禁ぜ

られる様な事はなくなつて終ひ、結婚の眞の目的に關する合宜、嚴肅、眞摯にして威權ある宣言は、一同に採用され、尊重されて、一方在來の浪漫的な誓約や、「二人が死別れる迄」とか、其に類した誓は堪へられない輕薄な言草として削取られる様になるだらう。アナさん、貴女は吾々男性が、性の關係は決して友誼的乃至は個人的關係ぢやないと云ふ事實を、常に認め來つた明達を認めて呉れなければいけない

アナ 結婚が個人的や友誼的關係ぢやないんですつて。此より個人的な、此より神聖な、此より清淨な關係はないぢやありませんか

ドン ホオアン、云ひ度ければ神聖とでも、清淨とでも云ふがいゝが、決して個人的友誼的ぢやない。近い話が貴女と神との關係は、神聖、清淨であるかも知れんが、其を個人的友誼的と呼ぶ事は出来なからう。元來男女兩性は普遍的創造力の詰らない手先に過ないのだが、性的關係では此普遍的創造力は、凡ての個人的斟酌を

破棄、凌駕するのみか、あらゆる個人的關係をも打破して終ふ奴なんだ。此處に見ず知らずの二人の男女があるとする。此二人は異つた國語を話し、人種、色、年齢、性情も全く違つて、生殖と云ふ事の可能以外には何等の紐もないとする。而も「生の力」は此生殖と云ふ作用があるために、二人を只目を見交した丈で、相互の腕に抱かして終ふ。此事實は結婚が當の相手に相談されずに、勝手に親達に取極められるのを見ても分るではないか。貴女は英國の貴族の子女が、百姓の様に知合になつて戀し合ふ不作法な風習を見て、よく嫌な氣がすると云つた事があるが、其當の百姓ですら夫婦約束をする前に、果してどの位知り合つてゐるだらうか。なに、人は出入の辯護士や醫者を決めるにても、決して若い人達が戀に落ちて結婚して終ふ徑路の様な、あんな輕卒な振舞はしやしない

アナ え、放蕩者の哲學は其てよく分りました。女の方に轉んで來る結果は、少しも構はないんでせうよ

ドン ホオアン、結果ですか。さう、結果から云へば女が男を掴へて離さないのは道理だ。併し貴女でも豈夫そんな關係を、愛情關係とは云はないだらう。其が云へる位なら巡査と罪人の間をも戀愛關係と云つてい、譯だからね

アナ それ御覽なさい。結婚が必要だと云はなきやならなくなつたぢやありませんか。尤も貴方の云ふ處では、愛は凡ての關係中尤も軽いものだからですけど

ドン ホオアン、否殊に依つたら尤も重いものであるかも知れない。一個人の事柄となるには重過るのかも知れない。若し貴女のお父さんが、個人的に憎を持つてゐなければ、誰も殺さないと云つたら、國家に仕へる事は出来ないてせう。其と同しく若し女が自分で愛してゐない者とは結婚しないと云つたら、國のお役に立つ事は出来ない。否事實さうでないのは貴女もよく知つてゐる筈だ。身分のある女の結婚するのは、身分のある男の戦ふのと同じく、全く政略的乃至は家族的理由なんて、決して個人的理由に依るんぢやない

石像 (感心して) い、處へ氣が付いたものだね、ホオアン君。私も悠つくり一度考へて見なければならん。成程君は考へてゐるね。どうして今の事を考へ付く様になつたんだね

ドン ホオアン、なに、經驗で知つたんです。僕がまだ地上にゐて、例の通り女に言寄つた時には——其がために到る處で悪く云はれてゐるが、お蔭で又非常に面白い傳説的人物になりました——大方次の様な返事を受けたものです。つまり女は、僕の云ひ出した事が誠意なら請てもい、と云ふんで、彼方の意味はどんな事かと聞いて見ると、僕の云ひ出したのは、女に資産があれば僕の所有にし、無ければ一生女の養育を引受けると云ふ事が一つ。其から又僕は死ぬ迄女と一所に住んで、助言を聞いたり、話の相手をしたりして、よし面白くなくとも、後の祟を怖れて面白い様な顔をする約束するのが一つ。次に、此は何より大切なんだが、僕が其女のためにあらゆる他の女に、永久に後を向けると云ふ事が一つ。僕の云

ひ出したのは此三つかと云ふんだ。僕は其條件があまりに法外、殘忍であるから其て反對したのではないが、其あまりに不適切のに呆れて終つたんです。て、僕は何時にも極つて卒直に、僕はそんな事は夢にも考へてゐない。女の人物と智力が僕と同等乃至は以上でない限りは、一所に話せば僕を墮落させ、助言を受ければ僕を誤るに違ない事や、女と絶えず一緒にゐるのは、事に依れば僕には退屈で堪へられないかも知れない事や、僕は自身の感情に就ては一週間先も確かには云へない、況や一生の終迄は尙更だと云ふ事や、其から僕を彼女以外あらゆる人々との自然な、楽しい關係から切離さうとするのは、若し其に従へば偏狭な、捻れた人間となり、従はない迄も厭はしい、始終宅に引込んでゐる人と云はれなければならぬ事や、最後に僕の女に言ひ寄つたのは、全く此等の事柄とは關係なく、自分の「男子」と云ふ性質の、彼方の「女子」と云ふ性質に對して起つた、極めて單純な衝動の結果に過ぎないと答へて遣つた

アナ つまり其が不道徳な衝動だつたと仰やるんですね

ドン ホオアン、アナさん、自然は貴女の云ふ意味での不道徳なものなんです。僕は其を恥しく思ふが、今更如何ともする事が出来ない。自然は取持女、時は破壊者、死は殺人狂だ、僕は何日も此等の事實を事實として認め、其認識の上へ凡ての制度を築きたいと思つて居る。然るに貴女は彼等の貞操や、彼等の節儉や、彼等の優しい親切を宣布して、此三人の惡魔の心を和げ、そして此等の阿諛、追従の上へ凡ての制度を築かうとして居る。制度の圓滿に動かないのは素より其處なんだ

石像 女は何日も其に何と答へたね

ドン ホオアン、まあお待ちなさい。打明話は一方向では詰らない。初に貴方が何日も女に云つた事を話して御覽なさい

石像 私！なに、私は「死ぬ迄變らずに居ませう」とか「若し聞いて下さらなければ、死んで終ひます」とか「貴女程に思ふ人は決して二人とはありません」とか……

アナ 貴女つて、其は誰です

二八八

石像 なにお前誰だらうが、其時打突かつたものさね。私には日常も使ふ極り文句があつたつけ。一つは「私は八十になつても、自分の愛して居る女の一本の白髪は、若い美しい娘の、濃い、黄金色の束にもまさつて、私の心を動かさませう」と云ふのだつたし、も一つは「私は貴女以外の人が、私の子供の母になると云ふことは、考へた丈でも戦慄とする」と云ふのだつた

ドン ホオアン (嫌な氣がして) 古狸だなあ

石像 (頑強に) そんな事があるものか。私は其時は實際心にさう信じて居たんだ。私には君と違つて温かい情があつたんだ。私が何日も成功したのも、全く其真情のお蔭だ

ドン ホオアン、眞心だつて。解り切つた、愚な、踏付けた虚言を眞實と思ふ程の魯鈍さ加減、其を眞心とはよくも云へたものだ。女を欺すのに氣を奪られて、自分

で自分を欺くのも氣付かない程女に溺れて居て、其を眞心などは呆れて物が云へない

石像 エ、詭辯は止して貰はう。私は戀して居たんで、理窟云ひの辯護士ぢやない其に女も忝い事には、其て却つて私を愛して呉れたんだ

ドン ホオアン、なに、向が唯さう思はした丈なんだ。かう云つたら驚くでせうが、僕がそんなに色氣なしに、辯護士見たいな事を云つて居ても、矢張り向では僕を愛して居る様に思はして居たから致方がない。其は僕だつて時にや現を抜かした事もあるさ。そんな時には下らない事を無茶苦茶に云つて、自分でも其を信じて居た。時には旨い事を云つて、彼方を喜ばして遣り度いと云ふ氣が、感情の波に乗じて激しく心に起つて来て、口から出任せに云つてきかした事もある。又ある時は怖ろしい冷やかな口調で、自分の棚下しを始めて相手を泣かした事もある。併し僕は其何れの場合でも、女から遁げる事は同じく困難だと云ふ事を知つた。

二八九

一旦女に見込まれた時には、一生の苦役か乃至は遁出すより他に途はない

アナ 貴方は妾やお父さんの前で、よくも女が皆貴方に惚れたなぞと威張れたものですね

ドン ホオアン、此で威張つて居る様に聞えるかね。僕には自分が尤も惨な者としか見えないうたが。其に僕は「一旦女に見込まれた時には」と云つて居る、其は無論何日もさう許りとは極つて居ない。そして若し其がさうでない時にはそれこそは大變、女を誑らした卑怯者は、世にも怖ろしい道徳上の義憤を聞かなければならない。世にも怖ろしい侮辱と、挑戦を受け、世にも怖ろしいイモオゼン、イアキモの立廻りを演じなければならぬ

アナ 妾は立廻りなんかしやしません。只お父さんと呼んだ丈です

ドン ホオアン、而して其お父さんが剣を提げて遣つて来たぢやないか。破壊された世道と名譽の復讐に、僕を殺す了見で遣つて来たぢやないか！

石像 殺す了見、冗談云つちや困る。私が君を殺したか、其とも君が私を殺したか、よく考へて見て貰ひ度い

ドン ホオアン、ぢや、何方が剣術が達者でした

石像 其は私さ

ドン ホオアン、無論さうです。其に貴方は今話していらした様に、自分で種々破壊的な業をして置きながら、厚顔にも、破壊された世道の復讐者を氣取つて、僕を殺さうとしたんだ。若しあの事變がなかつたら、僕は殺されて終ふ處だつたんだ

石像 其は君、私はさうしなげやならんものとなつてゐたんだから致方がない。地上では萬事さう云ふ風に出来てゐる。私は社會改革者ぢやない。だから何日でも習慣上、紳士のすべきものとなつてゐる事をして来たんだ

ドン ホオアン、其はあの時僕を攻撃した理由になるかも知れんが、其後石像となつ



てから遣つた、あの怖ろしい偽善の理由とはなるまい

石像 あれは皆私为天へ行つたからして起つた事さ

悪魔 ドン、ホオアン君、私はまだ君や將軍が地上でなすつた今の様な話を聞いても、私の人生觀に合ひこそすれ、其を惡様に云ふ理由になるとは如何しても思へない。重ねて云ふが、此處には君の求める物は残らずあつて、而も其に附隨する厭はしい事は一つもないんだよ

ドン ホオアン、夫處か此處にある物は皆僕を失望させる物許りで、此迄試して而も不十分に思はなかつた物は一もありやしない。元來僕は自分より好い物を考へ得られる間は、其を生み出すか乃至は其がために途を開拓く様に勤めてゐなければ心の満足は得られない。其が僕の一生の法則「生」の絶えない渴望の、僕の心の中に働いてゐる姿なんだ。絶えず一層高い組織、一層廣い、深い、強い自己意識、一層明瞭な自己理解に到達しやうと足掻いてゐる「生」の、僕の心の中に働いて

ゐる姿で、此目的の至上權こそ、僕のためには愛を單に瞬間の歡樂と化し、藝術を單に官能の訓練と化し、宗教を單なる怠惰の口實と化して終つたんだ。何故と云ふに宗教は、僕自身が我眼を通じて世界を見、尙其改良せらるべき餘地あるを知つた我本能に對して、同じく世界を見、而も其をよしと知つた神なるものを立てゝゐるではないか。此が怠惰の口實でなくて何だ。僕は此迄自身の快樂、僕自身の健康、僕自身の運命の追求に於て、いまだ一度も幸福を感じた事がない。僕を女の手に委ねたのは女に對する愛ではなくして、疲勞のため、精盡のためなのだ。僕は幼少の時石の角で頭を傷つけると、よく最寄の女に駈寄つて、前垂に頭を押付けて痛みの除れる迄泣いた事を記憶してゐる。大人になつてからも、己の戰つて行かねばならぬ殘忍とか、暗愚な世相で魂を痛めた時にも、又小供の時と同じ様にした。僕は又自身の休息、勢力の回復、息の吐ける時間、奮闘後の沮喪其物をも楽しんだ。併し僕は歐洲中のあらゆる歡樂を味ははされるよりは、彼

愚な伊太利人の描いた、地獄のあらゆる場所を引廻される方がまだい。僕が此永久の歡樂の場所を、かほど迄堪難く思ふのも、實は此理由なのだ。君を悪魔と云ふ妙な怪物にしたのも、全く君の心に此本能が缺けてゐるからで、「誘惑者」と云ふ名を貰たのも、そこに多少程度の相違はあるにしても、必ず僕の目的と同一であるべき筈の彼等の眞の目的から、巧に君の目的の方に人々の注意を向けさせるからだ。彼等を現に今日の様に、不幸な、偽り多い、落着のない、不自然な、氣短の詰らない人間にして終つたのは、全く彼等が自己の意思に従はずして君の意思に従つたからだ。否、君の意思に従つたと云ふよりは、意思なき君に従つて漂つたからだ。

悪魔（氣を悪くして）ドン、ホオアン君、そんなに僕の黨與を悪く云ふもんぢやないよ  
 ドン　ホオアン、　チエツ、何で又僕が君や君の黨與をよく云ふものか。此虚偽の都では、一言や二言の眞實は、あまり君の障にはなるまい。君の黨與はどれも此も下らな

い、奴原許りだ。彼等は美しいのではない、彼等は只飾つてゐるんだ。彼等は清潔なんぢやない、彼等は只髭を剃り、糊の付いた衣物を着てゐる丈なんだ。彼等には威權があるのではない、彼等は只立派な衣物を着てゐるんだ。彼等は教育があるのではない、彼等は只大學を卒業してゐるんだ。彼等は信心があるのではない、彼等は只教會に席を有してゐるんだ。彼等は道徳的なんぢではない、彼等は只因襲的なんだ。彼等は徳操があるのではない、彼等は只卑怯なんだ。彼等は邪惡と云ふ處へすら行かない。彼等は只惡に誘はれ易いんだ。彼等は藝術的なんぢではない。彼等は只放逸、好色なんだ。彼等は盛運なんぢではない、彼等は只金持なんだ。彼等は忠實なんぢではない、彼等は只奴隸根性が張つてゐるんだ。従順なんぢやない、意氣地がないんだ。公共的なんぢやない、愛國的なんだ。勇氣があるんぢやない、喧嘩好なんだ。毅然としてゐるんぢやない、頑固なんだ。立派なんぢやない、尊大なんだ。自制があるんぢやない、頓馬なんだ。自尊心があるんぢやない、見榮

坊なんだ。親切なんぢやない、氣が弱いんだ。社交的なんぢやない、雜踏事が好きなんだ。氣がつくんぢやない、丁寧なんだ。聰明なんぢやない、獨斷的なんだ。進歩的なんぢやない、徒黨根性が張つてゐるんだ。想像的なんぢやない、迷信的なんだ。公正を尊ぶんぢやない、復讐的なんだ。許容的なんぢやない、和解的なんだ。規律があるんぢやない、壓倒されてゐるんだ。而して少しも眞實な處はなく、一人残らず皆虚言吐だ——心の底の底迄も、皆虚言吐だ

石像 君の言葉の自由なのにや呆れて終ふね。私も部下にそんな風に話せたら、どんなに好かつたかと思ふ

惡魔 併しあれは皆空文句ですよ。あんな事は是迄にも度々云はれてゐますが、其がためによくなつた例はないぢやありませんか。世間は何日だつて、あんな事なんか氣に止めやしません

ドン ホオアン、さう、其は成程空文句だ。併し何故空文句なんだらう。其は美とか、

純潔とか、體面とか、宗教、道德、藝術、愛國、其他あらゆるものが、誰でも勝手氣儘に如何でも向けられる實のない「言葉」だからだ。若し此が現實の物であつたら、君は僕の非議に對して辯疏を試みずには濟まず譯には行かないだらう。併し幸にも現實の物ではなく、従つて君にその必要がないから、安心していゝ。成程、君の云ふ通り此は皆空文句だ。未開人を欺して文明を採用させたり、開明の貧民を欺して、従順しく物を奪はれさせたり、奴隸の様な目に逢はせるに必要な成程空文句に違ひない。此は上に立つ階級の内輪の秘密で、若し吾々其階級に屬してゐる者が、銘々身勝手な詰らない権力や贅澤を目がけないで、世界のために一層大きな「生」を狙つたなら、其秘密は吾々を偉大にするに違ひない。處で、僕は貴族として其秘密は知つてゐる。従つて君等のかう云ふ道德上の虚構事に就ての空疎な長談義は、僕に取つて堪へられない程聞き辛く、又君等がこんな下らぬ事に生命をも捧げやうとしてゐるのが、如何にも厭ふべき不祥事と思はれてな

らないのだ。尤も君等が此道徳と云ふ勝負の棋子をせめて男らしく戦はず丈けにでも深く信じてゐるなら、まだ見てゐて面白いかも知れぬが、君にはそれすらない。君等は凡ての手を盡して相手を欺き、若し逆に彼方が欺き勝つ様な事があれば、すぐ其盤を打伏せて相手を殺さうとするんだ

悪魔 地上では其言葉に多少の眞理があるかも知れん。人は皆無教育で私の愛や美の教へを充分味ふ力がないから。併し此處では……

ドン ホオアン、 否、否、もう解つた。此處には愛と美の他何もないと云ふんだらう。ケツ、此はまるで下町式の芝居の、まだ事件の發展しない一幕目を、何時までも見てゐる様なものだ。僕は地上で尤も酷く迷信的恐怖に襲はれた折でも、夢にも地獄はこんな怖ろしい處とは思はなかつた。吾々はまるで髮結の様に絶えず柔かい絹髪を弄んだり、美人を熟視たり、或は菓子屋の小僧の様に絶えず甘い大氣を吸つて生きてゐなければならぬ。將軍天にも矢張り美しい女がゐますか

石像 否、ゐないね。全くゐないね。皆不味い粧装をしてゐる奴許りで、十人寄せても寶石一つ持つてゐやしない。まるで五十男でも見る様な奴許りだ

ドン ホオアン、 僕は早く其處へ行き度い。「美」なんて言葉の口にされる事はないでせうね。其から藝術的な男などもゐないでせうね

石像 どうして君、立派な石像が傍を通り過ぎてても見向もしやしない

ドン ホオアン ちや行かう

悪魔 ドン、ホオアン君、思つた通り云つて終はうか

ドン ホオアン、 先刻云つた事は思つた通りちやなかつたんか

悪魔 云つた事丈は思つた通りさ。併し今度はおつと先迄告白しやうが、人と云ふ者は何にでも飽きて終ふもので、其點になれば天國も地獄も變りはない。元來歴史と云ふ奴は、世界が天國と地獄との二つの極限を震動する、其震動の記録に過ぎないんで、歴史上の一時期は即ち其振子の一振だ。而して凡ての世代の人が其が

絶えず動いてゐるが故に、世界は進歩してゐると思つてゐる。併し君が私程の年齢になり、將軍や私の様に幾度も幾度も天國に飽き、今君が飽きてゐる様に、幾度も幾度も地獄に飽きて終つたら、もう天から地獄への一振が釋放で、地獄から天への一振が進化だなど、考へなくなるだらう。君が今改革とか、進歩とか、向上的傾向の實現、即ち人間が祖先の死屍を踏臺にして、絶えず高い處に進んでゐると思つてゐるのが、單に限なき幻想の喜劇に外ならん事を知る様になり、太陽の下には何等新しい物がないと云ふコヘレスの言葉の深い眞理を知る様になるだらう。空の空と云ふ言葉は……

ドン ホオアン (黙つて聞いてゐられなくなつて) 冗談ぢやない。此は愛や美の談義より尙堪らない。一體君は人は何にでも飽きて終ふから、其で蠕蟲と異はないと云ふのか。犬が狼より悪いと云ふのか。食へば食欲がなくなるから、其で食ふのを中止して終へと云ふのか。畑は休ませてゐる期間は、其は何の役にも立つてゐないと云

ふのか。將軍が此處で氣力を養つて置いたら、其が次に天國へ行つた時、少しも役に立たないと云ふのか。假にあの偉大な「生の力」が、時計師の振子の考案の様なものを發明して、地球を錘に使ひ、而して中に働いてゐる吾々には、か程目新しく見える各震動の歴史が、單に前の振動の反覆の歴史に過ぎないとしても、否それ許りぢやない、無限に永い時間には、太陽が曲馬師か何かの様に、地球を手玉に取つて弄び、吾々の謂ふ各時代の總計は要するに此投げては受ける一瞬間に過ぎないとしても、此巨大な機械が無目的と云へるだらうか

悪魔 無目的さね君、君は自分に目的があるから、自然にもあるに違ないと思つてゐるらしいが、其なら同じ様に君に指があるから、自然にもあると思つていゝ事になるぢやないか

ドン ホオアン、併し其指が何の役にも立たなかつたら、僕は持つてやしない。其に此指は僕の一部分である如く又自然の一部分なんて、指が劍や琵琶を握む器官で

あるとすれば、脳は自然が己を理解するための機械と見ても差支ない譯だ。犬の脳は只犬の目的にしか役立たないかも知れんが、僕の脳はある偉大な「智識」のために働いてゐるんだ。其智識は僕自身には何の役にも立たず、却つて僕の肉體を自分に苦きものとし、老衰や死を不幸と考へしめるものなんだ。若し假に僕が自分以上に何の目的も持つてゐないものとするれば、僕は哲學者などにならずに百姓になる。何故と云ふに百姓も哲學者も命の長さには變りがない。其癖百姓の方が物も餘計に食ひ、よく眠つて、殆んど何の不安も感ぜずに、自分の愛する妻を樂めるからだ。此は哲學者が「生」の力に捉へられてゐるが故で、其「生の力」が哲學者に「自分は是迄は、只生きやうと思ひ、單に尤も抵抗の少い途を行つて、知らず／＼無数の不可思議な事を仕出來して來た。併し、今度自分は自分を知り、自分の行先を知り、自分の取るべき途を選び度いと思ふ。其て私は百姓が私に代つて鋤を握む様に、私に代つて此智識を握む特殊な頭腦、即ち哲學者の頭腦を作

つたのだ。お前は死ぬ迄私のために勉めて此仕事を遣つて呉れなければならぬ。で、お前の死んだ時には、私は又次の頭腦と次の哲學者を作つて、此仕事を續けさせる積りだ」とかう云ふに違ない

悪魔 だが一體何のために知るんだらう

ドン ホオアン、なに、一番抵抗の少い途を行かずに、一番利益なる方向を撰ぶためさ。無意味に漂つてゐる丸太と、行手を定めてゐる船と、何方が港へ早く着く。哲學者は「自然」の水先案内だ。異ふのは其處だ。地獄にゐるのは漂ふので、天へ行くのは舵取り進む事だ

悪魔 多分岩の上へでもね

ドン ホオアン、馬鹿な、漂つてゐる船と、水先案内の乗込んでゐる船と、何方が餘計に岩へ乗上げたり沈んだりする

悪魔 ちや、まあそんなに怒らずに何方でもいゝ様にしたまへ。私は誤謬計りの「自

然力」なんかの手先にならずに、自分の思ふ様にしてゐたい。私は矢張り美しい物を見て心地よく、音楽は聞いて面白く、愛は感じてうれしく、此三つは考へたり、話し合つたりするに面白い題目だと思つてゐる。のみならず、かう云ふ感覺や、情緒を働かせ、學問を積むのは、上品な、教養ある人間となる途だと信じてゐる。地上の教會では私の事を何と云つてゐるか知らんが、上流社會では「暗の王」は紳士だと一般に認められてゐるに違ない。私は其で澤山だ。君は「生の力」を不可抗と思つてゐるらしいが、私の様な性格の者には、此程弱い物はない。尤も君が——改革家と云ふ奴は皆さうだが——性來下品で、欺され易く出來てゐるのなら、其「生の力」は最初君を宗教に投込んで地獄に落ちないお呪に、子供の頭に水をぶつかけ出すかも知れない。其から宗教に飽きると科學に行つて、此度は折角水を灌がれてゐる子供を奪取つて、不圖病氣に罹らないお呪に、身體に病氣を種え出すだらう。其の次は政治で、腐敗した役人の手先や、野心家の虚

言吐其の腰巾着に使はれて、先に待つてゐるものは絶望と老衰。希望は破れ氣力は衰へて、あらゆる徒費、犠牲の一番悪い、一番愚かなる物とも云ふべき「享樂の力の徒費と、犠牲に對する無益な悔恨」に捉へられて終ふんだ。つまり、まだ善いものも確と手に入れない内に、更に善い物を手に入れやうとする愚物の刑罰が即ち其だ

ドン ホオアン、併し少くとも退窟する事はないだらう。何れにしても「生の力」に仕へてゐれば其丈の利益がある。だが僕は此で失敬しやう。さよなら

悪魔 (愛嬌よく) さよなら。随分面白い話をしたね。又時々思出しますよ。どうぞ御機嫌よう。先刻も云つた様の中には天國の相應ふ人もある。併し若し又氣の變る様な事でもあつたら、歸つて來る道樂者には、何日でも此處は門戸が開いてありますから、何日に依らず君が温かい情や、眞面目な強ひない愛情や、無邪氣な樂みや、温かい、生きた、脈打つ實感を……

ドン ホオアン、寧ろ一口に肉や血と云つて終つた方がいゝぢやないか。無論あの脂切つた平凡な二つの言葉は、先刻で済んでゐる譯だけど

悪寛 (憤然として) ドン、ホオアン君、其ぢや君は私の折角と思つて云つた訣別の言葉を私に投返すんだね

ドン ホオアン、そんな事はないさ。併し君が皮肉な時にや種々利益になる事も云ふが、感情的な時にや實際辛抱は出来ないからね。將軍、貴方は天國へ行く道を知つてゐるでせう。濟みませんが一寸案内して呉れませんか

石像 なに、道は只物の二つの見様の違にあるんで、實際行き度いと思へば何の道からでも行けるよ

ドン ホオアン、さうですか (アナに挨拶して) アナさん、ぢや左様なら

アナ だつて妾も一緒に行くんですよ

ドン ホオアン、僕は自分の途は見付けられるが、貴女の途は見付けられませんよ (滑

える)

アナ まあどうしやう

石像 (後から呼かけて) ホオアン君、お機嫌よう (訣別の挨拶として段々とした大和絃の最後の

吹を後に送る。始の影の様な旋律の微かな響が返禮に戻つて来る) あゝ、彼處へ行くらしい (唇の

間から長い息を吹出して) イヤ、實によく饒舌べるね。天國の者共は兎てもあれぢや辛

捧はしまい

悪寛 (鬱ぎ込んで) ホオアン君に行かれたのは政治上の敗北です。私は如何しても「生

の崇拜者」を引留めて置く事が出来ない。奴等は皆行つて終ひます。今度のはあの

和蘭陀の繪描以來、私の受けた一番大きな損失です——其男と云ふのは七十の

婆さんを、二十歳の愛の神か何かの様に、喜んで描く男でした

石像 いや、覺えてゐる。天へ来たよ。レムブラントだらう

悪寛 えゝ、レムブランです。どうも此連中は皆何處か變つてゐます。奴等の云ふ事



を聞いてちや大變ですよ。危険ですからねえ。超人に追跡されない様に用心しなげりやいけません。見界なしに人間を輕蔑させる様にして終ひますから。一體人間から云へば、犬猫や馬は道德の世界に入らない種族ですが、超人から云へば其又人間が、道德の世界に入らない種族なんだ相です。此ドン、ホオアンと云ふ男も、女には親切にし、男には丁寧にしてゐましたが、其は恰度此處にゐられる貴方のお嬢さんが、仔飼の犬猫に親切になさると同じ譯なんて、全く靈魂の人間の性質は認めないんです

石像　で、其「超人」と云ふのは一體誰の事だね

悪魔　なに「生の力」狂其の最近の流行の言葉ですよ。貴方は近頃天へ來た者で、波蘭種の狂氣の獨逸人——何と云ひましたつけね。さうく、ニイチエ——あの男にお逢ひになりませんでしたか

石像　否、聞いた事がないね

悪魔　なに、初め此處へ來たんですよ、まだ狂氣の癒らない内に。私は多少の希望を持つてゐたんですが、其が又凝固りの「生の力」崇拜者で、プロミシアスの昔からある「超人」と云ふ奴を、今更らしく擡立てたんです。其て必と二十世紀も、肉や、此私に飽きたら、必と此焼き直しの「超人」熱を擔ぎ廻るんでせうよ

石像　「超人」とは好い名だ。其に名が善ければ其て戦ひは半勝た様なものだ。私も一度其ニイチエと云ふ男に逢つて見度い

悪魔　生憎此處でワグナアに逢つて、二人で喧嘩しました

石像　其はさうだらう。私はモツアトの方がいゝ

悪魔　なに、音楽に就てぢやないんです、ワグナアも一度「生の力」崇拜組に紛れ込んで、ジイグフリッドと云ふ超人を作つたんですが、後に氣が付いて止して終つたんです。其て二人が此處で出逢ふと、ニイチエはワグナアを背教者と詰り、ワグナアは小本を書いてニイチエを猶太人だと云つたものだから、ニイチエは怒つて天へ行つて

終つたんです。併しまあ行つて呉れて幸でした。其はさうと、此から急いで邸へ行つて、貴方の到着を立派な音楽會の催でもして祝はうじやありませんか

石像 其は面白からう。君は實に親切な男だ

悪魔 此方へ來つしやい。昔の糶出臺で降りるんです（糶出臺に乗る）

石像（思ひ返す様に）でも矢張り「超人」と云ふのはいゝ思付だ。何だかかう泰然した

處がある（悪魔と並んで糶出臺に乗る。臺は徐々降り始める。赤い光が地の底から立昇る）あゝ、何

だか昔を思ひ出すよ

悪魔 えゝ、私もです

アナ 一寸待つて下さい（筆止る）

悪魔 奥さん、貴女は此方へは來られませんよ。淨聖式をしなけりやなりませんから。

併し邸へは私共より先に着けます

アナ そんな事で止めたんぢやありません。教へて下さいな、何處へ行つたら「超人」

がゐるでせう

悪魔 奥さん、「超人」はまだ創造てはゐませんよ

石像 其に多分何日迄待つても創造ないかも知れん。さあ、行かう。赤い火で嘘が出

て來さうだ（二人は降りて行く）

アナ まだ創造てゐないんだつて。其てはまた妾の仕事が残つてゐる（熱誠を籠めて胸に

十字を切る）妾は次の世を信じます。（虚空を仰いで叫ぶ）父を、父を、超人の父を！

女は虚空に消えて元の無に歸る。あらゆる物は永久に失はれた様に見える。やがて幽かに何處かに叫んでゐる、生きた人間の聲が聞えて來る。見てゐる中に微かに山の峰が明るい背景の裡に浮んで、看客は皆愕然とする。やがて空は遠い彼方から歸つて來、突然看客は元ゐた處を思出す。叫聲は明瞭に忙し相になり「自動車、自動車」と云つてゐるのが聴取れる。あらゆる現實の感じが一時に返つて、忽ちして一面開放れたシイエラの景色となる。而して羊飼の服を着けた男が自動車の近いて來るのを知らせながら丘から駆け下ると、山賊共は一齊に立上つて街道の方へ駆け行く。タナアとメンドザは驚いた様に立上つて、茫然顔を見合せてゐる。ストレイカアは立上る前一寸起直つて欠伸をする。山賊共の騷擾に深い興味を示さないのを特に誇とする心らしい。メンドザはチラと四邊を見渡して、

部下が警報に應じて働いてゐるかどうかを驗め、其からタナアと内證話を交す

メンドザ 貴方は夢を見ませんでしたか

タナア いや、酷く見た、君は？

メンドザ 見ましたよ。何だか判然覺えてゐないが、貴方も其中にゐましたよ

タナア 君も僕の夢にゐたよ、驚いたね

メンドザ 私はさう云つたでせう(街道から銃聲が聞える) 間拔共が、銃を玩具にしてゐやが

る(手下共が膽を潰して駈け戻つて来る) あれを發射したのは誰だ(デニヴァルに) お前か

デニヴァル (息を切らして) 私は發射やしません、向うで始めに發射たんです

無政府主義者 だから私は始めに國を破壊してかゝらなければ不可ないと云つたんだ。

見なさい、もう皆此で遣られて了つた

騒々として社會民主主義者 (夢中に凹地を逃げ廻りながら) さあ、皆逃げなよ

メンドザ (襟首を捕へて仰向に押倒して小刀を引抜いて) 動く奴は突殺すぞつ(途を塞ぐ。逃げ廻るの

が止まる) 一體どうしたと云ふんだ

佛頂面の社會民主主義者 自動車が……

無政府主義者 男三人と……

デニヴァル 女二人……

メンドザ 男三人と女二人か。何故此處へ連れて來なかつたんだ。お前達は怖いのか

騒々しい男 (立上つて) 護衛の野郎が附いてゐるさあ。主領ふん捉めえませうや

佛頂面の男 坂の上り口に兵隊の一杯詰つた、怖え車が二臺ゐます

無政府主義者 彈丸は上へ向けて發射つたんで、あれは奴等の合圖です

ストレイカアは例の歌を口笛で吹く。山賊共の耳には其が葬式の進行曲の様に聞える

タナア 其は護衛ぢやない。君等を捕へに來た軍隊だ。僕等も其を待合す様に云はれ

たんだが、急いでゐたから來たんだ

騒々しい男 (懐嚙へて) それに詰まんねえ、此處にかうして待つてゐるなんて。さあ、

早く山へ遁込ませう

メンドザ 馬鹿野郎、手前は山の様子を知つてゐるかい。手前は此國の者かい。羊飼に出逢して見ろ、其場で敵に渡されて終ふ。其に俺達はもう奴等の着弾距離に入つてゐるんだ

騒々しい男 其でも……

メンドザ 黙つてろ、俺に任せて置けと云ふに。(メナアに) 君、私等を裏切しやしないてせうね

ストレイカー なに、「君」だと、生意氣な

メンドザ 昨夜は私の方に強味があつて、貧乏人苛めの貴方が、金持苛めの私の掌中にあつた。貴方が握手を申込んで、私は其を請たてせう

メナア 僕は君に責める様な事は一つも持つてゐないよ。僕等は君と一晚愉快に送つたと云ふ、只其丈の事なんだから

ストレイカー 俺は誰とも握手はしねえよ、いゝか

メンドザ (殺と相手の方に向返つて) おい、若い、若い、若し俺が取調を受けたら、罪にならない様に辯疏をして、英國や、家や、義務を棄てなげやならない様になつた譯をよつく話して遣るつもりだ。君は立派なストレイカーの家名を、西班牙の刑事裁判所の泥の中を曳ずり廻させたいのかい。巡查が俺の身體を調べる、さうするとルイザの寫眞が出て来て、其がやがて繪入新聞に載る。どうだ、困りやしないか。さうなれば皆君の所業だぞ、忘れるなよ

ストレイカー (腹で憤々怒つて) 俺は裁判所なんか怖かねえが、手前等の様な奴と俺の名を一所にされるのが嫌なんだ。此溝猫の大盗人の畜生め

メンドザ ルイザの兄貴には似合はしくない言葉だ。併しまあい、君には口輪が箝つたんだから、此方は其で澤山だ。(振向いて部下に向ふ。部下は此時新しい一群が。自動車乗の裝をして街道から騒々しく遣つて来るのを見、急いで彼の後に隠れやうと窪地を横切り、不安相に洞穴の方

へ退つて行く。先頭に立つたアンは眞直にタナアの方へ進んで来る。次にヴァイオレットは地面の凸凹な處を。右手をヘクタアに左手をラムズドゥンに援けられて歩いて来る。メンドザは主領の席と極まつた例の切石の處に戻つて、穩かに腰を下す。凡ての同勢は後に控え、四人の幕僚——無政府主義者とデュヴァルは右、二人の社會民主主義者は左側に——は彼の兩翼を擁してゐる。

アン ジャックさんよ！

タナア 捕まつちやつた

ヘクタア おや、ほんとにさうだ。僕は先刻から君だと云つてゐたんですよ、タナアさん。僕等は今恰度輪を破られて止まつた處で。途は針が一面です

ヴァイオレット 貴方は此處でこんな人達と何をしていらつしやるの

アン 貴方は何故一言も斷らずに先へお出發なすつたの

ヘクタア ホワイトフィールド嬢、あの薇薔の花束を頂き度いもんですね（タナアに）君の出發れた事が分つた時、ホワイトフィールド嬢がモンテ、カロールへ着く迄に君の車に追

付けるかつて、薔薇の花束を賭られたんですよ

タナア 併し此はモンテ、カロールへ行く道ぢやないでせう

ヘクタア なに、ホワイトフィールド嬢が停車場毎に君の跡を嗅付けていらしつたんです。

まるでシニアロック、ホルムスと云ふ格でしたね

タナア 「生の力」だ。もう此で駄目だ

オクタヴィアス（街道から元氣よく窪地へ駆込んで来て、タナアとストレイカアの間に来る）君が無事である、呉れて、こんな嬉しい事はない。僕等は皆君が山賊に捕つたんぢやないかと思つてゐた

ラムズドゥン（先刻からメンドザを熟々見てゐたが）私はどうやら其處にゐる君のお友達に見覚えがある様だ（メンドザは恭々しく立上つて莞爾しながらアンとラムズドゥンの間に進む）

ヘクタア おや。僕も見覚えがある様です

オクタヴィアス 僕も貴方をよく知つてゐますが、何處でお目にかつたか思ひ付けま

せん

三一八

メンドザ (ヴァイオレットに) お嬢さん、貴女もお覺がおりますか

ヴァイオレット え、よく存じてゐますが、お名前はすぐ忘れて終ひますので

メンドザ サヴォイ、ホテルでやすよ (ヘクタアに) 貴方は此方と (ヴァイオレット) よく晝

飯を食りにいらつしやいました。(オクテグアイアスに) 貴方はライシイアム座へいらつ

しやる折によく此方や (アン) 此方のお母さんと一緒に、夕飯においてになりました

た。(ラムズドゥンに) 貴方はよく (聲を落して内密で、併し充分聞取れる叫聲で) 始終異つた御

婦人方と、晩飯においてになりました

ラムズドゥン (憤つて) で、其が君にどんな關係があるんです

オクテグアイアス おや、ヴァイオレット、僕は此旅行迄、貴女とマロオン君がそんなに親しい

とは思つてゐなかつた

ヴァイオレット (困つて) 此人が支配人だつたのか知ら

メンドザ なに、給仕ですよ、お嬢さん。私は皆様に難有い記憶を持つてゐます。大變よくして下さつた工合から、彼處へいらした時は、必つとお楽しみなんだらうと思つてゐました

ヴァイオレット ずい分出過た人だわねえ (メンドザに背を向けて、ヘクタアと一緒に丘を登つて行く)

ラムズドゥン あ、其で澤山だ、こんな男にや——君は此婦人達のお給仕をした事があるからと云つて、知人扱にして貰ふ積ちやゐなからうね

メンドザ いや失禮しました、初めにお名乗りなすつたのは貴方で、婦人方も其に尾いて仰つたんでせう。併しかうして貴方方の社會の無禮な態度を見せ付けられて

は、知合云々は此方からお断りします。將來はどうぞ見知らぬ道連として、其に相應はしい様に物事を仰つて下さい (ツンと彼方へ行つて主領の席に着く)

タナ 此通りだ。此度の旅行中に物の解つた話の出来る男と云つたら彼丈だ。其に君等は皆云ひ合した様に彼を侮辱して終つた。此「新しい男」すら他の者と異りが

三一九

ない。エンリイ、君はまるで詰らない紳士の様な舉動をしたな

ストイレカ 紳士ですつて、豈夫

ラムズドゥン これ、タナア君、そんな事を云ふのは……

アン 放つてお置きなさいてば、お祖父さま。もう、タナアさんの氣心もお解りになつていゝ、頃ぢやありませんか（ラムズドゥンの腕を取る。而して嚮の二人と一緒になる様に、媚誘して丘へ連れ登る。オクテグアイアスは犬の様に後を尾いて行く）

グアイオレット（丘から呼ぶ） 其處へ兵隊が来てよ。皆自働車から降りかけてゐます  
デユヴァル（急に怖氣立つて） あゝ、どうしやう

無政府主義者 大馬鹿共が。君等が中等社會の政治的寄生蟲共に欺されて、政府を破壊さずには置いたから、逆に政府が此方を打殺さうと云ふんだ。分らないか

佛頂面の社會民主主義者（終迄議論張つて） さうぢやない、政府の機械を捕へてこそ……  
無政府主義者 彼方がお前を捕へやうとしてゐるよ

騒々しい社會民主主義者（心配が益々嵩じて） えゝ、詰んねえ止せ。其よか何故此處にこんなにしてゐるんだ。何故愚圖くしてゐるんだらう

メンドサ（切齒をして） もつと遣れ、馬鹿共め。遣り度げや政治の議論をせい。成程立派に聞えるわ。さあもつと遣らないか

兵士は街道に押列んで、銃を以て窪地を守る。山賊共は互に人蔭に隠れやうとの強い衝動と戦ひながら、出来る丈平氣を装ふてゐる。メンドサは怕れない面魂をしてすつくと立上る。指揮を掌れる將校は街道から窪地に降り、殺つと山賊共を睨ひ、其から尋れる様にタナアの方へ向く

將校 もし、此は何者ですか

タナア 僕の護衛です

メンドサはメフィストの様な笑を浮めてシツと頭を下げる。押へ切れない嬉しい笑が山賊共の顔から顔へ傳はる。一同帽子に手をかける、只無政府主義者丈は腕組の儘に、政府の侮を示してゐる

幕

#### 第四幕

三二二

グラナダのある別荘の庭。誰に依らず其處の様子を知り度い人は、自身行つて見なければならぬ。只平凡に云へば其處には別荘のほつ／＼見える丘が澤山あつて、其一つの頂にはアルハムアラがあり、丘と丘との間は可成な町になつてゐる。而して其等に通ずる埃まみれの白い道には、小供等が自分で何をしておやうが、何を考へておやうが其様事に頓着なく、人の通る毎に、機械的に哀れつほい聲を出して、物欲しさうに褐色の小さな掌を差出してゐる。併し今云つた事の中でアルハムアラと、乞食と、道の色とを除いては、此處は西班牙に限らずサレイ州にして見ても差支のない物計りて、只異ふ處はサレイの丘は比較的小さく、醜く、サレイの地瘤と云つた方が適當であるかも知れぬが、此等西班牙の丘は山岳の性質を帯びて、其大きさを掩ひ藏してゐる形容の美も丘其物の威權を傷けはしない。

今云つた庭は、アルハムアラの向側の丘の上に當つてゐる。其處の別荘は英米の富裕な客に、道具付一週間何程と極めて貸すに相應はしく、極めて氣

取つて贅澤なものである。庭の下の芝生に立つて、丘を見上げれば、眼界は限ない大空に接した丘の、頂に石を敷き詰めた高臺の石櫓で限られる。立つてゐる處と高臺との間には、中央に圓い水盤と、噴水を設けた花園があり、噴水の周圍には極めて上品な幾何學的花床や、磔の細道や、剪込んだ水松などが植はつてゐる。花園は芝生よりは高い處にあるので、其處へ行くには石崖の眞中にある階段を上らなければならぬ。高臺は又花園よりは高く、二三歩で其處へ登れば、石垣から谷間の町々や、町の彼方へずつと擴つて、遙に遠くだん／＼本物の山になつて行く、周圍の丘の立派な景色が見晴される。別荘は左側に建つて庭の左手の隅から階段で上れる様になつてゐる。高臺から庭を通つて又芝生に戻ると——かうすれば別荘は後の左側に當る——其處には庭球の網もなく、又クロッキイの輪もなく、却つて左手の小さい鐵の庭卓子には、大抵は背の黄色な書物が澤山載つて居り、傍に椅子迄置いてあるのを見ると、其處の借家人は、文學趣味のある人達である事が分る。右手の椅子にも二三冊開いた書物が載つてゐる。但し新聞紙は一枚もない。此事實と遊戯道具のない事とは、伶俐な看客に別荘に住んでゐる人達に就いて、隨分突飛な結論を出さず種となるかも知れぬ。併しさう云ふ當推量は、此愉快な

三二三



晴上つた午後には、左側の垣根の小門から職業服を着たヘンリー、ストレイカーが現はれて来るので、ゆくりなく妨げられて終ふ。彼はある老紳士に門を開けて遣りながら、後に尾いて芝生の上に遣つて来る。

此老紳士は熱い西班牙の日中であるにも係らず、黒のフロック、コウトに高い絹帽子を着け、黒味がいつた灰に薄紫の細い筋の混つた、大變沈着いた柄の洋袴を穿き、眞白な襯衣の上には弓形に結んだ黒の襟飾を着けてゐる。だから多分此人は、絶えず細心に自分の身分を人前に確める必要から、氣候などに構つてゐられず、例へばサハラ砂漠の眞中でも、モンブランの絶頂でも、同じくこんな服装をする人なのだらう。併し彼には第一流の服、帽子類の廣告と、其商買の維持を自分の天職としてゐる、所謂上流社會の目立つた特徴がないので、労働服ならば何を着ても充分嚴めしく見えるかも知れんが、今の様な洒落れた服装では却つて野卑に見える。老紳士は頰の膨れた、目の小さい、兩隅の垂下つた怖さうな口、切株の様な頭髮、頑固らしい頰をした赧顔の男だ。年齢の故での皮膚の弛みは、喉や頰の下側を侵してゐるが、口からはまだ林檎の様に張切れてゐる。だから顔の上半は下半よりはずつと若い。彼の様子には金を貯めた人に有勝な自信と、而も其を卑しい奮闘で儲け

た人に見る様な、多少の野性が混り、優しい人交際の下には、若し必要なら、まだ他に取除の方法もあると云つた様な、明かな威嚇をも藏してゐる。其と同時に彼は怖がられない時には寧ろ憐れまるべき側の人だ。何故と云ふに彼のフロック、コウトを着る迄になつた、巨大な商業上の機關のために、殆んど自分の嗜好に従ふ暇もなく、愛情は始終餓え阻げられて來たらしく、時々様子に何處か慥ましい處が見えるからだ。彼から洩れる初の一言で、彼は愛蘭人で、生得の言葉の調子は、居住の場所や自分の幾度かの變動にも係らず、今に尙彼に纏着いてゐる事が分る。聞いた處では僅に言葉の元の要素は、多分荒いケリーの訛だらうと云ふ事しか分らない。併し倫敦、グラスゴウ、ダブリン其他一般に大都會で起る言葉の破壊的影響は、既に久しく其上に働いてゐたので、元の荒々しい調子丈は今に認め得られるが、其の音楽的な要素は殆んど凡て失はれてゐるので、純粹の倫敦っ子以外には、其を愛蘭訛と呼ぶ者は一人もあるまい。ストレイカーは非常に際立つた倫敦っ子なので、相手の老人には自國語さへ適當に話せない、愚な英吉利人として深い輕蔑の念を起させる。其に反してストレイカーの方では、老紳士の調子をば、特に神が親列爾種族の慰みに作つた冗談の様に思つて、何日も彼を一種劣等な、不幸な種族でもあ

る様に、許容な態度で取扱つてゐる。併し時々老紳士が自分の愚な愛蘭訛を正しい物として押通さうとする様な態を見せる時には、駭き怒つて老紳士に向ふのである。

ストレイカー 私が行つてお嬢さんにさう云つて來まされ。貴方は必つと此處に待つてゐやうと、仰るだらうつて、さう云つておいでました（庭を通つて別荘の方へ行きかける）

愛蘭人（大變物妙しきうに先刻から周囲を見廻してゐたが）お嬢さんて、其方がヴァイオレット嬢と云ふのかね

ストレイカー（突然疑を起して階段の上に立止る）だつて貴方は知つてゐなされるんでせう

愛蘭人 知つてゐるかつて？

ストレイカー（勃然として）まあ、知つてゐるんですかい、其とも知らねえんですかい

愛蘭人 そんな事は君の關係したこつちやないだらう（ストレイカーは此時非常に怒つて、階

段から降りて來て、老紳士に向ふ）

ストレイカー 關係した事であるかねえか、其奴を云つて聞かして上げませうや。ロビンスン嬢は……

愛蘭人（言葉を述つて）ほう、ロビンスン嬢と云ふ名かな、いや、其は有難う

ストレイカー なんだ、名も知らねえのかい

愛蘭人 否、今君から聞いたから、知つてゐるよ

ストレイカー（老人の當意即妙なのに、少時呆氣に取られてゐたが）これ、お前さんがあの手紙の受取主でねえんなら、なぜ私の車に乗つて、此處へ連れて來さしなすつたんだ

愛蘭人 私でなげや、誰にあの手紙を持つて行つたのかな

ストレイカー 私はロビンスン嬢さんのお頼みて、エクター、マロオンさんの許へ持つて行つたんだ。分りましたかい。ロビンスン嬢は私の主人ぢやねえが、此方は好意で持つて行つて上げたんだ。マロオンさんと云ふ人は私も知つてゐるが、お前さんぢ

やねえ。違も違ひ、大違だ。旅館ちやお前さんがエクター、マロオンだと云ふから

.....

マロオン エクターぢやない、ヘクタアだよ

ストレイカア (澄し込んで) お前さんの國でヘクタアと云ふんだらう。愛蘭や亞米利加の様な田舎に住んでゐると、ついそんな事になつて終ふんだ。此方邊ぢや何處でも皆エクターだ、まだ其に氣がつかねえなら、もうついつく様になるだらうよ

だん／＼昂じて来る話の緊張がこゝで恰度ヴァイオレットに緩められる。彼女は家から庭を通り抜け階段の處迄来て、今其を降りかけてゐたが、此時恰度折よく二人の間へ来る

ヴァイオレット (ストレイカアに) 妾の手紙を届けてお呉れだつたの

ストレイカア へえ、私はあれを旅館へ持つて行つて、奥へ届けて遣りましたが、マロオンの若旦那が出て來なされるかと思つてゐると此人が來て、いゝから一緒に行かうと云ふんです。其に旅館の者が此がエクター、マロオンさんだと云ふから、私は連

れて來たんですが、今頃になつてさうぢやねえと云ひ出すんです。併し此人が貴女の仰やる方と異つてゐたら、一寸さう云つて下さい。ホテルへ送届ける位は譯はねえですから

マロオン お嬢さん、失禮ですが少時貴女と話させて頂けますまいか。私はヘクタアの父親です。此若衆さんでも、もう一二時間も話してゐたら、其處へ氣が付いたらうと思ひますが

ストレイカア (沈着いて負けぬ氣に) なに、まだ一年や二年話してゐても分りつこねえ。お前さんも彼人にかけて程、丁寧に磨をかけたなら、少しはそれらしくなるかも知らねえが、今の處ぢやまだ大した違だ。一寸云つて見ても、お前さんの言葉にや旦那が多過ぎていけねえ (ヴァイオレットに愛嬌よく) え、お嬢さん、吞込んでゐますよ。此人と話がおありなさんでせう。お邪魔はいたしませんやね (マロオンに愛想よく點頭いて、垣根の小門から出て行く)

ヴァイオレット (極めて愛想よく) 彼者が失禮をいたしたかも知れませんが、誠に申譯がありません。何しろ妾共の運轉手なものですから、思ふ様に行きませぬので

マロオン 貴女の何と云はれたんでしたかな

ヴァイオレット 自働車の運轉手でございますよ。彼男は一時間に七十哩の速力を出し、加之に損傷だ時には、修繕もいたすのです。妾共は自働車が憑據、自働車はあの者が憑據、で結局妾共も彼の男が憑據なんぞございませう

アロオン お嬢さん、英國の人は少し金が餘分に収入れば、すぐ自分の憑據る人間を殖やして行く様です。併しあの男の事なら辯疏にや及びませぬ。私が故意と云はせる様にしたんだから。而してお蔭で貴女は英國のお連の方と、此グラナダに御逗留で、私の倅もお仲間だと云ふ事を知りましたよ

ヴァイオレット (話上手に) はあ、妾共は最初ナイスへ行く積りだつたんですが、連の中に少し變つた者がゐまして、其が先に出發つて此處へ來たものですから、つい其

跡を追つて來なければならぬ様になりまして。まあおかけなさいませぬか(手近の椅子に載つてゐる二冊の本を取除ける)

マロオン (此心遣に感心して) 此は恐縮。(座つて女の鐵卓子の上に本を置きに行くのを、熟々見てゐる。

やがて女が自分の方に向くと) ロビンソン嬢でせうね

ヴァイオレット (坐りながら) はあ

マロオン (衣囊から手紙を取り出し) 貴女が倅にお出しなすつた手紙に、こんな事が書いてあります。(ヴァイオレットは吃驚せずにはゐられない。老人は靜に言葉を切つて、金縁の眼鏡を取出してかける) 貴夫、連の者は皆アルハムブラへ行つて、晝中は歸りませぬ。妾は頭の痛い態をして、只一人で庭にゐますの。ストレイカをお迎に遣りましたから、ジャックさんの車に飛乗つて、すぐ來て頂戴な。早く、早く、早く、愛するヴァイオレットより(凝つと女を見る。併し此時女は我に歸り充分の沈着を以て眼鏡に出逢ふ。男は徐々と言葉を次ぐ) で、私は英國では若い人達が、どんな風に交際するのかわかりませんが、米國ではあ

んな手紙は、雙方に非常に親しい交際があるものと思惟されるんです

ヴァイオレット え、妾はヘクタアさんに大變親しく願つてゐます。若しか其に御異議でもおありなされるんでせうか

マロオン (多少面喰つて) 否、格別異議と云ふ譯ぢやないが、妾はまだ全く私の寄食者で、彼の履まうとする重大な事件には、凡て私の同意がなければならんと云ふ事さへ、お分りになつてゐれば其でいゝんです

ヴァイオレット 妾は貴方がヘクタアさんに、無理な事は仰やりやしないと思つてゐます。マロオン 私も無論そんな事を云ふ積はない。併し貴方の年齢頃では、私に無理と思へない事でも、無理に思へる事が澤山ありますからな

ヴァイオレット (軽い身震をして) え、もうこんなに両方で白ばくれ合つてゐたつて致方がありません。ヘクタアさんは妾と結婚したいと云つていらつしやるんです

マロオン 私もあの手紙の様子で、大概そんな事だらうと思つてゐました。いえ、な

にロビンスン嬢、彼は彼の思ふ様にしたらいゝんです。其代り彼が貴女と結婚したら、私は鏝一文遣りません (眼鏡を外して手紙と一緒に衣籠に入れる)

ヴァイオレット (多少言葉荒く) そう仰やられては、妾はあまり嬉しくは思へませんね、マロオンさん

マロオン 私は何も貴女を悪く云ふんぢやない。貴女はほんとに優しい、好いお嬢さんだと思つてゐるが、妾には他に企畫があるんで

ヴァイオレット ヘクタアさんには他に企畫がないかも知れないぢやありませんか  
マロオン さうかも知れないが、さうなれば私も構つて遣らない丈の事です。貴女には無論其覺悟がおありだらう。若い娘さんが若い男の處へ、来て下さい、早く、早く、早く、なんて書送る段になれや、金などは眼中にないんで、愛が一番大切なんだらうから

ヴァイオレット (鋭く) 待つて下さいよ、マロオンさん。妾はそんな馬鹿な事なんか思つ

てやしませんから。ヘクタアさんは是非お金を持ちなさらなければなりませんよ  
 マロオン (受太刀になつて) 否、解りました。解りました。其は無論稼いで儲けるでせう  
 ヲアイオレット 稼いで儲けなければならぬ位なら、お金を持つてゐたつて致方がないぢやありませんか (自利多相に立上つて) 話らないお話しはもう中止ませう。貴方は是非ヘクタアさんに地位の保つて行ける様にして上げなさらなければいけません。さうして貰ふのはあの方の権利です

マロオン (不氣味に) ロビンズ嬢、其権利を憑據になら、私は結婚なさいとはお勧め出来ませんね ヲアイオレットは危く癩癩を起さうとしたが、強いて自分を抑へ、握り締めた拳を開き、事々しく平静と分別を装ふて席に着く)

ヲアイオレット 一體妾の何處が悪いんでせう。妾の身分はいくら内輪に見積つても、ヘクタアさんにや劣りません、あの方も其は認めていらつしやるんです

マロオン (人の悪さうに) 貴女は必つと始終彼にさう云つて聞かしてゐるんだらうね。ロ

ピンズ嬢、英國での俸の身分は私の心次第、金でどうともなるんですよ。私は彼には、可成に旨い話をして置いて遣つた筈だ。例へば彼が英國で、古い由緒のある家とか、乃至は城とか、元僧院であつた建物とかを見付けて、其家の來歴に相應しい様な妻を入れるのに、其を欲しいと言出したら、すぐ其日に買取つて、支へて行く丈の資産も付けて遣ります

ヲアイオレット 來歴に相應しい妻つてどう云ふ事でせう。相當な家庭で躰けられた女なら誰でもそんな家の始末は出来るぢやありませんか

マロオン 否、其に生付いた女でなくちやいけない

ヲアイオレット ヘクタアさんだつて、其に生付いてゐなさりやしないでせう

マロオン 彼の祖母は靴も穿けない愛蘭の貧乏人で、泥炭を燻べた爐の傍で私を育てたものだ。若し彼がそんな女と結婚すると云つたら、私は其女に遣る金を惜みはしない。私の金で俸を出世させるか、乃至は誰か他の者を出世させ度い。何處か

に誰か社会的に利益を得たものがあれば、私は費つた金を惜しいとは思はないが、是非誰か利益を得る者がなくてはなりません。貴女と結婚したのでは、何も彼も元の儘だ

マロオン (立上つて近寄りながら穿鑿様に女を見る。其見方の中には少なからず拒み得ない尊敬の念も混つてゐる) 貴女は随分直截な構はない性質の方らしいね

グアイオレット 妾は貴女の利益になれないからつて、そんなに貧乏にされる理由はないと思ひます。何故又ヘクタアさんを、そんなに不幸にして見たいんでせう

マロオン なに、彼はすぐ忘れて終ひますさ、男には艶事の不幸は、金の不幸程強く

は利きませんからね。貴女はかう云へば必つと下品に思ふかも知れんが、私は出任せに云つてゐるんぢやない。私の父爺はあの不幸な四十七年に、愛蘭で餓死したものです。貴女も多分聞いてゐられるかも知れんが

グアイオレット あの饑饉にですか

マロオン (燃え上らうとする怒を抑へて) 否、饑饉ぢやない、餓死したんです。國に食物が一杯あつて、輸出迄してゐるのに饑饉のあり様がない筈だ。私の父は餓死に死に、私は詮方なしに母の腕に抱かれて亞米利加へ行つたものだ。私や私の一族を愛蘭から追出したのは英吉利の奴輩だ。なに欲しければ愛蘭を奪つて置くもよからう。私や私等の連中は英國を買取に戻つて来て、而も其一番いゝ處を買つて遣るから。ヘクタアには財産でも女でも中等社會のは眞平だ。かう云つて終へば貴女と同じに直截でいゝだらうね

グアイオレット (復烈に相手の感情的なのを憐んで) まあ、アロオンさん、貴方の様なお年の老つ

た、物の解つた方に、そんな小供見たいな事がよくも仰られたものですねえ。貴方は欲しいと云へば英國の貴族方が、自分の家屋敷を賣ると思つていらつしやるんですか

マロオン 私は英國中で一番舊家の家屋敷を、二つ迄譲り渡の相談を受けてゐますよ。一方の由縁のある家では、家主が日々の室の掃除をする資力がなく、今一方のは相續税が拂へないと云ふ事だ。さあ、かうなつて見ればどうですかね

ヴァイオレット 無論其は随分不名譽な話ですが、其内には政府が必つと、そんな社會主義見たいな財産買収は禁止して終ひますよ

マロオン (嘲笑つて) 貴女は私が其家を買ふ迄に——家といふよりは、元の僧院と云つた方がいゝかも知れんが、其を買ふ迄にそんな規則が間に合ふと思つてゐなさるのか。今のは二つ共、元僧院に使つた建物なんでね

ヴァイオレット (稍自烈多相に其話を押退けて) まあ、そんな事はどうでもようござんす。其

よりはもつと真面目に話さうぢやありませんか。貴方でも無論今迄、真面目に話してゐたとは思つていらつしやらないでせうから

マロオン 否、そんな事はないぬ。私は皆真面目に云つてゐたんだ

ヴァイオレット それぢや貴方はまだ妾程ヘクタアさんを御承知ぢやないんですね。彼の方は浪漫的で、奇矯ですから——多分貴方から遺傳たんでせうが——是非ある種の妻が附いてゐなければならぬんです。つまり奇矯でない性質の女がですね

マロオン つまり貴女の様な人が、と云ふんだらうね

ヴァイオレット (沈着いて) まあ、さうですね。併し貴方は、彼の方の地位を保つて行く丈の資産は少しも下さらずに、妾に其役目を引受けるやうに仰つても其れは無理でせう

マロオン (駭いて) まあ待つて下さい、待つて下さい。此は少々勝手が異ふ様だ。私は別に何も貴女に引受て呉れと頼んだ覚えはない筈だが



ヴァイオレット え、無論貴方がさう曲解つてお聞になれば、妾はもう何も申せな  
なりませんよ

マロオン (半は面喰つて) 私は別に貴女を困らして如何のと云ふ氣はないが、それにし  
ても何だか話が側道に外れた様だ

ストレイカアは急いで来たらしい様子をして、小門を開けてヘクタアを通す。ヘクタアは怒つて呼吸  
をはずませながら芝生の上へ来る。さうして真直に父の方へ行かうとする。ヴァイオレットは仰天し  
て飛びながら男を阻隔てる。ストレイカアはすぐ下る。少なくとも話聲の聞える處に留つてゐる機な  
氣色は見せない

ヴァイオレット まあ、どうしやう。ねえ、貴夫、どうぞ今は何も仰らずに置いて下  
さいな。妾がお父さんとお話をして終ふ迄、何處ぞへ行らしてゐて下さい

ヘクタア (頑として) 否、いけない。僕は此事丈は是非此場で云つて退ける(女を押退け  
傍を通り越して父に向ふ。父の兩頬には愛蘭の血が湧立つて、だんく暗くなる) お父つあん、貴方  
は卑怯な事をしましたね

マロオン 何だと

ヘクタア 貴方は僕の手紙を開封け、僕の態をして此婦人をお騙しなすつたね。其は  
卑劣だ

マロオン (脅す様に) これ、ヘクタア、氣をつけて物を云はないか。氣をおつけよ。い  
か

ヘクタア 僕は氣をつけたんです。氣をつけてゐるんです。英國での名譽や地位を傷  
つけられない様に、氣をつけてゐるんです

マロオン (怒つて) お前の地位は私の金で買ったものだ。お前に其が解つてゐるか  
ヘクタア なに、貴方はあの手紙を開封たんで、もう其も此も滅茶くになつて終つ  
た。他人の名宛になつてゐる英國婦人からの手紙を——相對づくの、人目に觸れ  
さしてならない、内密の手紙、其を父に開封られるなんて。英國ぢやこんな事は、  
どうしたつて取返しが付きやしない。もう寧ろ二人共早く國へ歸つて終つた方が

いゝ位だ (二人の追放者の耻と聞か、照覽あれと云つた様に、無言に天に訴へる)

グアイオレット (本来争嫌處から、男を叱責めて) 無理を仰しやるもんぢやないのよ、ヘクタアさん。妾の手紙をお開封なすつたに、不思議はないぢやありませんか。彼人のお名前が上に書いてあつたんですもの

マロオン それ見よ。ヘクタア、お前には常識さへない。ロビンズン嬢ほんとに有難うヘクタア 僕も感謝します。よく云つて呉れました。僕の父爺にや貴女丈の知慧もないんだから

マロオン (怒つて拳を固めながら) これ、ヘクタア……

ヘクタア (怕ない勇氣をもつて) ヘクタア、ヘクタア、と怒鳴つたつて駄目ですよ、お父さん。内密の手紙は内密の手紙で、其をどうする事も出来ないでせう

アロオン (聲を張上げて) 私はお前なぞに云ひ負かされぢやないぞ、え、か

グアイオレット シッ! まあ〜どうぞ。皆様が歸つて來ました (父子は急に退められて、無

言に互に眼合つてゐる。此時タナアとラムズドゥンはオクテヴィアスとアンを先に立て、一緒に小門から入つて来る)

グアイオレット もうお歸りなすつたの

タナア アルハムブラは今日は開いて居なかつた

グアイオレット なんて間が悪いんでせう

タナアは前に進んで、やがてヘクタアと見狙れない老人との間に來る。二人は今にも組打しさうな風をしてゐる。タナアは説明を求める様に、代り〜二人の顔を見る。二人は拗れた様に眼を避けて、黙つて怒を養つてゐる

ラムズドゥン そんなに頭痛のするのに、日向へ出てゐて構はないのかね、ウアイオレ

ットさん

タナア アロオン君、君もう癒つたんかね

グアイオレット あゝ、茫乎してゐました。まだ始めての方もあつたんでしたね。アロオンさん、お父さんを御紹介なさらないんですか

ヘクタア (斷乎と) 否、しません。彼は僕の父ぢやないんです

マロオン (非常に怒つて) お前はお友達の前で、自分の父親を非認する氣か

ヅアイオレット あゝ、もうどうぞ争をなさらない様に

門の近傍にぶら／＼してゐたアンとオクタヴィアスは、驚の目を見交して慎ましげに石段を登つて庭へ行く。其處からは邪覺をせずに紛擾の見物も出来る。石段に行く途中アンは、ヅアイオレットと目を見交し、同情の印に顔を歪めて見せる。ヅアイオレットは小卓を背にして立ちながら、夫が莫大な父の財産には少しも目も呉れずに、ますます氣強くなつて行くのを、手出しも爲兼ねて、固つた様に見てゐる

ヘクタア ロビンズン嬢、貴女には誠にお氣の毒ですが、僕は主義のために争つてゐるんです。僕は親ある身で、又親に對しては相當に孝行な積りでゐます。併し僕は何より先に一個の男子です。で、父爺が僕の内密の手紙を自分の物の様に扱つたり、結婚問題に迄も口を挿んで、假んば幸に貴女の同意を得られるにしても結婚してはならないなど、云へば、僕もはい左様ならと云つて、自分の途を行か

なげやばなりまん

タナア ヲアイオレットさんと結婚するつて!

ラムズドゥン、君は如何かしてゐやしませんか

タナア 僕等の話した事をもう忘れて終つたんか

ヘクタア (自暴に) あんな事なんか構やしない

ラムズドゥン (驚き呆れて) 冗談ぢやない。途方もない事を! (義憤で兩肘を震はせ、投げる様に門の方へ行く)

タナア 又一人狂人が殖えた。こんな戀してゐる連中は、皆室にでも閉ぢ込めて、錠を下して置かなげやいけな (ヘクタアは逆も救はれない男と見限つて、門の方へ行かうとする。併しマロオンは新しい方に怒を向けて後を追つて来る。其言葉の調子が如何にも小癪なので、タナアも自然

立止なげやならなくなる)

マロオン 今のお話はどう云ふ譯かな。作が此婦人に釣合はないと云ひなさるのかな

タナア なに、此婦人にはもう夫があるんですよ。ヘクタア君は其を知つてゐる癖に、まだ迷ひが覺めずに、あんな事を云つてゐるんだ。早く連歸つて家に閉込めて置なさい

マロオン (苦々しく) あゝ、それぢや此が上品な社會の遣方で、其を私が物知らずの下卑た行爲で、先刻破壊して終つたと云ふんだな。人妻に懸想するなんて！ (腹立たしげにヘクタアとヴァイオレットの間に來て、殆んどヘクタアの左の耳邊で喊く様に云ふ) お前は到頭英國貴族社會の、あの嫌な癖に感染れたのかい

ヘクタア 何でもないんです。貴方はそんな事を構つて下さらなくつてもいい。私の遣つてゐる事の責任は私が負ひます

タナア (目を光らしてヘクタアの方へ進んで來る) アロオン君、よく云つた。君も矢張り詰らない結婚の法則其物は、道德ぢやないと思つてゐるんだね。僕は賛成だ。併し困つた事にやヴァイオレットさんは不賛成なんだが

マロオン 私も失禮だが其に賛成は出来ませんね (ヴァイオレットの方を向いて) これロビンスン夫人、或は眞實の名は何と云ふのか知らんが、貴女が他所の人妻であるのなら、倅にあんな手紙を遣ると云ふ法はない筈だ

ヘクタア (非常に凌辱を感じて) もう、辛棒は出来ない。お父さん、貴方は僕の妻を侮辱しましたね

マロオン なに、お前の妻を！

タナア 君が其探してゐた夫なんか。又一人道徳上の偽騙者が出來た (ボンと額を打つて、壞れる様にマロオンの椅子に掛ける)

マロオン お前は私に相談もせず結婚したのかい

ラムズドワン 君は故意に私等を騙しましたな

ヘクタア さあ、僕は今迄随分ひどく苛められて來た。ヴァイオレットと僕は結婚したんです、話は只それ丈だ。さあ、今度は何と云ひます、誰方にせよです

マロオン 私には私の言ふ事がある。ヴァイオレットさんは乞食の妻になつたんだ。  
 ヘクタア 否、乞食の妻ぢやない。勤勞者の妻になつたんだ。(彼の亞米利加流の發音は、此  
 勤勞者と云ふ素朴な、不評判な言葉に人を壓倒する様な力を與へる) 僕は今日からすぐ自立の途を  
 講じます

マロオン (腹立たし相に嘲笑つて) さう、お前は必つと昨日か今朝、私の手當を受取つた  
 から、其で強さうな事を云ふんだらう。其のなくなる迄待つて御覽、そんな生意  
 氣な口は利けないから

ヘクタア (紙入の内から手紙を取出して) さあ (父爺に突ける) さあ、早く此金を取つて貴方も  
 僕の生涯から消えて下さい。僕は金には用がない、序に貴方にも用がない。僕は  
 二千圓で妻を侮辱する権利は賣りません

マロオン (非常に氣を悪くして、物案じ顔に) ヘクタア、お前はまた貧乏とはどんな物か知らない  
 ヘクタア (熱した語氣で) だから、どんな物か知り度いと云ふんです。僕は男になりた

いんだ。さあ、ヴァイオレット一緒にお前の宅へ來なさい。僕は此から案内して上  
 げる

オクテヴィアス (庭から芝生へ飛降りて、ヘクタアの左手へ駈寄る) ヘクタア君、行く前に僕と握手  
 してくれたまへ。僕は口に云へない程君を尊敬してゐる (握手しながら感に打たれて殆  
 ど泣出しさうになる)

ヴァイオレット (同じく殆んど泣出し相に、併し此方は感に打たれてではなく、惱ましさからだ) 詰らない  
 事を云ふもんぢやないわね、テヴィさん。ヘクタアさんでも貴方でも勤勞なんか出  
 来るもんですか

タナア(ヘクタアの右側に、椅子から起上つて) 大丈夫だよマロオン夫人、ヘクタア君はまだ土方  
 になる氣遣はないから(ヘクタアに) 何か始める丈の資本なら、實際心配は要らない  
 よ。友達と思つて何日でも僕から引出したまへ

オクテヴィアス (衝動的に) でなげや僕から

マロオン (激しい嫉妬を起して) お前さん達の吝嗇な金なんか、誰が要ると云ふものか。倅は要れば自分の親から引出すに極まつてゐる(タナアとオクテヴィアスは思はずギョツとする。

—オクテヴィアスは氣を悪くし、タナアは金の問題の解決したので安心して。ヴァイオレットは頼母し相に顔を上げる) これ、ヘクタア、そんなに一克な事を云ふもんぢやない。私は先刻云つた事は後悔してゐる。私は決してヴァイオレットさんを侮辱する積りぢやなかつたんだ。あれは悉皆取消すよ。彼女は恰度お前にやい、女房だ。さあ、此でい、だらう

ヘクタア (父の肩を軽く叩いて) え、其ならい、です。もう何も云はないで下さい。此で仲直りしました。併し金丈は誰からも貰ひません

マロオン (意氣地なく頼む様に) そんなに情なく云ふもんぢやない。私はお前と仲直りして餓えさす位なら、仲達しても金を受取らした方がい、よ。お前はまた世間はどんなものか知らないが、私はよく知つてゐる

ヘクタア、**否否、否!** 其はもう極まつたんです。其はもう變へません。(頑として父

の傍を通り過ぎて、ヴァイオレットの傍へ行く) さあ、來なさい、ヴァイオレット。お前は此から僕と一緒に旅館へ移つて、天下晴れて僕の妻とならなければならんのだ

ヴァイオレット だけど妻一寸宅に行つて、デヴィスに荷物を括る様に云つて置かなければなりませんから、貴方は一足先へ行つて、妾に庭の見晴らせる室を取らす様に置いて下さいませんか。妾はつい三十分もしたら参りますから

ヘクタア よし。お父つあん、僕等と一緒に御飯を食べなさるでせうね

マロオン (どうぞして息子の心を和げやうと思つて) うむ、うむ、食べるとも

ヘクタア 後程又皆様とお目にかゝります (タナア、オクテヴィアス、ラムズドゥン等は、此時アンの後を追ふて庭に行つてゐる。ヘクタアはアンに手で合圖して、小門から出て行く。後に芝生の上にはマロオンとヴァイオレット丈しか残つてゐない。

マロオン ヴァイオレットさん、貴女は彼の目を醒してお呉れだらうね。いや、貴女な

ら必つと醒して呉れる

三五二

ヴァイオレット 妾は是迄彼の人が、あんなに剛情とは思つてゐませんでした。是からもあんな風でしたら、妾にはどうも致し様がないぢやありませんか

マロオン 決してすぐ投出して終はないでね。内側からの壓迫は遅いかも知れないが、此が一番確な奴だから。彼を折れさせるだらう。折れさせると云つてお呉れ  
ヴァイオレット え、出来る丈遣つて見ますわ。勿論妾はあんなにして、自分から態々貧乏になるのは詰らないと思つてゐますから

マロオン さうだと

ヴァイオレット (一寸思返して) あのお金を妾にお渡しなすつた方がよかないでせうか。旅館の勘定に要るかも知れませんが、受納す様に出来るかどうか試つて見ませう。無論今すぐぢやありませんが、その内に

マロオン (夢中に) さう、さう、さう。其が恰度い、だらう。(女に三千圓の小切手を渡して、

挨拶相に云ひ足す) 無論此はほんの獨身の時の手當でね

ヴァイオレット (冷やかに) はい、(受取る) 有難う。序ですがマロオンさん、先刻仰つたあの二軒の家ですね——そら元の僧院の建物ね

マロオン うむ、其を

ヴァイオレット 何れも妾の見る迄買はないで置いて下さいませんか。そんな家にはどこに悪い處があるかも知れませんが

マロオン 買はないとも。私は此から貴女に相談なしにや何もしないから大丈夫だよ  
ヴァイオレット (丁寧に、併し少しも有難いと云ふ風は見せずに) 有難う、さうして戴けば一番都合がい、でせう(沈着いた調子で、別荘へ歸つて行く。マロオンは庭の上端迄叩頭尾いて行く)

マナブ (マロオンのヴァイオレットと別れる時の、意氣地ない態度をラムズドゥンに指し示して) あれでもあの氣の毒な老爺は億萬長者で、今日の大立物の一人なんだからねえ。始めて自分を輕蔑する丈の面倒を厭はない女に逢へば、すぐあの通りバツク種の犬の様に、紐で

三五三

自由に引廻されるんだ。僕でも矢張りあんなになる時があるんだらうか（芝生の上へ降りて来る）

ラムズドゥン（後に尾いて来て） 君も早くあんなになれば、早い程幸福だよ

マロオン（庭を通つて戻りながら、手を拍つて喜ぶ） あれは倅にや大した女房だ。公爵夫人十人よりも彼女の方がよつぽどい、（芝生の上へ降りて、タナアとラムズドゥンの間に来る）

ラムズドゥン（億萬長者に大層愛嬌よく） こんな處でお目にかゝれたのは、思ひもかけない幸福です。アルハムブラでも買取においてなすつたんですか

マロオン さう、買はないとも限りませんが、西班牙政府の様にあんなにして置くのは惜しいものですからねえ。併し其で来たんぢやないんです。實を申すと一月程前に、ある處で二人連の男が、株券一束前に置いて、喧しく何か云ひ合つてゐるのが耳に入りましてね。つまり直段が折合はないんです。二人は若い上に慾が深く、實際其株券が一方で附けた丈の價值のあるものなら、今一方の要求してゐる

丈の價值もあるものだと言ふ事が分らないんです。何しろ額が少くつて、何方にしても大した違ぢやないんですからねえ。で、娯に私は其處へ割込んで、其株券を買取つたんですが、今日になつても何商賣だか分らない。事務所は此町で、名は有限責任メンドザ會社としてあるが、扱其メンドザ會社と云ふのは鑛山か、其とも汽船航路か、でなげや銀行か、其とも特許品………

タナア 其は人の名ですよ。僕は其を知つてゐるが、中々考への商賣的に出來た男です。後で一緒に僕等の自働車で町へ行つて、序に訪ねて見ませうか

マロオン さうして戴けますのなら、どうぞ。併し失禮ですが貴方は………

タナア ロオバック、ラムズドゥンさんと云つて、ヘクタ君の奥さんの、ずっと舊くからの知合の方です

マロオン ラムズドゥンさんですか、此は始めてお目にかゝりまして

ラムズドゥン いや此は始めて。タナア君も連中の一人なんです



マロオン お知合になりまして誠に……

タナア 有難う。(マロオンとラムズドンは大變睦まじ相に、小門から出て行く。タナアはアンと庭を徘徊してゐるオクテヴィアスに聲をかける) テヴィ(テヴィは階段の處へくる。タナアは大聲で叫く) 君の妹は山賊の金主と結婚したぜ (タナアは二人に追付く様に急いで出て行く。アンは不圖オクテヴィアスを驚まして見度い様な気分になつて、そろ／＼階段の方へ遣つて来る)

アン テヴィさん、貴方も一緒に行かないの

オクテヴィアス (さつと目に涙を浮べて) アンさん貴女は僕に行かさうなんて、人の心臓を抉る様な事を云ふんだねえ(女に顔を見られまいと芝生の上に降りる、女は愛撫す様に尾いて来る)

アン 可愛い、リッキイ、テイッキイ、テヴィさん。可愛い、心臓ね

オクテヴィアス 此心臓は貴女に捧げてあるんだよ。御免、僕は云はずにやゐられないんだ。僕は貴女を愛してゐる、貴女も其事は知つてゐるぢやないか

アン だつて駄目よ、テヴィさん。お母さんは妾をジャックさんと夫婦にするつもりで、

ちやあんとさう極めていらつしやるんだから

オクテヴィアス (呆れて) ジャック君と!

アン 随分をかしいわね

オクテヴィアス (忿怒がだん／＼昂じて来る) では、ジャック君は是迄始終僕を愚弄してゐたんだな。自分が夫婦にならうと思ふものだから、其で一心に僕になるなと云つてゐたんだな

アン(驚いて) 否、否、否、貴方はジャックさんに、妾がさう云つてゐたなんて思はせる様にしちやいけませんよ。ジャックさんには無論まだ自分で自分の心が分つてやしないんですから。併しお父さんの遺言状では、妾をジャックさんと夫婦にしたと思つていらしたのは確かだせう。其にお母さんはちやあんとさう極めていらつしやるんですから

オクテヴィアス 併し僕はいくら兩親の希望だつて、貴女が何日も其犠牲にならなげや

ならん譯はないと思ふ

アン お父さんは妾を愛してゐらしたし、お母さんも妾を愛してゐらつしやるんだから、自分の我儘を通すより、お二人の意思に従つた方が、必つと身の利益だと思ひますんで

オクテヴィアス 否、僕も貴女の我儘を立てないのはよく知つてゐる。併しねえ——こんな事を云へば、自分の利益に云ふ様でをかしいけど——此問題はもう一方からも考へて見なければならぬ様に思ふ。假令は貴女がジャック君を愛してゐないのなら、其で結婚しちやジャック君に可哀相ぢやないでせうか。其に又貴女が僕を愛して呉れられるのなら、そんなにして僕の幸福許りか、貴女の幸福迄滅茶くにして終ふのは、其はどうかと思ふんだ

アン (軽い憫みの心を起して相手を見守りながら) テヴィアさんてば、貴方ほんとにいゝ人ね。ほんとにいゝ坊ちあんねえ

オクテヴィアス (弱い氣になつて) たつた其丈?

アン (可哀相とは思つてゐるが、其でも聽る様に) 其丈でも大變ぢやありませんか。貴方は何日でも妾の踏む處を崇拜んで下さるわね

オクテヴィアス 崇拜みますとも。かう云ふと滑稽に聞えるかも知れんが、決して誇張ぢやないんです。崇拜みますとも、何日迄も崇拜みます

アン「何日迄も」と云ふのは永い言葉よ、テヴィアさん。で、妾は何日も貴方の理想通り、神様の様にしてゐなければならぬでせう。其は夫婦になつちや迎も妾には出来ませんが、若しかジャックさんと結婚したら、貴方は何日迄も迷ひが醒めずにゐられるでせう——少くとも妾が酷いお婆さんになつて終ふ迄はね

オクテヴィアス 僕も一緒に年が寄るぢやありませんか。而して僕は八十になつても、僕の愛してゐる女の一本の白髪は、若い美しい娘の濃い黄金色の總に勝つて、僕の心を動かします

アン (ホロツとして) あゝ、此は詩ですわねえ。テヅいさん、ほんとに詩ですわねえ。貴方のお言葉を聞くと、何だか急に前世の妙な反響を聞く様な気がします。而して此反響が妾には何日も人間が不死の魂を有つてゐる、強い證據の様に思はれてなりませんの

オクテグイアス ぢや、僕の云つた事を信じて呉れるでせう

アン テヅいさん、若しあれを眞實とすれば、貴方は妾を手離して、何日迄も心丈で思つてゐる様になさなければなりません

オクテグイアス、あゝ、(急いで小さい卓子の傍に座つて、両手で顔を覆ふ)

アン (堅く信ずる處ある様な口調で) テヅいさん妾は何を措いても貴方の迷を破り度かありません。妾は夫婦となる事も貴方を手離すことも出来ません。あゝ、恰度貴方にいゝ事を思付きました。貴方は妾のために何日迄も、氣の弱い獨身者で暮して下さらなげやなりません

オクテグイアス (絶望的に) アンさん、僕は自殺します

アン 否、そんな事をなすつちやいけません。其は妾に對して不親切です。其に今の様にしてゐるのも夫相應に面白いぢやありませんか。女に優しくしたり、始終オベラ通をしたり、可成な収入さへあつたら、倫敦ぢや失戀は決して不愉快な悩みではありませんよ

オクテグイアス (著しく熱が冷却る。併し自分では氣を取直した故と思つてゐる) 貴女は無論僕の利益を思つて云つて呉れてるんだらう。必つとジャック君から、少し位嘲笑すのは、僕にはいゝ、薬だと教はつて來たんだらう(殺と澄して立上る)

アン(ずる相に相手を熟々見て) それ御覽なさい、もう貴方の迷ひが醒めかけてるぢやありませんか。妾は其を怖れてゐたんです

オクテグイアス だつて貴女はジャック君の迷ひを醒すのは、怖れてゐやしないぢやないか

アン (悪戯好きな喜悅な顔に漲らして呷く) 駄目、ジャックさんは妾に迷なんか持つてやしません。妾は別な方からジャックさんを吃驚さして遣りますわ。悪い印象を取除くのは、他人の理想通りに行きよりは、ずつと〜容易いんですからねえ。え、妾は時々ジャックさんを有頂天にし上げますわ

オクテヴィアス (又種々な絶望の状態に歸つて、我知らず自分の失戀と、優しい態度とを味ひながら) 其はさうだらう。貴女なら始終有頂天にも出来るさ。其にジャック君の馬鹿が、貴女と結婚すれば慘になると思つてゐるんだ

アン え、今の處では其で困るの

オクテヴィアス (氣前を見せて) 貴女の愛してゐる事を、僕から話して上げやうか

アン (急いで) 否、否、そんな事をしやうものなら又逃げて終ひますから

オクテヴィアス (驚いて) ちや、貴女は嫌がる男と結婚しやうと云ふんですか

アン テヴィさん、貴方は随分妙な人ね。此方から眞面目にかゝつて行けば、誰だつ

て喜んで結婚しやうなんて云ふ人はあるもんぢやないわ。(女は人の悪相に笑ふ) こんな事を云へば、貴方は必つと嫌な氣がするでせう。ですけど、貴方でも御自分にはもう危険がなくなつたから、實際は心の裡で喜んでいらつしやるんでせう

オクテヴィアス (叱驚して) 喜んでゐるつて! (怒む様に) 僕にそんな事を云ふんですか

アン だつてほんとに苦痛なものなら、其上にまだ其をお求めなさる筈はないぢやありませんか

オクテヴィアス 僕は少許も其上求めてゐやしないぢやありませんか

アン 貴方は妾の愛してゐる事をジャックさんに云つて遣ると仰つたでせう。其は犧牲の心から出たのかも知れませんが、多少の満足があるからには違ないでせう。尤も此は貴方が詩人の故だからかも知れませんが、貴方は自分から鋭い刺に胸を押付けて鳴いてる小鳥の様な方ね

オクテヴィアス なに、其はごく單純な事なんです。僕は貴女を愛してゐて、貴女を幸

福にしたいと思つてゐるでせう。併し貴女は僕を愛してゐないから、自分では出  
来ない。其て他の人の手を藉りて貴女を幸福にしたいと思つてゐるんです

アン え、其は極く單純な事の様に見えますが、妾は人が何かする時に實際其理由  
がよく分つてしてゐるか如何かと思ひますの。ほんとに單純な事と云へば、直接  
自分の好きな物の處へ行つて、其を握む事とせう。妾は貴方を愛してゐない様に  
思ひますが、其でも時々貴方を男にして上げ度いと思ふ事もありますよ。貴方は  
ほんとに女には魯鈍いんだから

オクテヴィアス (殆んど冷淡に) 僕は其點では今の儘で満足してゐます

アン それなら貴方は女に近寄らないで、心丈で思つてゐる様になさらないでいけま  
せん。テヴィさん、妾はどんな事があつても、貴方とは結婚しませんよ

オクテヴィアス 僕も希望をかけてはゐません。自分の不運と諦めませう。併し貴女は  
知るまいが、そんなに云はれると僕は實に氣色が悪いんだ

アン ほんとに貴方は弱い氣ね。妙ねえ、貴方とヴァイオレットさんとあんなに異つ  
てゐるのは。ヴァイオレットさんは硬い、鐵の様な氣象ですけど

オクテヴィアス そんな事があるものか。妹だつて眞底は必つと女らしいに違ないん  
だ

アン (多少自烈多い氣味で) 何故そんな事を仰やるの。恂巧で、着實で、思慮深いのは、  
女らしくないんでせうか。貴方はヴァイオレットさんを、妾の様に馬鹿か、事に依  
つたら、もつと悪いものにもしたいと思つていらつしやるんでせうか

オクテヴィアス 貴女の様に馬鹿か、もつと悪いものだつて。なぜそんな事を云ふの  
アン いえ、なに、無論眞面目じゃないのよ。ですけど妾はヴァイオレットさんを非常  
に尊敬してゐますの。彼女は何でも自分の思通りに行きますから

オクテヴィアス (吐息して) 貴女も矢張りさうぢやないか

アン え、、だけど彼女は如何してか、人に甘へずに——人を夢中にさせずに——さ

うして行きますからねえ

三六六

オクテヴィアス (同胞相互には其方の情の冷やかな處から) 美貌は美貌だけど、ヴァイオレットには誰だつて、夢中になんかなれやしない  
ナン いえ、ならせる様にさへすれば、誰だつてなりませんとも  
オクテヴィアス 併し眞實に善い婦人なら、故意とそんな風に男の本能を操ぐる様な事はしないでせう

ナン (驚いて上に両手を差上げる) まあ、テヴィさん、テヴィさん、リッキイ、テイッキイ、テヴィさん、貴方の奥さんになる婦人は、まあほんとにどうでせう  
オクテヴィアス (甘やかした名を聞くと又元の感情が起つて) よう、アンさん、何故、何故、何

故そんな事を云ふのさ。苛めないでお呉れよ、僕には何の事か少許とも分らない  
ナン 假に其女が虚言を吐いたり、男を欺したりしたら如何します  
オクテヴィアス 貴女は苟且にも僕が——貴女を知り、貴女を愛した此僕が、そんな女

と結婚出来ると思つてゐますか

アン さあ。まあ何れにしても其が怜愍な女なら、貴方に結婚させやしないでせう。其でもうお終ひ。妾は今此上何も云ふ事は出来ません。許して遣ると云つて下さい。而して此話は此でもう極まつたと云つて下さい

オクテヴィアス 僕には許す事なんかありません。話も此で極りました。而して假んば僕の創が癒えないにしても、貴女に血の出る處丈は見せません

アン 終迄詩的ね。ちや、テヴィさん、左様なら (女は軽く男の頬を打つ。不圖接吻して遣り度い様な氣がする。其から又嫌な様な心が起つて中止し、終に庭を通つて別荘の内へ駆込む。オクテヴィアスは父車の傍へ退いて、頭を兩腕に載せながらひそ／＼泣く。

今迄ケラナダの店をうろつき廻つてゐたホワイトフィールド夫人は、此時小さい包を一杯入れた網袋を下げて門から入つて來、やがてオクテヴィアスを見る)

ホワイトフィールド夫人(オクテヴィアスに駆寄り、頭に手をかけて起す) テヴィさん、どうおしなの、ど

三六七

こか悪いの

三六八

オクテヴィアス 否、何でもありません、何でもありません

ホワイトフィールド夫人 (頭に手をかけた儘心配相に) だつて貴方は泣いてゐるでせう。ヴァイオレットさんの結婚の事?

オクテヴィアス 否、否、誰がヴァイオレットの事を話しました

ホワイトフィールド夫人 (頭を元の儘に復して) ロオバックさんと、あの氣味の悪い老寄の愛蘭人に途中で出逢ひましたの。眞實に何處も悪くないの。如何おしなの

オクテヴィアス (優しく) 何でもありません。——詰らないほんの失戀です。随分滑稽でせう

ホワイトフィールド夫人 だけど如何したと云ふんでせう。アンが何かしたの

オクテヴィアス いえ、あれはアンさんの故ぢやありません。其から僕は決して貴女を怨んではゐませんから

エロイトフィールド夫人 (叱驚して) 怨むつて何をてせう

オクテヴィアス (慰める様に相手の手を握つて) 何でもありません。今も貴女を怨まないと云つたでせう

ホワイトフィールド夫人 だけど妾は何もした覺はありませんもの。如何したと云ふんでせう

オクテヴィアス (悲しげに笑つて) まだ氣がつかませんか。無論其は貴女が、僕よりジャック君をアンさんの智にお撰びなすつたのは、至當だと思ひますが、僕はアンさんを愛してゐたものですから、あまり心持好かなかつたんです (立上り夫人から離れて、芝生の真中の方へ歩いて行く)

ホワイトフィールド夫人 (急いで尾いて行きながら) 妾が彼女をジャクさんに配偶したいと云つてゐるつて、アンがさう云つてゐたんですか

オクテヴィアス え、僕にさう云つてゐました

三六九

ホワイトフィールド夫人 (静つと考へて) 其ちやテヴィさん、貴方にはほんとにお氣の毒です  
ね。其は彼女が自分でジャックさんと結婚したいと思つてゐるのを、只さう云ふ風  
に云ふんですよ。妾の云ふ事や思念などをようこそ氣にかけるもんですか

オクテヴィアス 併しアンさんは自分でさう信じなげや、決してさうは云はないでせう。  
豈夫貴女は彼女がうううそを吐くとは思ひなさりやしないんでせう!

ホワイトフィールド夫人 まあ、どつちでもようござんす。若い人には貴方の様に何も知ら  
ずにあるのと、ジャックさんの様に何でも知つてゐるのと、何方がいゝものでせう  
ね (タナアが戻つて来る)

タナア やうやくマロンの父爺を片付けて来た。僕は彼を「有限責任メンドザ會社」  
に紹介して、後は如何でも相對て話を極める様に、二人の泥棒共を一緒に残して  
置いて来た。ヤア、テヴィ如何したんだ

オクテヴィアス 此ちや僕は顔を洗ひに行つて来なげやなららしい (ホワイトフィールド夫

人に) 貴女の思つてゐる事をタナア君に話して御覽なさい (タナアに) ジャック君、僕  
から云つて上げるが、アンさんも其には賛成なんだよ

タナア (オクテヴィアスの素振に間諜ついで) 何に賛成だつて?

オクテヴィアス ホワイトフィールド夫人の思つてゐられる事にさ (悲しげな、而も悪びれない様  
子で別荘の方へ行く)

タナア (ホワイトフィールド夫人に) 此奴はさつぱり分らない。貴女の思つてゐられる事つて  
其は何です。どんな事でも仕て上げますから

ホワイトフィールド夫人 (嬉しさうに鼻を塞らして) ほんとにジャックさん難有う (坐る。タナアは卓子  
から、も一つの椅子を持つて来て、すぐ傍に坐る。而して膝に兩肘を突いて静つと相手の云ふ事に注意する)  
どうした譯か知りませんが、他所のお子が皆こんなに親切に云つて下さるのに、  
なぜ妾の娘が妾を思つて呉れないんでせう。だからアンやロオダを貴方やテヴィさ  
んやヴァイレットさん達の様に思へないのは別に不思議はありません。なんて妙



な世中でせうねえ、昔は何でも皆素撲で卒直であつたものですが、今では物事をまつすぐに考へる者つたら一人もありません。大學教授のティンダルさんがベルファストであんな演説をなすつてから、何も彼も滅茶苦茶になつて終ひました。

タナア え、世中は僕等が前に思つてゐたよりは、づつと複雑になつて來ました。其はそうと、僕の爲て上げる事つて、どんなことです

ホライトフィールド夫人 其を今お話しやうと思つてゐたんですよ。貴方は無論妾が何と云はうと、アンと結婚なさるんでせうね

タナア (飛起きて) 僕こそ自分で如何云はうと、やがてアンさんと結婚させられて終ひさうなんですよ

ホライトフィールド夫人 (沈著拂つて) え、多分さうでせう。彼女が一度かうと思込んだら、夫こそ大變ですからね。併し其を妾の故にはしないで置いて下さいよ、それ丈お頼みして置きますから。只今テヴィさんの話では、妾が彼方を貴方に添はせたいと

云つてゐるつて、さう彼女が云つてゐたとかで、可哀さうにテヴィさんが、大變落膽してゐるんですよ。何しろ彼の人は彼女に氣があるんでせう。尤もテヴィさんは彼女を間違えて、其は好い娘の様に思つてゐるんですが。妾は無論さうは思ひません。併しテヴィさんには、アンが妾の思付もしない様な事でも、妾が望んでゐると云つて他人を欺す癖があると云つて上げてても、其は全く無駄で、却つて妾が悪く思はれるんですが、貴方にはそんな事はないんだから、若しか彼女と結婚なさるにしても、どうか其を妾の故にはしないで置いて下さいな

タナア (言葉強く) 僕は少許ともアンさんと、結婚しやうなんて思つてゐませんよ

ホライトフィールド夫人 (稍く) ジャックさん、彼女はテヴィさんより貴方によく似合ひますよ。貴方なら彼女も一寸我儘は云へないでせう。妾は彼女が適度い、相手に出逢すのが見たいんですよ

タナア どんな男でも大釘を打つた靴でも穿いて、手に火箸でも提げてゐなげや、兎

ても女の相手にやなれませんか。否、それにしても何日も勝つとは云へません。何れにしても、僕はアンさんに火箸を振廻す譯にや行かないから、只もう奴隷にされて終ふ丈です

ホワイトフィールド夫人 否、彼女は貴方には怖れてゐますから。何方にしても貴方なら、彼女に彼女の眞實の處を云つて聞かして下さるでせう。貴方なら妾から逃げる様な譯にや行きませんか

タナア 若し僕が彼女の信じてゐる道徳上の言葉で、彼女の實眞の處を云つて聞かしたら、誰でも僕を「酷い奴」と云ふに相違ない。第一彼女は時々あまり眞實でない事を云ふ

ホワイトフィールド夫人 嬉しい、貴方丈でも彼女の萬更天女でもない事を、分つてゐて下さるから

タナア つまり——夫が怒つて後構はずに云つて終ふ時の言葉を借りて云へば——彼

女は虚言吐です。其に彼女は自分で少しも結婚する氣もなしに、テヴィを夢中にさせて終つたから、「満足させる積りもなしに他に熱情を起させる女」を「男嬬」と呼ぶ、世間一般の定義で云へば、彼女は正しく「男嬬」だ。其に又彼女は面と向つて僕に、「虚言吐」と云はせたい許りに、貴方を虐めて喜んで僕を祭壇に捧げさす様にして終つたから、同時に「弱者虐」と云つてい、だらう。いくら彼女でも男は女の様に虐める譯にや行かない。其で男子には何日も億面なく自分の優れた容色を用ゐて、欲しい物を手に入れやうとする。此事から云へば彼女は殆んど人前で云へない賤しい名のつく女になつて終ひます

ホワイトフィールド夫人 (穩かに反對して) 其はジャックさん完全な人つてないものですよ

タナア 其はありません。併しアンさんの方ちやある様に思つてゐるんだから堪らな。僕は無論彼女に就て云つた、虚言吐、弱者虐、男嬬など云ふ事は、實は誰にでも云へる事で、元來そんな事をやかましく云ふのが間違だと思つてゐる。人は

誰でも虚言は吐く、弱い者も虐めて差支ない限りは虐め、自分の力量で得やうとはせず、絶えず何かで賞讃を博したいと思ひ、容色、風貌の魔力から、得られる丈の物を得たいとも思つてゐる。だから彼女も此事實を認めるのなら、僕は決して争ひはしない。併し彼女は其は認めないんだ。で、若しやがて二人が小供を持つて、其小供が虚言でも吐いたら、其をよい事にして、面白半分に打擲するかも知れない。若し他の女が僕に色目を使つたら、其は只の男黝ぢやないと云ひ出すかも知れない。彼女は他の者には因襲的道德の命ずる通りにさせて、自分丈好勝手をしやうと云ふんだ。つまり僕はどんな事でも我慢するが、彼女の厭はしい偽善丈は如何しても我慢出来ない。實は其で困るんです

ホワイトフィールド夫人 (自分の思つてゐる事を、かくも巧に言現はされたの聞く嬉しさに、我知らず釣込まれて)

え、彼女は偽善者ですとも。偽善者、偽善者、ほんとに偽善者ですよ

タナア ちや何故そんな女を僕に配偶さうと云ふんです

ホワイトフィールド (喧嘩聲で) そら又妾の故だ。妾はテヴィさんから、先刻妾がさう思つて

ゐると、アンが云つてゐたと云ふ話を聞く迄、そんな事は思付もしなかつたんです。併し妾はテヴィさんが好で、倅の様に思つてゐるんですから、彼の人は踏付物にさせたり、惨な目に逢はせたりしたくないんですよ

タナア 併し僕なら構はないと云ふんですね

ホワイトフィールド夫人 否さ、貴方は違ひますよ。貴方は大丈夫で、彼女に踏付物にされる氣遣はありませんから。其にどつちにしても、彼女は誰かと配偶さなければならぬでせう

タナア ハ、「生の本能」が云はせるんだな。貴女は彼女を憎み嫌つてゐるが、其でも夫は見付けて遣らなげやならんと思つてゐるんですね

ホワイトフィールド夫人 (驚いて立上る) まあ、妾が自分の娘を憎み嫌つてゐるんですつて。妾が只彼女の缺點に氣がついてゐるからつて、そんな邪悪つた不都合な者の様に

云ふものぢやありませんよ

三七八

タナア (皮肉に) ぢや、彼女を愛してゐるんですか

ホワイトフィールド夫人 え、愛してゐますとも。なんて貴方は妙な事を云ふ人でせうね。誰だつて身内の者を愛せざにゐられないぢやありませんか

タナア まあ、さう云つて置けば喧嘩が起らなくつていゝかも知れん。併し僕から云へば同族關係の自然の根柢は、生付持つてゐる憎悪である様に思はれてなりません (立上る)

ホワイトフィールド夫人 ジャックさん、その様な事は云ふもんぢやありませんよ。其から彼女には貴方と話してゐた事を、内密にして置いて下さいな、妾は一寸只貴方とテツイさんに言譯して置き度いと思つた丈ですから。黙つてゐて、又何も彼も妾の故にされるのは堪りませんからねえ

タナア (丁寧に) さうですとも

ホワイトフィールド夫人 (物足らぬ様に思つて)

其に妾はあんな事を云つて却つて工合を悪くして終つた。テツイさんは妾がアンを崇拜しないと云つて怒つてゐるし、かと云つて又彼女が貴方と夫婦にならなげやならんと云つてゐると聞けば、其は彼女には適度いゝでせうと云ふより、他に妾にや言様がないぢやありませんか

タナア 有難う

ホワイトフィールド夫人 そんな變にして、妾の云つた事を、全く思付もしない様な意味に、曲解で聞かなくつてもいゝぢやありませんか。妾は公平に聞いて貰はなげや……

アンが別荘から出て来る。續いて間もなくツイオレットも外出の装をして出て来る

アン (氣味の悪い程優雅に母の右手へ遣つて来ながら) あら、お母さんてば、ジャックさんと面白いお話をしていらしたのね。貴女の聲は何處からでも聞えますよ

ホワイトフィールド夫人 (腹を潰して) お前はあれを聞いて……

タナア 大丈夫ですよ。アンさんは只……なに、僕等は今彼女の癖の話をしてゐたん

三七九